

草枕

夏目漱石



山路やまみちを登りながら、こう考えた。

智ちに働けば角かどが立つ。情じょうに棹さおさせば流される。意地いぢを通せばとお窮屈きゆうくつだ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高こうじると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟さとった時、詩が生れて、画えが出来る。

人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りょうどこなりにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほ

どか、寛容くわんりやうで、東つかの間の命まを、東の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命しめいが降くだる。あらゆる芸術の士は人の世を長閑のどかにし、人の心を豊かにするが故ゆえに尊たつとい。

住みにくき世から、住みにくき煩わづらいを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画えである。あるは音楽と彫刻である。こまかに云いえば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧わく。着想を紙に落さぬとも珍きゆうそう鏘おんの音は胸裏きょうりに起おこる。丹青たんせいは画架がに向つて塗抹とまつせんでも五彩ごさいの絢爛けんらんは自おのずから心眼しんがんに映る。ただおのが住む世を、かく観かんじ得て、霊台れいだい方寸ほうすんのカメラに澆季ぎやうき溷濁こんだくの俗界を清くうららかに収め得うれば足たる。この故に無声むせいの詩人には一句なく、無色むしよくの画家には尺縑せつけんなきも、かく人世じんせいを観じ得るの点において、かく

煩悩ぼんのうを解脱げだつするの点において、かく清浄界しやうじやうかいに出入し得るの点において、またこの不同不二ふどうふじの乾坤けんこんを建立こんりゆうし得るの点において、がりしよく我利私慾がしよくの羈絆きはんを掃蕩そうとうするの点において、——千金せんぎんの子よりも、ばんじょう万乗ばんじょうの君よりも、あらゆる俗界ちやうじの寵児ちやうじよりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐かひある世と知つた。二十五年にして明暗ひやうりは表裏ひやうりのごとく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日こんにちはこう思っている。——喜びの深きとき憂うれいいよいよ深く、楽たのしみの大いなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖ふえれば寝ねる間まも心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえつて恋しかる。閣僚の肩は数百万人の足を支ささえている。背中せなかには重い天下がおぶさっている。うまい物も食わねば惜しい。少し

食えば飽き足らぬ。存分食えばあとが不愉快だ。……

余の考がここまで漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つために、すわやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけて絵の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸いと何の事もなかつた。立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。杉か檜か分からないが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだんに棚引いて、続き目が確と見えぬくらい靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然している。行く手は二

丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布けつとが動いて来るのを見る、登ればあすこへ出るのだろう。路はすこぶる難義なんぎだ。

土をならすだけならさほど手間てまも入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平たいらにしても石は平らにならぬ。石は切り砕いても、岩は始末がつかぬ。掘崩ほりくずした土の上に悠然ゆうぜんと峙そばだつて、吾らのために道を譲る景色けしきはない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖いわのない所でさえ歩あるきよくはない。左右が高くつて、中心が窪くぼんで、まるで一間幅はばを三角に穿くつて、その頂点が真中まんなかを貫つらぬいていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を渉わたると云う方が適當だ。固もとより急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲ななまがりへかかる。

たちまち足の下で雲雀ひばりの声が出した。谷を見下みおろしたが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。

せつせと忙せわしく、絶間たえまなく鳴ないている。方幾里ほういくりの空気が一面に  
蚤のみに刺さされていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音ね  
には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあ  
かし、また鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。その上ど  
こまでも登のぼって行く、いつまでも登のぼって行く。雲雀はきつと雲  
の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句あげくは、流れて雲に入いって、  
漂ただようているうちに形は消えてなくなつて、ただ声だけが空の裡うち  
に残るのかも知れない。

巖角いわかどを鋭いどく廻まつて、按摩あんまなら真逆まっさかさま様に落おつるところを、際きわ

どく右へ切れて、横に見下みおろすと、菜なの花が一面に見える。雲雀  
はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金こがねの原から飛  
び上がってくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上あがる雲雀ひばり  
が十文字にすれ違ちがうのかと思つた。最後に、落ちる時も、上あ

時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつづけるだ  
ろうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事  
を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。た  
だ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたと  
きに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではな  
い、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたもののうち  
で、あれほど元氣のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、  
こう愉快になるのが詩である。

たちまちシエレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちに覚え  
たところだけ暗誦して見たが、覚えているところは二三句しか  
なかつた。その二三句のなかにこんなのがある。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前をみては、後えしりを見ては、物欲ものほしと、あこがるるかなわれ。腹からの、笑といえど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極きわみの歌に、悲しさの、極きわみの想おもい、籠こもるとぞ知れ」

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳わけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛ばんこくの愁うれいなどと云う字がある。詩人だから万斛ばんこくで素人しろうとなら一合ごうで済すむかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性ぼんこつで、凡骨ぼんこつの倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の

かなしみ  
悲も多かろう。そんならば詩人になるのも考え物だ。

しばらくは路が平で、右は雑木山、左は菜の花の見つづけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のような葉が遠慮なく四方へにして真中に黄色な珠を擁護している。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座している。呑気なものだ。また考えをつづける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も——桜はいつか見えなくなつた。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬくらいの事だ

ろう。

しかし苦しみのないのはなぜだろう。ただこの景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩である以上は地面を貫つて、開拓する気にもならねば、鉄道をかけて一儲けする見も起らぬ。ただこの景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛国も結構だろ。しかし自身がその局に当れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んでしまふ。したがってどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて見ている。見たり読んだりする間だけは詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云う点に存するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒は常よりは余計に活動するだろう。それが嫌だ。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きし

た上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌の純粹なるものもこの境を解脱する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を弁じている。いくら詩的になつても地面の上を馳けてあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊きくをとるとうりのもとゆうぜんとしてなんざんをみる。悠然見南山。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中

をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いて  
 る訳でもなければ、南山なんざんに親友が奉職している次第でもない。超  
 然しゅつせけんてきと出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。独  
 ゆうこうのうちにごし きんをだんじてまたちようしようす しんりんひとしらず めいげつきたりてあいてらす  
 坐幽篁裏、 弾琴 復長嘯、 深林人不知、 明月来相照。  
 ただ二十字のうちに優ゆうに別乾坤べつけんこんを建立こんりゆうしている。この乾坤の功德くどく  
 は「不如帰ほととぎす」や「金色夜叉こんじぎやしや」の功德ではない。汽船、汽車、権  
 利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後のちに、すべてを忘却してぐつ  
 すり寝込むような功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩  
 味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人も  
 みんな、西洋人にかぶれているから、わざわざ呑気のんきな扁舟へんしゆうを泛うか  
 べてこの桃源とうげんに溯さかのぼるものはないようだ。余は固もとより詩人を職業  
 にしておらんから、王維おういや淵明えんめいの境界きようがいを今の世に布教ふきょうして広げ

ようと云う心掛も何もない。ただ自分にはこう云う感興が演芸会よりも舞踏会よりも薬になるように思われる。ファウストよりも、ハムレットよりもありがたく考えられる。こうやって、ただ一人ひとり絵の具箱と三脚さんぎやくき几を担かついで春の山路やまじをのそのそあるくのも全くこれがためである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間までも非人情ひにんじようの天地に逍遙しやうようしたいからの願ねがい。一つの酔興すいきようだ。

もちろん人間のいちぶんし一分子だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続くわけ訳には行かぬ。淵明だって年ねんが年中ねんじゆうなんざん南山を見詰めていたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪たけやぶの中に蚊帳かやを釣らずに寝た男でもなからう。やはり余った菊は花屋へ売りこかして、生はえた筍たけのこは八百屋やおやへ払い下げたものと思う。こう云う余もその通り。いくら雲雀と菜の花が気に入つたつて、山のなかへ

野宿するほど非人情が募つつてはおらん。こんな所でも人間に逢あう。じんじん端折ぼしよりの頬冠ほおかむりや、赤い腰卷こしまきの姉あねさんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢う。百万本の檜ひのきに取り囲まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑のんだり吐いたりしても、人の臭においはなかなか取れない。それどころか、山を越えて落ちつく先の、今宵こよいの宿は那古井なこいの温泉場おんせんばだ。

ただ、物は見様みようでどうでもなる。レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子に告こげた言ことばに、あの鐘かねの音おとを聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見様次第みようしだいでいかようと見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、そのつもりで人間を見たら、浮世うきよ小路こうじの何軒目に狭苦しく暮した時とは違ちがうだろう。よし全く人情を離れる事が出来んでも、せめて御能拜見おのうはいけんの時くらいは淡い心持ちにはなれそうなも

のだ。能にも人情はある。七騎落しちきおちでも、墨田川すみだがわでも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分じょうぶげいで見せるわざだ。我らが能から享うけるありがた味は下界の人情をよくそのまゝに写す手際てぎわから出てくるのではない。そのまゝの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長ゆうちやうな振舞ふるまいをするからである。

しばらくこの旅中りよちゆうに起る出来事と、旅中に出逢であう人間を能の仕組しくみと能役者の所作しよさに見立てたらどうだろう。まるで人情を棄すてる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕こぎつけたいものだ。南山なんざんや幽篁ゆうこうとは性の違ちがつたものに相違ないし、また雲雀ひばりや菜の花といつしよにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視みてみたい。芭蕉ばしやうと云

う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立ててて発句にした。  
余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、  
爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出さ  
れたものと仮定して取こなしで見よう。もつとも画中の人物と  
違つて、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普  
通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐつて、心理作  
用に立ち入ったり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動  
いても構わない。画中の人間が動くと思えば差し支ない。画中  
の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面  
以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こつちと衝突  
したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になれば  
なるほど美的に見ている訳に行かなくなる。これから逢う人間  
には超然と遠き上から見物する気で、人情の電気がむやみに双

方で起らないようにする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐ふところには容易に飛び込めない訳だから、つまりは画えの前へ立つて、画中の人物が画面の中うちをあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間あいだ三尺も隔へだてていれば落ちついて見られる。あぶな気げなしに見られる。言ことばを換かえて云えば、利害に氣を奪うばわれないから、全力を拵あげて彼らの動作を芸術の方面から觀察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑒識かんしきする事が出来る。

ここまで決心をした時、空があやしくなつて来た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠垂もたれ懸かかつていたと思つたが、いつのまにか、崩くずれ出だして、四方しほうはただ雲の海かと怪あやしまれる中から、しとしとと春の雨が降り出した。菜の花は疾とくに通り過して、今は山と山の間を行くのだが、雨の糸こまやが濃こまやかでほとんど霧あざむを欺あざむく

くらいだから、隔<sup>へだ</sup>たりはどれほどかわからぬ。時々風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の背<sup>せ</sup>が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔<sup>へだ</sup>てて向うが脈の走っている所らしい。左はずぐ山の裾<sup>すそ</sup>と見える。深く罩<sup>こ</sup>める雨の奥から松らしいものが、ちよくちよく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存<sup>ぞん</sup>外<sup>がい</sup>広くなつて、かつ平<sup>たい</sup>だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂<sup>あまだ</sup>れがぼたりぼたりと落つる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子<sup>まご</sup>がふうとあらわれた。

「ここらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡<sup>ぬ</sup>れたね」

まだ十五丁かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画<sup>かげえ</sup>の

ように雨につつまれて、またふうと消えた。

糠ぬかのように見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋ひとすじごとに風に捲まかれる様さままでが目に入る。羽織はとくに濡れ尽つくして肌着に浸しみ込んだ水が、身体からだの温度ぬくもりで生暖なまく感ぜられる。気持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩行あるく。

茫々ぼうぼうたる薄墨色うすずみいろの世界を、幾条いくじょうの銀箭ぎんせんが斜めななに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも咏よまれる。有体ありていなる己おのれを忘れ尽つくして純客観じゆんかくかんに眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保たもつ。ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間に、われはすでに詩中の人にもあらず、画が裡りの人にもあらず。依然として市井しせいの一豎子じゆしに過ぎぬ。雲煙飛動おもむぎの趣も眼に入らぬ。落花啼鳥らつかていちようの情けも心に浮ばぬ。蕭々しょうしょうと

して独り春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ。  
初めは帽を傾けて歩いた。後にはただ足の甲のみを見詰めてあ  
るいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩いた。雨は満目の  
樹梢を揺かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎたよ  
うだ。

## 二

「おい」と声を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は  
見えない。五六足の草鞋が淋しそうに庇から吊されて、屈托気  
にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子子の箱が三つばかり並んで、  
そばに五厘銭と文久銭が散らばっている。

「おい」とまた声をかける。土間の隅すみに片寄せてある白うすの上に、ふくれていた鶏にわとりが、驚ろいて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外とべつちいに土竈どべつちいが、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変わつてる上に、真黒な茶釜ちやがまがかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸い下は焚たきつけてある。

返事がないから、無断でずつと這入はいつて、床几しょうぎの上へ腰を卸おろした。鶏にわとりは羽搏はばたきをして白うすから飛び下りる。今度は畳の上へあがつた。障子しょうじがしめてなければ奥まで馳かけぬける気かも知れない。雄が太い声でこけつこつこと云うと、雌が細い声でけけつこつこと云う。まるで余を狐か狗いぬのように考えているらしい。床几の上には一升枡いっしやうますほどな煙草盆たばこぼんが閑静に控えて、中にはとぐろを捲まいた線香が、日の移るの知らぬ顔で、すこぶる悠長ゆうちやうに燻いぶっている。雨はしだいに収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤すすけた障子がさらりと開あく。なかから一人の婆おばさんが出る。

どうせ誰か出るだろうとは思っていた。竈へっぴに火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は吞のん気に燻いっている。どうせ出るにはきまつている。しかし自分の見世みせを明あけ放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事が無いのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。その上出て来た婆おばさんの顔が気に入った。

二三年前宝生ほうしょうの舞台で高砂たかさしを見た事がある。その時これはうつくしい活人画かつじんがだと思つた。箒ほうきを担かついだ爺おやさんが橋懸はしがかりを五六歩来て、そろりと後向うしろむきになつて、婆さんと向い合う。その向い合あうた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔がほと

んど真<sup>ま</sup>むきに見えたから、ああうつくしいと思った時に、その表情はぴしやりと心のカメラへ焼き付いてしまった。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「御婆さん、ここをちよつと借りたよ」

「はい、これは、いっこう存じませんで」

「だいぶ降つたね」

「あいにくな御天気で、さぞ御困りで御座んしよ。おおおだいぶお濡<sup>ぬ</sup>れなさつた。今火を焚<sup>た</sup>いて乾<sup>かわ</sup>かして上げましよ」

「そこをもう少し燃<sup>も</sup>しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、ただいま焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しっしつと二声<sup>ふたこえ</sup>で鶏<sup>にわとり</sup>を追い下<sup>さ</sup>げる。ここここと馳<sup>か</sup>け出した夫婦は、焦茶色<sup>こげちやいろ</sup>の畳から、駄菓子箱の中を踏

みつけて、往来へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞ふんを垂たれた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか剝くり抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦こげている底に、一筆ひとふでがきの梅の花が三輪無雑作むざうさに焼き付けられている。

「御菓子を」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ごまねじと微塵棒みじんぼうを持つてくる。糞ふんはどこぞに着いておらぬかと眺ながめて見たが、それは箱のなかに取り残こされていた。

婆さんは袖無そでなしの上から、襷たすきをかけて、竈へつついの前へうづくまる。余ふところは懐から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話しをしかける。

「閑静でいいね」

「へえ、御覧の通りの山里やまぢりで」

「鶯は鳴くかね」  
うぐいす

「ええ毎日のように鳴きます。此辺は夏も鳴きます」  
こしら

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなお聞きたい」

「あいにく今日は——先刻の雨でどこぞへ逃げました」  
きょう さつき

折りから、竈のうちが、ぱちぱちと鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。さぞ御寒かろ」と云う。軒端を見ると青い煙りが、突き当つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「ああ、好い心持ちだ、御蔭で生き返つた」  
おかげ

「いい具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」  
てんぐいわ

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしとばかりに吹き払う山嵐の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もな

く晴れ尽して、老嫗ろうろうの指さす方かたに嶮岨さんがんと、あら削りけずの柱のごとく聳そびえるのが天狗岩だそうだ。

余はまず天狗巖を眺ながめて、次に婆ばあさんを眺めて、三度目には半はんはん々に両方を見比みくらべた。画家として余が頭のなかに存在する婆ばあさんの顔は高砂たかさごの媪ばばと、蘆雪ろせつのかいた山姥やまうばのみである。蘆雪の凶を見たとき、理想の婆ばあさんは物凄ものすこいものだと感じた。紅葉もみぢのなかか、寒い月の下に置くべきものと考えた。宝生ほうしょうの別会能べっかいのうを観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚ろいた。あの面めんは定めて名人の刻んだものだろう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏おだやかに、あたたかに見える。金屏きんびょうにも、春風はるかぜにも、あはは桜にもあしらって差し支さない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳かざして、遠く向うを指ゆびしている、袖無し姿

の婆さんを、春の山路やまじの景物として恰好かっこうなものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端とたんに、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰てもちぶさたに写生帖を、火にあてて乾かわかしながら、

「御婆さん、丈夫そうだね」と訊たずねた。

「はい。ありがたい事に達者で——針も持ちます、苧おもうみます、御団子おだんごの粉こも磨ひきます」

この御婆さんに石臼いしうすを挽ひかして見たくなつた。しかしそんな注文も出来ぬから、  
「ここから那古井なこいまでは一里足たらずだつたね」と別な事を聞いて見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那だんなは湯治とうじに御越おこしで……」

「込み合わなければ、少し逗留とまりゆうしようかと思うが、まあ気が向

けばさ」

「いえ、戦争が始まりましたから、頓とんと参るものは御座いませ  
ん。まるで締め切り同様に御座います」

「妙な事だね。それじゃ泊とめてくれないかも知れんね」

「いえ、御頼みになればいつでも宿とめます」

「宿屋はたつた一軒だったね」

「へえ、志保しほ田ださんと御聞きになればすぐわかります。村のも  
のもちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」

「じゃ御客がなくても平気な訳だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前ちよつと行つた事がある」

会話はちよつと途切とぎれる。帳面をあけて先刻さつきの鶏を静かに写  
生していると、落ちついた耳の底へじやらんじやらんと云う馬

の鈴が聴え出した。この声がおのずと、拍子をとつて頭の中に一種の調子が出来る。眠りながら、夢に隣りの白の音に誘われるような心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らしている。今の世の馬とは思われない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に気楽な響がこもつて、どう考えても画にかいた声だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と、今度は斜に書きつけたが、書いて見て、これは自分の句でないといふ気がついた。

「また誰ぞ来ました」と婆さんが半ば独り言のように云う。

ただ一条の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。最前逢うた五六匹のじゃらんじゃらんもことごとくこの婆さんの腹の中でまた誰ぞ来たと思われては山を下り、思われては山を登ったのだらう。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭えば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からじゃらん、じゃらんを数え尽くして、今日の白頭に至ったのだらう。

馬子唄や白髪も染めで暮るる春

と次のページへ認めしたが、これでは自分の感じを云い終せない、もう少し工夫のありそうなものと、鉛筆の先を見詰めながら考えた。何でも白髪という字を入れて、幾代の節と云う句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、

「はい、今日は」と実物の馬子が店先に留とまって大きな声をかける。

「おや源さんか。また城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「そうさ、鍛冶町かじちようを通つたら、娘に靈巖寺れいがんじの御札おふだを一枚もらつてきておくれなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。——御秋おあきさんは善よい所へ片づいて仕合せだ。な、御叔母おぼさん」

「ありがたい事に今日こんにちには困りません。まあ仕合せと云うのだからか」

「仕合せとも、御前。あの那古井なこいの嬢さまと比べて御覽」

「本当に御気の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合が いいかい」

「なあに、相変らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫なでる。

えだしげ

枝繁き山桜の葉も花も、深い空から落ちたままなる雨の塊かたま

りを、しつぽりと宿していたが、この時わたる風に足をすくわ

れて、いたたまれずに、仮かりの住居すまいを、さらさらと転ころげ落ちる。

馬は驚ろいて、長たてがみい鬣うえしたを上下うへしたに振る。

「コーラツ」と叱しかりつける源さんの声が、じゃらん、じゃらん

と共に余の冥想めいそうを破る。

御婆さんが云う。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、

まだ眼前めさきに散らついている。

裾すそ模様もようの振袖ふりそでに、高島田たかしまだで、馬に

乗つて……」

「そうさ、船ではなかった。馬であつた。やはりここで休んで

行つたな、御叔母おさん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまったとき、桜の花がほろほろと落ちて、せつかくの島田に斑ふが出来ました」

余はまた写生帖をあける。この景色は画えにもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装いしやうも髪も馬も桜もはつきりと

目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかつた。

しばらくあの顔か、この顔か、と思索そさくしているうちに、ミレー

のかいた、オフエリヤの面影おもかげが忽然こつぜんと出て来て、高島田の下へ

すぼりとはまった。これは駄目だと、せつかくの図面さつそくを早速取

り崩くずす。衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立さぐりから奇麗きれいに立

ち退のいたが、オフェリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧もうろうと胸の底に残つて、棕櫚しゅろぼうき箒で煙を払うように、さつぱりしなかつた。空に尾を曳ひく彗星すいせいの何となく妙な気になる。

「それじゃ、まあ御免」と源さんが挨拶あいさつする。

「帰りにまた御寄おより。あいにくの降りななまがで七曲りは難義なまがだろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行あるき出す。源さんの馬も歩行あるき出す。じゃらんじゃらん。

「あれは那古井なこいの男かい」

「はい、那古井なこいの源兵衛で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠とうげを越したのかい」

「志保田の嬢ぢやう様が城下へ御輿おこし入いれのときに、嬢ぢやう様を青馬あおに乗せて、源兵衛が羈はづな縵ひを牽ひいて通りました。——月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡にむか対うときのみ、わが頭の白きをかこ啣つものは幸の部に属する人である。指を折つて始めて、五年の流光に、転輪の疾とき趣おもむきを解し得たる婆さんは、人間としてはむしろ仙せんに近づける方だろう。余はこう答えた。

「さぞ美しくしかったろう。見にくればよかった」

「ハハハ今でも御覧になれます。湯治場とうじばへ御越しなされれば、きつと出て御挨拶をなされましょう」

「はあ、今では里にいるのかい。やはり裾模様すそもようの振袖ふりそでを着て、高島田たかしまだに結むすつていればいいが」

「たのんで御覧なされ。着て見せましょ」

余はまさかと思つたが、婆さんの様子は存外真面目まじめである。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云う。

「嬢様と長良ながらの乙女おとめとはよく似ております」

「顔がかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔むかしこの村に長良の乙女と云う、美ちくしい長者ちやうじやの娘が御座り

ましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想けそうして、あなた」

「なるほど」

「ささだ男に靡なびこうか、ささべ男に靡なびこうかと、娘はあけくれ  
思わづらい煩わづらつたが、どちらへも靡なびきかねて、とうとう

あきづけばをばなが上に置く露つゆの、けぬべくもわは、おも  
ほゆるかも

と云う歌を咏よんで、淵川ふちかわへ身を投げて果はてました」

余はこんな山里へ来て、こんな婆おばさんから、こんな古雅こがな言葉で、こんな古雅な話をきこうとは思いがけなかつた。

「これから五丁東へ下くだると、道端みちばたに五輪塔ごりんとうが御座んす。ついでに長良ながらの乙女おとめの墓を見て御行きなされ」

余は心のうちには是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつづける。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟たたりました。一人は嬢様が京都へ修行に出て御出おいでの頃御逢おあいなさつたので、一人はこの城下で随一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどつちへ靡ないたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由わけもありましたろが、親おやご様が無理にこちらへ取りき

めて……」

「めでたく、淵川ふちかわへ身を投げんでも済んだ訳だね」

「ところが——先方さきでも器量望みで御貫おもらいなさったのだから、随分大事にはなさったかも知れませぬが、もともと強しいられて御出なされたのだから、どうも折合おりあいがわるくて、御親類でもだいぶ御心配の様子で御座りました。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々ごくごく内気うちまきの優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなって、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

これからさきを聞くと、せつかくの趣向しゅこうが壊こわれる。ようやく仙人になりかけたところを、誰か来て羽衣はごろもを帰せ帰せと催促さいそくす

るような気がする。七曲りの険を冒して、やつとの思で、ここま  
で来たものを、そうむやみに俗界に引きずり下されては、飄然  
と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると、  
浮世の臭いが毛孔から染込んで、垢で身体が重くなる。  
「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十銭銀貨を一枚床几の  
上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁ほどの近道になり  
ます。路はわるいが、御若い方にはその方がよろしかる。――  
これは多分に御茶代を――気をつけて御越しなされ」

## 三

昨夕は妙な気持ちでした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭ぐあいの作り方は無論、東西の区別さえわからなかつた。何だか廻廊かいりやうのような所をしきりに引き廻されて、しまいに六畳ほどの小さな座敷へ入れられた。昔むかし来た時とはまるで見当が違ふ。晚餐ばんさんを済まして、湯に入いつて、室へやへ帰つて茶を飲んでみると、小女こおんなが来て床とこを延のべよかと云いう。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の取次とりつぎも、晩食ばんめしの給仕きよひも、湯壺ゆづぼへの案内も、床を敷く面倒も、ことごとくこの小女一人で弁じている。それで口は滅多めつたにきかぬ。と云うて、田舎染いなかじみてもおらぬ。赤い帯いろうけを色気なく結んで、古風な紙燭しそくをつけて、廊下はしごだんのような、梯子段はしごだんのような所をぐるぐる廻わらされた時、同じ帯の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、すでに自分ながら、カン

ヴァスの中を往来しているような気がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段ふだん使っている部屋で我慢してくれと云った。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい、言葉を述べて、出て行つたが、その足音が、例の曲りくねった廊下を、次第に下の方へ遠とおいかつた時に、あとがひつそりとして、人の気けがしないのが気になつた。

生れてから、こんな経験はただ一度しかない。昔むかし房州ぼうしゅうを館山たてやまから向うへ突き抜けて、上総かづさから銚子ちょうしまで浜伝いに歩行あるいた事がある。その時ある晩、ある所へ宿とまつた。ある所と云うよりほかに言いようがない。今では土地の名も宿の名も、まるで忘れてしまった。第一宿屋へとまったのかが問題である。棟むねの高い大きな家に女がたつた二人いた。余がとめるかと聞いたとき、年を

取つた方がはいと云つて、若い方がこちらへと案内をするから、  
ついて行くと、荒れ果てた、広い間をいくつも通り越して一番  
奥の、中二階へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入ろ  
うとすると、板庇の下に傾きかけていた一叢の修竹が、そより  
と夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、すでにひやりと  
した。椽板はすでに朽ちかかっている。来年は筍が椽を突き抜  
いて座敷のなかは竹だらけになろうと云つたら、若い女が何に  
も云わずににやにやと笑つて、出て行つた。

その晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寝られない。障子を  
あけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明かなるに、眼を走  
しらせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に続い  
ている。草山の向うはすぐ大海原でどどんどどんと大きな濤が  
人の世を威嚇しに来る。余はとうとう夜の明けるまで一睡もせ

ずに、怪し気な蚊帳かやのうち辛防しんぼうしながら、まるで草双紙くさぞうしにでもありそうな事だと考えた。

その後旅ごもいろいろしたが、こんな氣持になつた事は、今夜この那古井へ宿るまではかつて無かつた。

仰向あおむけに寝ながら、偶然目を開あけて見ると欄間らんまに、朱塗りの縁ふちをとつた額がくがかかつている。文字もじは寝ながらも竹影ちくえい弘かい階いはらつて塵不動ちりうごかずと明らかに読まれる。大徹だいてつという落款らつかんもたしかに見える。余は

書においては皆無鑒識かいむかんしきのない男だが、平生から、黄檗おうぼくの高泉こうせん和尚おしやうの筆致ひつちを愛している。隠元いんげんも即非そくひも木庵もくあんもそれぞれに面白味は

あるが、高泉こうせんの字が一番蒼勁そうけいでしかも雅馴がじゆんである。今この七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思われぬ。しかし現げんに大徹とあるからには別人だろう。こ  
とによると黄檗に大徹という坊主がいたかも知れぬ。それにし

ては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかかつている若沖の鶴の図が目につく。これは商売柄だけに、部屋に這入った時、すでに逸品と認めた。若沖の図は大抵精緻な彩色ものが多いが、この鶴は世間に気兼ねなしの一筆がきで、一本足ですらりと立った上に、卵形の胴がふわつと乗かっている様子は、はなはだ吾意を得て、飘逸の趣は、長い嘴のさきまで籠っている。床の隣りは違い棚を略して、普通の戸棚につづく。戸棚の中には何があるか分らない。

すやすやと寝入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乗って、峠を越すと、いきなり、ささだ男と、ささべ男が飛び出して両方から引つ張る。女が急にオフェリヤになって、柳の枝へ上って、河の中を流れ

ながら、うつくしい声で歌をうたう。救つてやろうと思つて、長い竿さおを持つて、向島むこうじまを追懸おっかけて行く。女は苦しい様子もなく、笑いながら、うたいながら、行末ゆくえも知らず流れを下る。余は竿をかついで、おおいおおいと呼ぶ。

そこで眼が醒さめた。腋わきの下から汗が出ている。妙に雅俗がぞくこんこう混淆な夢を見たものだと思つた。昔し宋そうの大慧だいえ禅師ぜんじと云う人は、悟道のちの後、何事も意のごとくに出来ん事はないが、ただ夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたそうだが、なるほどもつともだ。文芸を性命せいめいにするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅はばが利きかない。こんな夢では大部分画にも詩にもならんと思ひながら、寝返りを打つと、いつの間にか障子しょうじに月がさして、木の枝が二三本斜ななめに影をひたしている。冴さえるほどの春の夜よだ。

気のせいか、誰か小声で歌をうたつてゐるような気がする。夢のなかの歌が、この世へ抜け出したのか、あるいはこの世の声<sup>こゝろこゝろ</sup>が遠き夢の国へ、うつつながらに紛れ込んだのかと耳を峙<sup>そばだ</sup>てる。たしかに誰かうたつてゐる。細くかつ低い声には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷<sup>いちる</sup>の脈をかすかに搏<sup>う</sup>たせつつある。不思議な事に、その調子はとにかく、文句をきくと——枕元でやつてるのでないから、文句のわかりようはない。——その聞えぬはずのものが、よく聞える。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良<sup>ながら</sup>の乙女<sup>おとめ</sup>の歌を、繰り返し繰り返すように思われる。

初めのうちは椽<sup>えん</sup>に近く聞えた声<sup>こゝろこゝろ</sup>が、しだいしだいに細く遠退<sup>とのお</sup>いて行く。突然とやむものには、突然の感はあるが、憐<sup>あわ</sup>れはうすい。ふつつりと思ひ切つたる声をきく人の心には、やはりふつ

つりと思ひ切つたる感じが起る。これと云う句切りもなく自然じねんに細ほそりて、いつの間にか消えるべき現象には、われもまた秒びょうを縮ちぢめ、分ぶんを割きいて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫びやうふうのごとく、消えんとしては、消えんとする灯火とうかのごとく、今やむか、やむかとのみ心を乱すこの歌の奥には、天下の春の恨うらみをことごとく萃あつめたる調べがある。

今までは床とこの中に我慢して聞いていたが、聞く声の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるると知りつつも、その声を追いかけたくなる。細くなればなるほど、耳だけになつても、あとを慕したつて飛んで行きたい気がする。もうどう焦あせ慮つても鼓膜こまくにこた応こたえはあるまいと思いつた前つな、余はたまらなくなつて、われ知らず布団ふとんをすり抜けると共にさらりと障子しょうじを開あけた。途端とたんに自分の膝ひざから下が斜ななめに月の光りを浴びる。寝巻ねまきの上にも木

の影が揺れながら落ちた。

障子をあげた時にはそんな事には気がつかなかつた。あの声はと、耳の走る見当を見破ると——向うにいた。花ならば海棠かと思わるる幹を背に、よそよそしくも月の光りを忍んで朦朧たる影法師がいた。あれかと思う意識さえ、確とは心にうつらぬ間に、黒いものは花の影を踏み砕いて右へ切れた。わがいる部屋つづきの棟の角が、すらりと動く、背の高い女姿を、すぐに遮つてしまふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつたまま、しばらく茫然としていたが、やがて我に帰ると、山里の春はなかなか寒いものと悟つた。ともかくもと抜け出でた布団の穴に、再び帰参して考え出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考え出した。よもや

化物ばけものではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるいは此家ここの御嬢さんかも知れない。しかし出帰でがえりの御嬢さんとしては夜なかに山つづぎの庭へ出るのがちと不穩ふおんとう当だ。何にしてもなかなか寝られない。枕の下にある時計までがちくちく口をきく。今まで懐中時計の音の気になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考えろ、さあ考えろと催促するごとく、寝るな寝るなと忠告するごとく口をきく。怪けしからん。

怖こわいものもただ怖こわいものそのままの姿と見れば詩になる。凄すこい事も、己おのれを離れて、ただ単独に凄すこいのだと思えば画えになる。失恋が芸術の題目となるのも全くその通りである。失恋の苦しみを忘れて、そのやさしいところやら、同情の宿やどるところやら、憂うれいのこもるところやら、一歩進めて云えば失恋の苦しみそのものあふの溢あふるところやらを、単に客観的に眼がんぜん前に思い浮べるから

文学美術の材料になる。世には有りもせぬ失恋を製造して、自  
から強<sup>し</sup>いて煩悶<sup>はんもん</sup>して、愉快を貪<sup>むさ</sup>ぼるものがある。常人<sup>じょうにん</sup>はこれを  
評<sup>ぐ</sup>して愚<sup>ぐ</sup>だと云う、氣違だと云う。しかし自から不幸の輪廓を  
描<sup>えが</sup>いて好<sup>この</sup>んでその中<sup>うち</sup>に起<sup>き</sup>臥<sup>が</sup>するのは、自から烏有<sup>うゆう</sup>の山水を刻<sup>こく</sup>画<sup>が</sup>  
して壺中<sup>こちゆう</sup>の天地<sup>てんち</sup>に歡喜すると、その芸術的<sup>りつぎやくち</sup>の立脚地<sup>りつぎやくち</sup>を得たる点  
において全く等しいと云わねばならぬ。この点において世上幾  
多の芸術家は（日常の人としてはいざ知らず）芸術家として常  
人よりも愚である、氣違である。われわれは草鞋<sup>わらじ</sup>旅行<sup>たび</sup>をする間<sup>あいだ</sup>、  
朝から晩まで苦しい、苦しいと不平を鳴らしつづけているが、  
人に向つて曾遊<sup>そうゆう</sup>を説く時分には、不平らしい様子は少しも見せ  
ぬ。面白<sup>おもしろ</sup>かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさえ得  
意<sup>ちようちよう</sup>に喋<sup>ちやうちやう</sup>々して、したり顔である。これはあえて自ら欺<sup>みづか</sup>く<sup>あざむ</sup>くの、人  
を偽<sup>いつ</sup>わるのと云う了見<sup>りようけん</sup>ではない。旅行をする間は常人<sup>じょうにん</sup>の心持ち

で、曾遊を語るときはすでに詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起る。して見ると四角な世界から常識と名のつく、一角を磨滅まめつして、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう。

この故ゆえに天然てんねんにあれ、人事じんじにあれ、衆俗しゅうぞくの辟易へきえきして近づきがたしとなすところにおいて、芸術家は無数の琳琅りんろうを見、無上の宝璐ほうろを知る。俗ぞくにこれを名なづけて美化びかと云う。その実は美化でも何でもない。燦爛さんらんたる彩光さいこうは、炳乎へいことして昔から現象世界に実在している。ただ一翳いちえい眼がんに在あつて空花くうげらん乱墜らんついするが故に、俗累ぞくゑいの羈絆きせつらんとして絶たちがたきが故に、榮辱えいじよく得喪とくそうのわれに逼せまる事、念々せせ切つなるが故に、ターナーが汽車を写すまでは汽車の美を解せず、応挙おうきよが幽霊を描えがくまでは幽霊の美を知らずに打ち過ぎるのである。

余が今見た影法師も、ただそれきりの現象とすれば、誰だれが見ても、誰だれに聞きかしても饒ゆたかに詩趣しすうを帯びている。——孤村こそんの温

泉、——春宵の花影、——月前の低誦、——朧夜の姿——どれもこれも芸術家の好題目である。この好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮義立てをして、余計な探ぐりを投げ込んでゐる。せつかくの雅境に理窟の筋が立って、願つてもない風流を、気味の悪るさが踏みつけにしてしまった。こんな事なら、非人情も標榜する価値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも画家とも人に向つて吹聴する資格はつかぬ。昔し以太利亜の画家サルヴァトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危険を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と画帖を懐にして家を出でたからには、余にもそのくらいの覚悟がなくては恥ずかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に帰れるかと云えば、おのれの感じ、そのものを、おのが前に据えつけて、その感じから

一步退いて有体ありていに落ちついて、他人らしくこれを検査する余地  
さえ作ればいいのである。詩人とは自分の屍骸しがいを、自分で解剖  
して、その病状を天下に発表する義務を有している。その方便  
は色々あるが一番手近てぢかなのは何なんでも蚊かでも手当り次第十七字に  
まとめて見るのが一番いい。十七字は詩形としてもつとも軽便  
であるから、顔を洗う時にも、廁かわやに上のぼった時にも、電車に乗つ  
た時にも、容易に出来る。十七字が容易に出来ると云う意味は  
安直あんちよくに詩人になれると云う意味であつて、詩人になると云うの  
は一種の悟りさとであるから軽便くどくだと云つて侮蔑ぶべつする必要はない。  
軽便であればあるほど功德くどくになるからかえつて尊重すべきもの  
と思う。まあちよつと腹が立つと仮定する。腹が立ったところ  
をすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちがすで  
に他人に變じている。腹を立ったり、俳句を作ったり、そう一人ひとり

が同時に働けるものではない。ちよつと涙をこぼす。この涙を十七字にする。するや否いなやうれしくなる。涙を十七字に纏まとめた時には、苦しみの涙は自分から遊離ゆうりして、おれは泣く事の出来る男だと云う嬉うれしさだけの自分になる。

これが平生へいぜいから余の主張である。今夜も一つこの主張を實行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出来たら書きつけないと散漫さんまんになつていかぬと、念入りの修業だから、例の写生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠かいだうの露をふるふや物狂ものぐるひ」と真先まつききに書き付けて読んで見ると、別に面白くもないが、さりとて気味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧おぼろかな」とやったが、これは季が重かさなつている。しかし何でも構われない、気が落ちついて吞氣のんきになればいい。それから「正一位しやういちゐ、女に化ばけて朧月おぼろづき」と作つたが、狂句

めいて、自分ながらおかしくなつた。

この調子なら大丈夫と乗氣のりきになつて出るだけの句をみなかき付ける。

春の星を落して夜半よはのかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪

春こよひや今宵歌つかまつる御姿

海棠かいだうの精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春ををちこちす

思ひ切つて更け行く春の独りかな

などと、試みているうち、いつしか、うとうと眠くなる。

恍惚こうこつと云うのが、こんな場合に用いるべき形容詞かと思う。熟睡じゆすいのうちには何人なんびとも我を認め得ぬ。明覚めいかくの際には誰たれあつて外界がいがいを忘るるものはなからう。ただ両域りやういきの間に縷るのごとき幻境げんきやうが横よこた

わる。醒めたりと云うには余り臙おぼろにて、眠ると評せんには少しく  
生氣せいぎを剩あます。起臥きがの二界どうへいりを同瓶裏どうへいりに盛りて、詩歌しいかの彩管さいかんをもつ  
て、ひたすらに攪かき雜まぜたるがごとき状態を云うのである。自  
然の色を夢の手前てまえまでばかして、ありのままの宇宙を一段、霞かすみ  
の国へ押し流す。睡魔ようわんの妖腕ようわんをかりて、ありとある実相の角度  
を滑なめらかにすると共に、かく和やわらげられたる乾坤けんこんに、われからと  
微かすかに鈍にぶき脈みやくを通とほわせる。地はを這はう煙えんの飛とばんとして飛び得えざ  
るごとく、わが魂たましいの、わが殻からを離はなれんとして離はなるるに忍しのびざる  
態ていである。抜ひけ出いでんとして逡巡ためらい、逡巡ためらいては抜ひけ出いでんと  
し、果はては魂たましいと云う個体を、もぎどうに保たもちかねて、氤氲いんうんたる  
暝氛めいふんが散るともなしに四肢五体に纏綿てんめんして、依い々いたり恋々れんれんたる  
心持ちである。

余が寤寐ごびの境さかいにかく逍遙しょうようしていると、入口からかみの唐紙からかみがすうと開あい

た。あいた所へまぼろしのごとく女の影がふうと現われた。余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。ただ心地よく眺めている。眺めると云うてはちと言葉が強過ぎる。余が閉じている瞼の裏に幻影の女が断りもなく滑り込んで来たのである。まぼろしはそろりそろりと部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるがごとく、畳の上には人らしい音も立たぬ。閉ずる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪まなこの濃い、襟足えりあしの長い女である。近頃はやる、ぼかした写真を灯影ほかげにすかすような気がする。

まぼろしは戸棚とだなの前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖そでをすべって暗闇くらやみのなかにほのめいた。戸棚がまたしまる。畳の波がおのずから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余が眠りはしだいに濃こまやかになる。人に死して、まだ牛にも馬

にも生れ変らない途中はこんなであろう。

いつまで人と馬の相中あいなかに寝ていたかわれは知らぬ。耳元にききつと女の笑い声がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落されて、天下は隅すみから隅まで明るい。うららかな春日はるびが丸窓の竹格子たけごうしを黒く染め抜いた様子を見ると、世の中に不思議と云うものの潜ひそむ余地はなさそうだ。神秘は十万億土へ帰つて、三途さんずの川かわの向側むこうがわへ渡つたのだらう。

浴衣ゆかたのまま、風呂場ふろばへ下りて、五分ばかり偶然と湯壺ゆつばのなかで顔を浮かしていた。洗う気にも、出る気にもならない。第一昨夕ゆうべはどうしてあんな心持ちになつたのだらう。昼と夜を界さかいにこう天地が、でんぐり返るのは妙だ。

身体からだを拭ふくさえ退儀たいぎだから、いい加減にして、濡ぬれたまま上あがつて、風呂場の戸を内から開けると、また驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寝られましたか」

戸を開けると、この言葉とはほとんど同時にきた。人のいるさえ予期しておらぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る違さえないうちに、

「さ、御召しなさい」

と後ろへ廻つて、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけた。ようやくの事「これはありがとう……」だけ出して、向き直る、途端に女は二三歩退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描写することに相場がきまつてる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列挙したならば、大蔵経とその量を争うかも知れぬ。この辟易すべき多量の形容詞中から、余と三步の隔りに立つ、体を斜めに振つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めてい

る女を、もつとも適当に叙すべき用語を拾い来つたなら、どれほどの数になるか知れない。しかし生れて三十余年の今日に至るまで未だかつて、かかる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰するそうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思う。動けばどう変化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬところに余韻が縹緲と存するから含蓄の趣を百世の後に伝うるのであらう。世上幾多の尊嚴と威儀とはこの湛然たる可能力の裏面に伏在している。動けばあらわれる。あらわれるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なかるうが、すでに一となり、二となり、三となった暁には、拖泥帶水の陋を遺憾なく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。この故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北斎の

漫画まんがも全くこの動の一字で失敗している。動か静か。これがわれら画工がこうの運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵この二大範疇はんちゆうのいずれにか打ち込む事が出来べきはずだ。

ところがこの女の表情を見ると、余はいずれとも判断に迷った。口は一文字を結んで静しずかである。眼は五分ごぶのすきさえ見出すべく動いている。顔は下膨しもふくれの瓜実形うりざねがたで、豊かに落ちつきを見せているに引き易かえて、額ひたいは狭苦せまくるしくも、こせついで、いわゆる富士額ふじびたいの俗臭ぞくしゆうを帯びている。のみならず眉まゆは両方から逼せまつて、中間ちゆうかんに数滴の薄荷はっかを点じたるごとく、ぴくぴく焦慮じうれている。鼻はなばかりは軽薄に鋭どくもない、遅鈍に丸くもない。画えにしたら美しかろう。かように別れ別れの道具ひとくせが皆一癖ひとくせあつて、乱調にどやどやと余の双眼に飛び込んだのだから迷うのも無理はない。元来は静せいであるべき大地だいちの一角に陥欠かんけつが起つて、全体が思わ

ず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどろうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云わぬばかりの有様が——そんな有様がもしあるとすればちようどこの女を形容する事が出来る。

それだから軽侮の裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした様子の底に慎み深い分別がほのめいている。才に任せ、氣を負えば百人の男子を物の数とも思わぬ勢の下から温和しい情けが吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居している体だ。この女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、この女の世界に統一がなかったのだらう。不幸に押しつけられながら、その不幸に打ち勝とうとし

ている顔だ。不仕合ふしあわせな女に違ちがない。

「ありがとう」と繰くりり返かへしながら、ちよつと会え積しやくした。

「ほほほ御部屋ごぶつは掃除そうじがしてあります。往いつて御覽ごらんなさい。いずれ後のちほど」

と云いうや否いなや、ひらりと、腰こしをひねつて、廊下ろうげを軽氣かろげに馳かけて行いつた。頭あたまは銀杏返いちょうがえしに結いつてゐる。白しろい襟えりがたぼの下したから見みえる。帯おビの黒くろ縷じゆす子は片側かたかわだけだろう。

#### 四

ぽかんと部屋ぶつへ帰かへると、なるほど奇麗きれいに掃除そうじがしてある。ちよつと氣きがかりだから、念ねんのため戸棚こたえをあけて見る。下したには小さな用よう箆だんすが見みえる。上うへから友禪ゆうぜんの扱しご帯きが半分た垂たれかかつて、いる

のは、誰か衣類でも取り出して急いで、出て行つたものと解釈が出来る。扱帯の上部はなまめかしい衣裳いしやうの間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隠和尚はくいんおしやうの遠良天釜おらてがまと、伊勢物語いせものがたりの一卷が並んでる。昨夕ゆうべのうつつは事実かも知れないと思つた。

何気なく座布団ざぶとんの上へ坐ると、唐木からぎの机の上に例の写生帖が、鉛筆えんぴつを挟んだまま、大事そうにあけてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合ものぐるひだろうと手に取る。

「海棠かいだうの露あきからすをふるふや物狂ものぐるひ」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝烏」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解わからんが、女にしては硬過かたすぎる、男にしては柔やわらか過あぎる。おやとまた吃驚びっくりする。次を見ると「花の影、女の影の朧おぼろかな」の下に「花の影女の影を重かさねけり」とつけてある。「正一位女しやういちめいに化けて

おぼろづき  
朧月」の下には「御曹子女おんざうしに化けて朧月」とある。真似まねをしたつもりか、添削てんさくした気か、風流まじの交わりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思わず首かたむを傾けた。  
後のちほどと云ったから、今に飯めしの時にでも出て来るかも知れない。出て来たら様子が少しは解るだろう。ときに何時いつだなど時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寝たものだ。これでは午飯ひるめしだけで間に合せる方が胃のためによからう。

右側の障子しょうじをあけて、昨夜ゆうべの名残なごりはどの辺へんかなと眺める。海棠かいどうと鑑定したのははたして、海棠であるが、思ったよりも庭は狭い。五六枚の飛石とびいしを一面の青苔あおとけが埋めて、素足すあしで踏みつけたら、さも心持ちがよさそうだ。左は山つづきの崖がけに赤松ななが斜めに岩の間から庭の上へさし出している。海棠うしの後ろにはちよつとした茂みがあつて、奥は大竹藪おおたけやぶが十丈の翠みどりりを春はるの日に曝さらしてい

る。右手は屋の棟で遮ぎられて、見えぬけれども、地勢から察すると、だらだら下りに風呂場の方へ落ちてゐるに相違ない。

山が尽きて、岡となり、岡が尽きて、幅三丁ほどの平地となり、

その平地が尽きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ

行つてまた隆然と起き上つて、周囲六里の摩耶島となる。これが

那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来るだけ崖へさし

かけて、岨の景色を半分庭へ囲い込んだ一構であるから、前面

は二階でも、後ろは平屋になる。椽から足をぶらさげれば、す

ぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は楷子段をむやみに上つたり、

下つたり、異な仕掛の家と思つたはずだ。

今度は左り側の窓をあける。自然と凹む二畳ばかりの岩のな

かに春の水がいつともなく、たまつて静かに山桜の影を蘸して

いる。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる、向うに枸杞とも見え

る生垣いけがきがあつて、外は浜から、岡へ上る岨道そばみちか時々人声が聞える。往来の向うはだらだらと南下みなみさがりに蜜柑みかんを植えて、谷の窮きわまる所にまた大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白く光るとはこの時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石磴せきとうが五六段手にとるように見える。大方おおかた御寺ごでだろう。

入口の襖ふすまをあけて椽えんへ出ると、欄干らんかんが四角に曲つて、方角から云えば海の見ゆべきはずの所に、中庭を隔へだてて、表二階ひとまの間がある。わが住む部屋も、欄干に倚よればやはり同じ高さの二階にゆうとうなのには興が催おされる。湯壺ゆつぼは地じの下にあるのだから、入湯にゆうとうと云う点から云えば、余は三層楼上に起き臥がする訳になる。

家は随分広いが、向う二階の間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間のほかは、居室いまま台所は知らず、客間と名がつきそ

うなのは大抵立て切つてある。客は、余をのぞくのほかほとんど皆無なのだろう。べた部屋は昼も雨戸をあけず、あけた以上は夜も閉てぬらしい。これでは表の戸締りさえ、するかしないか解らん。非人情の旅にはもつて来いと云う屈強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯を食わせる景色はさらにない。ようやく空腹を覚えて来たが、空山不見人と云う詩中にあると思うと、一とかたげぐらい儉約しても遺憾はない。画をかくのも面倒だ、俳句は作らんでもすでに俳三昧に入っているから、作るだけ野暮だ。読もうと思つて三脚几に括りつけて来た二三冊の書籍もほどく気にならん。こうやつて、煦々たる春日に背中をあぶつて、椽側に花の影と共に寝ころんでいるのが、天下の至楽である。考えれば外道に墮ちる。動くと危ない。出来るならば鼻から呼吸もしたくない。畳から根の生えた植物のように

じつとして二週間ばかり暮して見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上<sup>あが</sup>つてくる。近づくのを見てみると、二人らしい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人は何<sup>なん</sup>にも云わず、元の方へ引き返す。襖<sup>ふすま</sup>があいたから、今朝の人と思つたら、やはり昨夜<sup>ゆうべ</sup>の小女郎<sup>こじょうらう</sup>である。何だか物足らぬ。

「遅<sup>おそ</sup>くなりました」と膳<sup>ぜん</sup>を据<sup>す</sup>える。朝食<sup>あさめし</sup>の言訳も何にも言わぬ。焼肴<sup>やきざかな</sup>に青いものをあしらつて、椀<sup>わん</sup>の蓋<sup>ふた</sup>をとれば早蕨<sup>さわらび</sup>の中に、紅白に染め抜かれた、海老<sup>えび</sup>を沈<sup>しづ</sup>ませせてある。ああ好い色だと思つて、椀<sup>わん</sup>の中を眺<sup>なが</sup>めていた。

「御嫌<sup>おきら</sup>いか」と下女が聞く。

「いいや、今に食<sup>は</sup>う」と云つたが實際食<sup>は</sup>うのは惜しい気がした。ターナーがある晚餐<sup>ばんさん</sup>の席<sup>せき</sup>で、皿<sup>も</sup>に盛<sup>も</sup>るサラダを見詰<sup>み</sup>めながら、涼

しい色だ、これがわしの用いる色だと傍かたわらの人に話したと云う逸事がある書物で読んだ事があるが、この海老と蕨の色をちよつとターナーに見せてやりたい。いつたい西洋の食物で色のいいものは一つもない。あればサラダと赤大根ぐらいなものだ。滋養の点から云つたらどうか知らんが、画家から見るとすこぶる発達せん料理である。そこへ行くと日本の猷立こんだては、吸物すいものでも、口取さしみでも、刺身さしみでも物奇麗ものぎれいに出来る。会席膳かいせきぜんを前へ置いて、一箸ひとはしも着けずに、眺めたまま帰つても、目の保養から云えば、御茶屋へ上がった甲斐かひは充分ある。

「うちに若い女の人があるだろう」と腕を置きながら、質問をかけた。

「へえ」

「ありや何だい」

「若い奥様でござんす」

「あのほかにまだ年寄の奥様がいるのかい」

「去年御亡おなくなりました」

「旦那さんは」

「おります。旦那さんの娘さんでござんす」

「あの若い人がかい」

「へえ」

「御客はいるかい」

「おりません」

「わたし一人かい」

「へえ」

「若い奥さんは毎日何をしているかい」

「針仕事を……」

「それから」

「三味しやみを弾ひきます」

これは意外であつた。面白いからまた

「それから」と聞いて見た。

「御寺へ行きます」と小女郎こじよろうが云う。

これはまた意外である。御寺と三味線は妙だ。

「御寺詣まいりをするのかい」

「いいえ、和尚様おしやうさまの所へ行きます」

「和尚さんが三味線でも習うのかい」

「いいえ」

「じゃ何をしに行くのだい」

「大徹だいてつさま様の所へ行きます」

なあるほど、大徹と云うのはこの額を書いた男に相違ない。こ

の句から察すると何でも禪坊主らしい。戸棚に遠良天釜があつたのは、全くあの女の所持品だろう。

「この部屋は普段誰か這入っている所かね」

「普段は奥様がおります」

「それじゃ、昨夕、わたしが来る時までここにいたのだね」

「へえ」

「それは御気の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのだい」

「知りません」

「それから」

「何でござんす」

「それから、まだほかに何かするのだろうか」

「それから、いろいろ……」

「いろいろつて、どんな事を」

「知りません」

会話はこれで切れる。飯はようやく了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開たら、中庭の栽込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳観音のように下を見詰めていた。今朝に引き替えて、はなはだ静かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通わないから、相好にかほどな変化を来たしたものであるうか。昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云ったそうだが、なるほど人焉んぞ瘦きんや、人間のうちで眼ほど活きている道具はない。寂然と倚る亜字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞い上がる。途端にわが部屋ふすまの襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余かたの方に転じた。視線は毒矢のごとく空を貫いて、会釈もなく余

が眉間みけんに落ちる。はつと思ふ間に、小女郎が、またはたと襖を立て切った。あとは至極しごく呑気な春となる。

余はまたごろりと寝ころんだ。たちまち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,

Lost ere the kindling of dawn,

To travellers journeying on,

The shutting of thy fair face from my sight.

と云う句であつた。もし余があいちようがえの銀杏返しいんぎょうがえに懸想けそうして、身を碎くだいても逢わんと思ふ矢先に、今のような一瞥いちべつの別れを、魂消たまぎるまでに、嬉しとも、口惜くちおしとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだろう。その上に

Might I look on thee in death,

With bliss I would yield my breath.

と云う二句さえ、付け加えたかも知れぬ。幸い、普通ありふれた、恋とか愛とか云う境界はすでに通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。しかし今の刹那せつなに起つた出来事の詩趣はゆたかにこの五六行にあらわれている。余と銀杏返しの間柄あいだがらにこんな切ない思おもはないとしても、二人の今の関係を、この詩の中うちに適用あてはめて見るのは面白い。あるいはこの詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釈しても愉快だ。二人の間には、ある因果いんがの細い糸で、この詩にあらわれた境遇の一部分が、事実じじとなつて、括くくりつけられている。因果もこのくらい糸が細いと苦くにはならぬ。その上、ただの糸ではない。空を横切る虹にじの糸、野辺のべに棚引たなびく霞かすみの糸、露つゆにかがやく蜘蛛くもの糸。切ろうとすれば、すぐ切れて、見ているうちは勝すぐれてうつくしい。万一この糸が見る間に太くなつて井戸繩いどなわのようにかたくなつたら？ そ

んな危険はない。余は画工である。先はただの女とは違う。

突然襖があいた。寝返りを打って入口を見ると、因果の相手  
のその銀杏返しが敷居の上に立って青磁の鉢を盆に乗せたまま  
佇んでゐる。

「また寝ていらつしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたろう。  
何返も御邪魔をして、ほほほほ」と笑う。臆した景色も、隠す  
景色も——恥ずる景色は無論ない。ただこちらが先を越された  
のみである。

「今朝はありがとう」とまた礼を云った。考えると、丹前の礼  
をこれで三返云った。しかも、三返ながら、ただ難有うと云う  
三字である。

女は余が起き返ろうとする枕元へ、早くも坐つて

「まあ寝ていらつしやい。寝ていても話は出来ましよう」と、さ

も氣作きさくに云う。余は全くだと考えたから、ひとまず腹這はらばいになつて、両手で顎あごを支え、しばし畳の上へ肘壺ひじつぼの柱を立てる。

「御退屈だろうと思つて、御茶を入れに来ました」

「ありがとう」またありがとうが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹ようかんが並んでいる。余はすべての菓子のうちでもっとも羊羹すきが好だ。別段食いたくはないが、あの肌合はだあいが滑らかに、緻密ちみつに、しかも半透明はんとうめいに光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帯びた煉上げねりあ方は、玉ぎよくと蠟石ろうせきの雑種のようで、はなはだ見て心持がいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れたようにつやつやして、思わず手を出して撫なでて見たくなる。西洋の菓子で、これほど快感を与えるものは一つもない。クリームの色はちよつと柔やわらかだが、少し重苦しい。ジェリは、一目宝石いちちやくのように見える

が、ぶるぶる顫ふるえて、羊羹ほどの重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至いたっては、言語道断ごんごどうだんの沙汰である。

「うん、なかなか美事みごとだ」

「今しがた、源兵衛が買つて帰りました。これならあなたに召し上がられるでしょう」

源兵衛は昨夕城下じょうかへ留とまつたと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見ていた。どこで誰れが買つて来ても構う事はない。ただ美しくしければ、美しくしいと思うだけで充分満足である。

「この青磁の形は大変いい。色も美事だ。ほとんど羊羹に対して遜色そんしよくがない」

女はふふんと笑つた。口元くちもとに侮あなどりの波が微かすかに揺ゆれた。余の言葉を洒落しやれと解したのだろう。なるほど洒落とすれば、軽蔑けいべつされる価あたいはたしかにある。智慧ちえの足りない男が無理に洒落れた

時には、よくこんな事を云うものだ。

「これは支那ですか」

「何ですか」と相手はまるで青磁を眼中に置いていない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せましょうか」

「ええ、見せて下さい」

「父が骨董こつとうが大好きですから、だいぶいろいろなものがありま  
す。父にそう云って、いつか御茶でも上げましょう」

茶と聞いて少し辟易へきえきした。世間に茶人ちやじんほどもつたいぶつた風

流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈きうくつに縄張りなわばりをして、極

めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要

もないのに鞠躬きくきゆう如じよとして、あぶくを飲んで結構けいこうがるものはいわ

ゆる茶人である。あんな煩瑣はんさな規則きそくのうちに雅味みやみがあるなら、

麻布あざぶの聯隊れんたいのなかは雅味で鼻がつかえるだろう。廻れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休りきゅう以後の規則を鶺鴒うの呑みにして、これでおおかた風流なんだろう、とかえつて真の風流人を馬鹿にするための芸である。

「御茶つて、あの流儀のある茶ですか」

「いいえ、流儀も何もありやしません。御厭おいやなら飲まなくつてもいい御茶です」

「そんなら、ついでに飲んでもいいですよ」

「ほほほほ。父は道具を人に見ていただくのが大好きなんですから……」

「褒ほめなくつちやあ、いけませんか」

「年寄りだから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」

「へえ、少しなら褒めて置きましょう」

「負けて、たくさん御褒めなさい」

「はははは、時にあなたの言葉は田舎いなかじゃない」

「人間は田舎なんですか」

「人間は田舎の方がいいのです」

「それじゃ幅はばが利ききます」

「しかし東京にいた事がありましたよ」

「ええ、いました、京都にもいました。渡りものですから、方々にいました」

「ここと都と、どっちがいいですか」

「同じ事ですわ」

「こう云う静かな所が、かえって気楽でしょう」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ちよう一つでどうでもなります。蚤のみの国が厭いやになつたつて、蚊かの国へ引越ひっこしちや、何なんにもなりません」

「蚤も蚊もいない国へ行つたら、いいでしょう」

「そんな国があるなら、ここへ出して御覽なさい。さあ出してちようだい」と女は詰つめ寄せる。

「御望みなら、出して上げましょう」と例の写生帖をとつて、女が馬へ乗つて、山桜を見ている心持ち——無論とつきの筆使いだから、画えにはならない。ただ心持ちだけをさらさらと書いて、「さあ、この中へ御這おほ入りなさい。蚤も蚊もいません」と鼻の前さきへ突きつけた。驚くか、恥はずかしがるか、この様子では、よもや、苦しがる事はなかりうと思つて、ちよつと景色けしきを伺うかうと、「まあ、窮屈きゆうくつな世界だこと、横幅よこはばばかりじゃありませんか。そ

んな所が御好きなの、まるで蟹かにね」と云つて退のけた。余は

「わはははは」と笑う。軒端のきばに近く、啼なきかけた鶯うぐいすが、途中で声を崩くずして、遠かたき方へ枝移りをやる。両人ふたりはわぎと對話をやめて、しばらく耳を峙そばだてたが、いったん鳴き損そこねた咽喉のどは容易に開あけぬ。

「昨日きのうは山で源兵衛に御逢おあいでしたろう」

「ええ」

「長良ながらの乙女おとめの五輪塔ごりんとうを見ていらしたか」

「ええ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べた。何のためか知らぬ。

「その歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが教えましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云いかけて、これはと余の顔を見たから、余は知らぬ風ふうをしていた。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが来るたびに長良の話をして聞かせてやりました。うただけはなかなか覚えなかつたのですが、何遍も聴きくうちに、とうとう何もかも諳誦あんしようしてしまいました」

「どうれで、むずかしい事を知つてると思った。——しかしあの歌は憐あわれな歌ですね」

「憐れでしようか。私ならあんな歌は咏よみませんね。第一、淵川ふちかわへ身を投げるなんて、つまらないじゃありませんか」

「なるほどつまらないですね。あなたならどうしますか」

「どうするつて、訳ないじゃありませんか。ささだ男もささべ

男も、男妾おとこめかけにするばかりですわ」

「両方ともですか」

「ええ」

「えらいな」

「えらかあない、当り前ですわ」

「なるほどそれじゃ蚊の国へも、蚤の国へも、飛び込まずに済む訳だ」

「蟹のような思いをしなくつても、生きていられるでしょう」

ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯うぐいすが、いつ勢いきおいを盛り返して

か、時ならぬ高音たかねを不意に張った。一度立て直すと、あとは自

然に出ると見える。身を逆さかまにして、ふくらむ咽喉のどの底を震ふるわ

して、小さき口の張り裂くるばかりに、

ほーう、ほけきよーう。ほーー、ほけつーきよーうと、つづ

け様に嘔さまずる。

「あれが本当の歌です」と女が余に教えた。

五

「失礼ですが旦那だんなは、やつぱり東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見ひとめりやあ、——第一だいち言葉でわかりませ

あ

「東京はどこだか知れるかい」

「そうさね。東京は馬鹿に広いからね。——何でも下町したまちじゃね

えようだ。山やまの手てだね。山の手は麴町こうじまちかね。え？ それじゃ、

小石川こいしかわ？ でなければ牛込うしごめか四谷よつやでしょう」

「まあそんな見当だろう。よく知ってるな」

「こう見<sup>め</sup>えて、私<sup>わっち</sup>も江戸っ子だからね」

「道理<sup>どうれ</sup>で生<sup>いなせ</sup>粋だと思つたよ」

「えへへへへ。からつきし、どうも、人間もこうなつちや、みじめですぜ」

「何でまたこんな田舎<sup>いなか</sup>へ流れ込んで来たのだい」

「ちげえねえ、旦那のおつしやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食い詰めつちまつて……」

「もとから髪<sup>かみゆいどこ</sup>結床の親方かね」

「親方じゃねえ、職人さ。え？ 所かね。所は神田松永町<sup>かんだまつながちよう</sup>でさ

あ。なあに猫<sup>ひたい</sup>の額見たような小さな汚ねえ町でさあ。旦那なんか知らねえはずさ。あすこに竜閑橋<sup>りゆうかんぼし</sup>てえ橋がありましよう。え？ そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代<sup>なだい</sup>な橋だがね」

「おい、もう少し、石鹼しゃばんを塗つけてくれないか、痛いたくつて、いけない」

「痛いたうがすかい。私わっちや癩かんし性しょうでね、どうも、こうやって、逆剃さかずりをかけて、一本一本髭ひげの穴あなを掘ほらなくつちや、気が済よまねえんだから、——なあに今時いまどきの職人しやくじんなあ、剃するんじゃねえ、撫なでるんだ。もう少しだ我慢まんおしなせえ」

「我慢まんは先まづから、もうだいぶしたよ。御願ごんだから、もう少し湯ゆか石鹼しゃばんをつけとくれ」

「我慢まんしきれねえかね。そんなに痛いたかあねえはずだが。全体ぜんてい、髭ひげがあんまり、延のび過すぎてるんだ」

やけに頬ほの肉にくをつまみ上げた手を、残念ざんねんそうに放はなした親方おやぢは、棚たなの上うへから、薄うすっ片ぺらな赤あかい石鹼しゃばんを取り卸おろして、水のなか  
にちよつと浸ひたしたと思おもつたら、それなり余あまの顔かほをまんべんなく

一応撫で廻わした。裸石鹼を顔へ塗りつけられた事はあまりない。しかもそれを濡らした水は、幾日前いくにちまえに汲くんだ、溜め置きかと考えると、余りぞつとしない。

すでに髪結床かみゆいどこである以上は、御客の権利として、余は鏡に向わなければならぬ。しかし余はさつきからこの権利を放棄したく考えている。鏡と云う道具は平たいらに出来て、なだらかに人の顔を写さなくては義理が立たぬ。もしこの性質そなが具そなわらない鏡を懸かけて、これに向えと強しいるならば、強しいるものは下へ手たな写真師と同じく、向うものの器量を故意に損害したと云わなければならぬ。虚栄心を挫くじくのは修養上一種しゆの方便かも知れぬが、何も己おのれの真価以下の顔を見せて、これがあなたですよと、こちらを侮辱おごじやくするには及ぶまい。今余が辛抱しんぼうして向き合うべく余儀なくされている鏡はたしかに最前から余を侮辱している。右

を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元まで裂ける。仰向あおむくと蟄蛙ひきがえるを前から見たように真平まっぺいらにお圧し潰つぶされ、少しこごむと福祿寿の祈誓児もうしごのように頭がせり出してくる。いやしくもこの鏡に対する間あいだは一人でいろいろな化物ばけものを兼勤けんきんしなくてはならぬ。写るわが顔の美術的ならぬはまず我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剥はげ落ちて、光線が通り抜ける模様などを総合して考えると、この道具その物から醜体きわを極きわめている。小人しょうじんから罵詈ばりされるとき、罵詈ばりそれ自身は別に痛痒つうようを感じぬが、その小人しょうじんの面前まへに起臥きがしなければならぬとすれば、誰しも不愉快ふげきだろう。

その上この親方がただの親方ではない。そこから覗のぞいたときは、胡坐あぐらをかいて、長煙管ながぎせるで、おもちゃの日英同盟国旗にちえいどうめいの上へ、しきりに煙草たばこを吹きつけて、さも退屈たいくつげ気に見えたが、這入はいって、

わが首の所置を托する段になつて驚ろいた。髭ひげを剃そる間は首の所有権は全く親方の手にあるのか、はた幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑がい出したくらい、容赦ようしやなく取り扱われる。余の首が肩の上に釘くぎづ付けにされているにしてもこれでは永く持たない。

彼は髮剃かみそりを揮ふるうに当つて、毫ごうも文明の法則を解しておらん。頬にあたる時はがりりと音がした。揉もみ上の所あげではぞきりと動脈が鳴つた。頤あごのあたりあごに利刃りじんがひらめく時分にはごりごり、ごりごりと霜柱しもぼしらを踏みつけるような怪しい声が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方をもつて自任している。

最後に彼は酔つ払つている。旦那えと云うたんびに妙な臭においがする。時々なんどきは異いな瓦斯ガスを余が鼻柱へ吹き掛ける。これではない、何時なんどき、髮剃かみそりがどう間違つて、どこへ飛んで行くか解らない。

使う当人にさえ判然たる計画がない以上は、顔を貸した余に推察のできようはずがない。得心ずくで任せた顔だから、少しの怪我なら苦情は云わないつもりだが、急に気が変つて咽喉のどぶえ笛でも掻き切られては事だ。

「石鹼しやぼんなんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なまなんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云いながら親方は裸石鹼を、裸のまま棚の上へ放り出すと、石鹼は親方の命令に背そむいて地面の上へ転ころがり落ちた。

「旦那あ、あんまり見受けねえようだが、何ですかい、近頃来なすつたのかい」

「二三日にさんち前来たばかりさ」

「へえ、どこにいるんですい」

「志保田しほだに逗とまつてるよ」

「うん、あすこの御客さんですか。おおかたそんな事ことたろうと思つてた。実あ、私もあの隠居わつしさんを頼たよつて来たんですよ。——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わつしが近所にいて、——それで知つてるのさ。いい人でさあ。ものの解つたね。去年御新造ごしんぞが死んじまつて、今じゃ道具ひねばかり捨すくつてるんだが——何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。売つたらよつぽどな金目かねめだろうつて話さ」

「奇麗きれいな御嬢お嬢さんがいるじゃないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何が。旦那めえの前まえだが、あれで出返でもどりですぜ」

「そうかい」

「そうかいどころの騒さわじゃねえんだね。全体さむらいなら出て来なくつ

でもいいところをさ。——銀行が潰れて贅沢が出来ねえって、出ちまったんだから、義理が悪るいやね。隠居さんがああして、いるうちはいいが、もしもの事があつた日にや、法返しがつかねえ訳になりまさあ」

「そうかな」

「あた当り前めえでさあ。本家の兄あにきたあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にあります。遊びに行つて御覧なさい。景色のいい所ですよ」

「おい、もう一遍石鹸しゃぼんをつけてくれないか。また痛くなつて来た」

「よく痛くなる髭ひげだね。髭が硬過こわすぎるからだ。旦那の髭ひげじゃ、三日に一度は是非剃そりを当てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃

で痛けりや、どこへ行つたつて、我慢出来つこねえ」

「これから、そうしよう。何なら毎日来てもいい」

「そんなに長く逗留とうりゆうする気なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事ことつた。碌ろくでもねえものに引つかかつて、どんな目に逢うか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は面めんはいいようだが、本当はきじ印じるしですぜ」

「なぜ」

「なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂きちげえだつて云つてるんできさあ」

「そりや何かの間違まちがだろう」

「だつて、現げんに証拠があるんだから、御ごよしなせえ。けんのんだ」

「おれは大丈夫だが、どんな証拠があるんだい」

「おかしな話しさね。まあゆつくり、煙草たばこでも呑のんで御出おいでなせえ話すから。——頭あ洗いましょうか」

「頭はよそう」

「頭垢ふけだけ落して置かかね」

親方は垢あかの溜たまった十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨ずがいこつの上に並べて、断わりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。この爪が、黒髪の根を一本ごとに押し分けて、不毛きようの境を巨人くまでの熊手が疾風の速度で通ることくに往来する。余が頭に何十万本の髪の毛が生はえているか知らんが、ありとある毛がことごとく根こぎにされて、残る地面がべた一面に蚯蚓めめずばれ腫はれにふくれ上った上、余勢じげんが地磐じばんを通して、骨から脳味のうみそ噌そまで震盪しんとうを感じたくらい烈はげしく、親方は余の頭を搔き廻わした。

「どうです、好い心持でしょう」

「非常な辣腕らっわんだ」

「え？　こうやると誰でもさっぱりするからね」

「首が抜けそうだよ」

「そんなに倦怠けんたいうがすかい。全く陽気の加減だね。どうも春てえ奴やつあ、やに身体からだがなまけやがつて——まあ一ぷく御上おあがんなさい。一人で志保田にいちや、退屈でしょう。ちと話しに御出おいでなせえ。どうも江戸つ子は江戸つ子同志でなくつちや、話しが合わねえものだから。何ですかい、やっぱりあの御嬢さんが、御愛想に出てきますかい。どうもさっぱし、見境みさげえのねえ女だから困つちまわあ」

「御嬢さんが、どうか、したところで頭垢が飛んで、首が抜けそうになったつけ」

「違ねえ、がんがらがんだから、からつきし、話に締りがねえつたらねえ。——そこでその坊主が逆せちま<sup>のほ</sup>つて……」

「その坊主たあ、どの坊主だい」

「観海寺の納所坊主がさ……」

「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て来ないんだ」

「そうか、急勝だから、いけねえ。苦味走<sup>にがんぼし</sup>つた、色の出来そう

な坊主だった<sup>な</sup>が、そいつが御前<sup>おまえ</sup>さん、レコに参<sup>ま</sup>つちま<sup>つ</sup>つて、と

うとう文<sup>ふみ</sup>をつけたんだ。——おや待てよ。口説<sup>くどい</sup>たんだっけかな。

いんにや文だ。文に違<sup>ちげ</sup>えねえ。すると——こうつと——何だか、

行き<sup>い</sup>さつが少し変だぜ。うん、そうか、やつぱりそうか。する

てえと奴<sup>やつし</sup>さん、驚<sup>おど</sup>ろいちま<sup>つ</sup>つてからに……」

「誰が驚<sup>おど</sup>ろいたんだい」

「女がさ」

「女が文を受け取つて驚ろいたんだね」

「ところが驚ろくような女なら、殊勝しおらしいんだが、驚ろくどころじゃねえ」

「じゃ誰が驚ろいたんだい」

「口説た方がさ」

「口説ないのじゃないか」

「ええ、じれつてえ。間違つてらあ。文ふみをもらつてさ」

「それじゃやっぱり女だろう」

「なあに男がさ」

「男なら、その坊主だろう」

「ええ、その坊主がさ」

「坊主がどうして驚ろいたのかい」

「どうしてつて、本堂で和尚おしょうさんと御経を上げてると、突然いきなりあ

の女が飛び込んで来て——ウフフフフ。どうしても狂印きじるしだね」

「どうかしたのかい」

「そんなに可愛かわいいなら、仏様の前で、いっしょに寝ようって、出し抜くけに、泰安たいあんさんの頸くびつ玉たまへかじりついたんでさあ」

「へええ」

「面喰めんくらつたなあ、泰安さ。気狂きちげえに文をつけて、飛んだ恥かを搔かかせられて、とうとう、その晩こっそり姿を隠して死んじまって……」

「死んだ？」

「死んだろうと思うのさ。生きちゃいられめえ」

「何とも云えない」

「そうさ、相手が気狂じゃ、死んだって冴さえねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」

「なかなか面白い話だ」

「面白いの、面白くないのつて、村中大笑いでさあ。ところが当人だけは、根が気が違つてるんだから、洒唾洒唾して平気なもんで——なあに旦那のようになりしていりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大変な目に逢いますよ」

「ちつと気をつけるかね。はははははは」

生温い磯なまぬる いそから、塩気のある春風はるかぜがふわりふわりと来て、親方の暖簾のれんを眠たねむそうに煽あおる。身を斜はすにしてその下をくぐり抜けるつぼめ燕の姿が、ひらりと、鏡の裡うちに落ちて行く。向うの家うちでは六十七ばかりの爺さんが、軒下に蹲踞うずくまりながら、だまつて貝をむいている。かちやりと、小刀があたるたびに、赤い味みが笹ざさのなかに隠れる。殻からはきらりと光りを放つて、二尺あまりの陽炎かげろうを向へ横切る。丘のごとくに堆うずたかく、積み上げられた、貝殻は牡蠣かき

か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた、幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗らい国へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考うる暇さえなく、ただ空しき殻を陽炎の上へ放り出す。彼れの笊には支うべき底なくして、彼れの春の日は無尽蔵に長閑かと見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそそぐ。春の水が春の海と出合うあたりには、参差として幾尋の干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥き微温を与えつつあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀を溶かして、気長にのたくらせたように見えるのが海の色だ。

この景色とこの親方とはとうてい調和しない。もしこの親方の人格が強烈で四辺の風光と拮抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立ってすこぶる円柄方鑿の感に打

たれただろ<sup>う</sup>。幸<sup>さいわい</sup>にして親方はさほど偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切つても、この渾然<sup>こんぜん</sup>として駘蕩<sup>たいとう</sup>たる天地の大気象には叶<sup>かな</sup>わない。満腹の饒舌<sup>にようぜつ</sup>を弄<sup>ろう</sup>して、あくまでこの調子を破ろうとする親方は、早く一微塵<sup>いちみじん</sup>となつて、<sup>いい</sup>怡々たる春光<sup>しゅんこう</sup>の裏<sup>うち</sup>に浮遊<sup>うゆう</sup>している。矛盾とは、力において、量<sup>りょう</sup>において、もしくは意気<sup>たいき</sup>体軀<sup>たいく</sup>において氷炭<sup>ひようたん</sup>相容<sup>あひい</sup>る能<sup>あた</sup>わずして、しかも同程度に位する物もしくは人の間に在<sup>あ</sup>つて始めて、見出し得べき現象である。両者の間隔<sup>かんかく</sup>がはなはだしく懸絶<sup>けんぜつ</sup>するとき<sup>は</sup>、この矛盾はようやく漸礮<sup>しんぱう</sup>磨<sup>ま</sup>して、かえつて大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人<sup>たいじん</sup>の手足<sup>しゅそく</sup>となつて才子が活動し、才子の股肱<sup>ここう</sup>となつて味者<sup>まいしや</sup>が活動し、味者の心腹<sup>しんぷく</sup>となつて牛馬が活動し得るのはこれがためである。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽<sup>こっけい</sup>を演じている。長閑<sup>のどか</sup>な

春の感じを壊すこわべきはずの彼は、かえつて長閑な春の感じを刻意こゝろに添えつつある。余は思わず弥生やよいなか半ばに吞気のんきな弥次やじと近づきになつたような気持ちになつた。この極きまめて安価やすかなる気燄きえん家は、太平しやうの象しやうを具したる春の日にもつとも調和せる一彩色である。

こう考えると、この親方もなかなか画えにも、詩にもなる男だから、とうに帰るべきところを、わざと尻しりを据すえて四方よも八方やまの話をしていた。ところへ暖簾のれんを滑すべつて小さな坊主頭が

「御免、一つ刺そつて貰もらおうか」

と這入はいつて来る。白木綿の着物に同じ丸紵まるぐけの帯をしめて、上から蚊帳かやのように粗あらい法衣ころもを羽織つて、すこぶる気楽に見える小坊主であつた。

「了念りやうねんさん。どうだい、こないだあ道草あ、食つて、和尚おしやうさんに叱しかられたろう」

「いんにや、褒められた」

「使に出て、途中で魚なんか、とつていて、了念は感心だつて、褒められたのかい」

「若いに似ず了念は、よく遊んで来て感心じゃ云うて、老師が褒められたのよ」

「道理で頭に瘤が出来てらあ。そんな不作法な頭あ、剃るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘弁するから、この次から、捏ね直して来ねえ」

「捏ね直すくらいなら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はははは頭は凹凸だが、口だけは達人なもんだ」

「腕は鈍いが、酒だけ強いのは御前だろ」

「篋棒め、腕が鈍いつて……」

「わしが云うたのじゃない。老師が云われたのじゃ。そう怒る

まい。年とし甲斐がいもない」

「へん、面白くもねえ。——ねえ、旦那」

「ええ？」

「全体ぜんてえ坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがって、  
屈くつ托たくがねえから、自然に口が達者になる訳ですかね。こんな小  
坊主までなかなか口幅くちはばつてえ事を云いますぜ——おっと、もう  
少し頭したまを寝かして——寝かすんだてえのに、——言う事を聴きか  
なけりや、切るよ、いいか、血が出るぜ」

「痛いかな。そう無茶をしては」

「このくらいな辛抱が出来なくって坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなつとるがな」

「まだ一人前いちにんめえじゃねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死  
んだっけな、御小僧さん」

「泰安さんは死にはせんがな」

「死なねえ？ はてな。死んだはずだが」

「泰安さんは、その後発憤のちして、陸前りくぜんの大梅寺だいばいじへ行つて、修業しゆぎよう三昧さんまいじゃ。今に智識ちしきになられよう。結構な事よ」

「何が結構おめえだい。いくら坊主だつて、夜逃をして結構な法はあるめえ。御前おめえなんざ、よく気をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印きじるしはやっぱり和尚おしようさんの所へ行くかい」

「狂印きじるしと云う女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌播みそすりだ。行くのか、行かねえのか」

「狂印きじるしは来んが、志保田の娘さんなら来る」

「いくら、和尚さんの御祈祷ごぎとうでもあればかりや、癒なおるめえ。全く先せんの旦那たなが崇たつてるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めておられる」

「石段をあがると、何でも逆様だから叶わねえ。和尚さんが、

何て云ったって、氣狂は氣狂だろう。——さあ剃れたよ。早く

行つて和尚さんに叱られて来めえ」

「いやもう少し遊んで行つて賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄この乾屎橛」

「何だと？」

青い頭はすでに暖簾をくぐつて、春風に吹かれている。

六

夕暮の机に向う。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあら

ぬ上に、家は割合に広い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞う境を、幾曲の廊下に隔てたれば、物の音さえ思索の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。立ち退いたとすればただの所へ立ち退きはせぬ。霞の国か、雲の国かであろう。あるいは雲と水が自然に近づいて、舵をとるさえ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思われる。それでなければ卒然と春のなかに消え失せて、これまでの四大が、今頃は目に見えぬ靈氛となつて、広い天地の間に、顕微鏡の力を藉るとも、些の名残を留めぬようになつたのであろう。あるいは雲雀に化

して、菜の花の黄を鳴き尽したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、葢に凝る甘き露を吸い損ねて、落椿の下に、伏せられながら、世を香ばしく眠っているかも知れぬ。とにかく静かなものだ。

空しき家を、空しく抜ける春風の、抜けて行くは迎える人への義理でもない。拒むものへの面当でもない。自から来りて、自から去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支えたる余の心も、わが住む部屋のごとく空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き抜けるであらう。

踏むは地と思えばこそ、裂けはせぬかとの気遣も起る。戴くは天と知る故に、稲妻の米囀に震う怖も出来る。人と争わねば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免かれぬ。東

西のある乾坤けんこんに住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事実の恋は讎あだである。目に見る富は土である。握る名と奪える誉ほまれとは、小賢こぎかしき蜂はちが甘く醸かもすと見せて、針を棄すて去る蜜のごときものである。いわゆる楽たのしみは物に着ちやくするより起るが故ゆえに、あらゆる苦しみを含む。ただ詩人と画客がかくなるものあつて、飽あくまでこの待対たいたい世界の精華を嚼かんで、徹骨徹髓てつこつてつすいの清きを知る。霞かすみを餐さんし、露を嚙のみ、紫しを品ひんし、紅こうを評ひやうして、死に至つて悔いぬ。彼らの楽は物に着ちやくするのではない。同化してその物になるのである。その物になり済ました時に、我を樹立すべき余地は茫茫ぼうぼうたる大地を極きわめても見出し得ぬ。自在じざいに泥団でいだんを放下ほうげして、破笠裏はりつりに無限むげんの青嵐せいらんを盛もる。いたずらにこの境遇ねんしゆつを拈出ねんしゆつするのは、敢あえて市井しせいの銅臭どうしゆうじ児じの鬼嚇きかくして、好んで高く標置ひょうちするがためではない。ただ這裏しやりの福音ふくいんを述べて、縁しゆじやうある衆生しゆじやうを麾さしまねくのみである。

ありてい  
有体に云えば詩境と云い、画界と云うも皆人々具足の道である。  
しゅんじゅう  
春秋に指を折り尽して、白頭に呻吟するの徒といえども、一生

を回顧して、閱歴の波動を順次に点検し来るとき、かつては微  
光の臭骸しゅうがいに洩れて、吾われを忘れし、拍手はくしゅの興きようを喚よび起す事が出来  
よう。出来ぬと云わば生甲斐いきがいのない男である。

されど一事いちじに即そくし、一物いちぶつに化かするのみが詩人の感興とは云わ

ぬ。ある時は一弁いちべんの花に化し、あるときは一双いっそうの蝶ちように化し、あ

るはウオーヅウオースのごとく、一団の水仙に化して、心を沢風たくふう

の裏うちに撩乱りょうらんせしむる事もあるうが、何なんとも知れぬ四辺しへんの風光に

わが心を奪われて、わが心を奪えるは那物なにもぞとも明瞭めいりょうに意識せ

ぬ場合がある。ある人は天地の耿氣こうきに触ると云うだろう。あ

る人は無絃むげんの琴きんを靈台れいだいに聴くと云うだろう。またある人は知り

がたく、解しがたき故に無限の域に儻徊せんかいして、縹緲ひょうせうのちまたに

彷徨ほうこうすると形容するかも知れぬ。何と云うも皆その人の自由である。わが、唐木からぎの机に憑よりてぼかんとした心裡しんりの状態は正まさにこれである。

余は明あきらかに何事をも考えておらぬ。またはたしかに何物をも見ておらぬ。わが意識の舞台に著るしき色彩をもつて動くものがないから、われはいかなる事物に同化したとも云えぬ。されども吾は動いている。世の中に動いてもおらぬ、世の外にも動いておらぬ。ただ何となく動いている。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に対して動くにもあらず、ただ恍惚こうこつと動いている。

強しいて説明せよと云わるるならば、余が心はただ春と共に動いていると云いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打つて、固めて、仙丹せんたんに練り上げて、それを蓬萊ほうらいの靈液れいえきに溶と

いて、桃源とうげんの日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間まに毛孔けあなから染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和ほうわされてしまったと云いたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快げうかいであろう。余の同化には、何と同化したか不分明ふぶんみやうであるから、毫ごうも刺激がない。刺激がないから、窈然ようぜんとして名状たのしみしがたい楽がある。風に揉もまれて上うわの空そらなる波を起す、軽薄けいはくで騒々おもむぎしい趣とは違ちがう。目に見えぬ幾尋いくひろの底を、大陸から大陸まで動いている潢洋こうやうたる蒼海そうかいの有様と形容する事が出来る。ただそれほどに活力がないばかりだ。しかしそこにかえつて幸福がある。偉大なる活力の発現は、この活力がいつか尽き果てるだろうとの懸念けんねんが籠こもる。常の姿にはそう云う心配は伴わぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈はげしき力の銷磨しょうましはせぬかとの憂うれいを離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却して

る。淡しとは単に捕え難しと云う意味で、弱きに過ぎる虞を含  
んではおらぬ。冲融とか澹蕩とか云う詩人の語はもつともこの  
境を切実に言い了せたものだろう。

この境界を画にして見たらどうだろうと考えた。しかし普通  
の画にはならないにきまつている。われらが俗に画と称するも  
のは、ただ眼前の人事風光をありのままなる姿として、もしくは  
これをわが審美眼に漉過して、絵絹の上に移したものに過ぎぬ。  
花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、  
画の能事は終つたものと考えられている。もしこの上に一頭地  
を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたるままの趣を添え  
て、画布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己  
が捕えたる森羅の裡に寓するのがこの種の技術家の主意である  
から、彼らの見たる物象観が明瞭に筆端に迸しっておらねば、

面を製作したとは云わぬ。己おのれはしかじかの事を、しかじかに観み、しかじかに感じたり、その観方みかたも感じ方も、前人ぜんじんの籬下りかに立ちて、古来の伝説に支配せられたるにあらず、しかももつとも正しくして、もつとも美しくしきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云うをあえてせぬ。

この二種の製作家しゅかくに主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。されど今、わが描かんとする題目は、さほどに分明ぶんみやうなものではない。あらん限りの感覺を鼓舞こぶして、これを心外ふんみやうに物色したところで、方円の形、紅緑こうろくの色は無論、濃淡の陰、洪纖こうせんの線を見出しかねる。わが感じは外から来たのではない、たとい来たとしても、わが視界よこたに横わる、一定の景物でないから、これが源因げんいんだと指あを挙げて明らかに人に示す訳わけに行かぬ。あるもの

はただ心持ちである。この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう——否いやこの心持ちをいかなる具体を藉かりて、人の合点がてんするようほうふつに髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の画は感じはなくても物さえあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すればできる。第三に至つては存するものはただ心持ちだけであるから、画にするには是非共この心持ちに恰好かつこうなる対象を扱えらばなければならん。しかるにこの対象は容易に出て来ない。出て来ても容易まじまに纏まとまらない。纏つても自然界に存するものとは丸まるで趣おもむきを異ことにする場合がある。したがつて普通の人から見れば画とは受け取れない。描えがいた当人も自然界の局部が再現したものと認めておらん、ただ感興しやうきようの上さした刻下の心持ちを幾分でも伝えて、多少の生命を恂悦しんげつしがたきムードに与うれば大成功と心得ている。古来からこの難事業に全然いざおしの績しを収

め得たる画工があるかないか知らぬ。ある点までこの流派りゅうはに指を染め得たるものを挙あぐれば、文与可ぶんよかの竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂たいがどうの景色けいしよくである。蕪村ぶそんの人物である。泰西たいせいの画家に至つては、多く眼を具象世界ぐしやうに馳はせて、神往しんおうの氣韻きいんに傾倒せぬ者が大多数を占めているから、この種の筆墨ふつがいに物外の神韻しんいんを伝え得るものはたして幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟せつしゆう、蕪村らの力つとめて描出した一種の氣韻は、あまりに単純でかつあまりに変化に乏しい。筆力の点から云えばとうていこれらの大家に及ぶ訳はないが、今わが画えにして見ようと思ふ心持ちはもう少し複雑である。複雑であるだけにどうも一枚のなかへは感じが収まりかねる。頰杖ほおづえをやめて、両腕を机の上に組んで考えたがやはり出て来ない。色、形、調子が出来て、自分の心が、ああここにいたなと、たちまち自己を認識

するようにかかなければならない。生き別れをした吾子わがこを尋ね  
当てるため、六十余州を回国かいくくして、寝ねても寤さめても、忘れる間ま  
がなかつたある日、十字街頭かいこうにふと邂逅かいこうして、稲妻いなずまの遮さえぎるひ  
まもなきうちに、あつ、ここにいた、と思うようにかかなけれ  
ばならない。それがむずかしい。この調子さえ出れば、人が見  
て何と云つても構かまわれない。画えでないと罵ののられても恨うらみはない。い  
やくも色の配合がこの心持ちの一部を代表して、線の曲直まげが  
この気合の幾分を表現して、全体の配置がこの風韻ふういんのどれほど  
かを伝えるならば、形にあらわれたものは、牛であれ馬であれ、  
ないしは牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭いとわれない。厭  
われないがどうも出来ない。写生帖せいしょうていを机の上へ置いて、両眼りょうがんが帖  
のなかへ落ち込むまで、工夫くふうしたが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考えた。こんな抽象ちゆうしょう的な興趣しやうてきを画えにしようとす

るのが、そもその間違である。人間にそう変りはないから、多くの人のうちにはきつと自分と同じ感興に触れたものがあつて、この感興を何らの手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすればその手段は何だろう。

たちまち音楽の二字がぴかりと眼に映つた。なるほど音楽はかかる時、かかる必要に逼せまられて生まれた自然の声であらう。楽がは聴きくべきもの、習うべきものであると、始めて気がついたが、不幸にして、その辺の消息はまるで不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レツシングと云う男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとなつてゐる境界きょうがいもとうてい物になりそうにない。余が嬉

しいと感ずる心裏しんりの状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、ていじ逡次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来りきた、二が消えて三が生まるがために嬉しいのではない。初ようぜんから窈然として同所どうしょに把住はじゆうする趣おもむきで嬉しいのである。すでに同所に把住する以上は、よしこれを普通の言語に翻訳したところで、必ずしも時間的に材料を按排あんぱいする必要があるまい。やはり絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来るだろう。ただいかなる景情けいじようを詩中に持ち来つて、この曠然こうぜんとして倚托きたくなき有様を写すかが問題で、すでにこれを捕とらえ得た以上はレッシングの説に従わんでも詩として成功する訳だ。ホーマーがどうでも、ヴァージルがどうでも構わない。もし詩が一種のムードをあらわすに適しているとすれば、このムードは時間しんちよくの制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを藉からずとも、

単純に空間的なる絵画上の要件を充たしきさえすれば、言語をもつて描き得るものと思う。

議論はどうでもよい。ラオコーンなどは大概忘れているのだから、よく調べたら、こつちが怪しくなるかも知れない。とにかく、画にしそくなつたから、一つ詩にして見よう、と写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖がった所を、どうにか運動させたいばかりで、毫も運動させる訳に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉まで出かかつているのに、出てくれないような気がする。そこで諦めると、出損なつた名は、ついに腹の底へ収まつてしまふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、さらさらして、箸に手応がないものだ。そこを辛抱すると、ようやく粘着が出て、攪き滑

ぜる手が少し重くなる。それでも構わず、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。しまいには鍋なべの中の葛が、求めぬに、先方から、争つて箸に附着してくる。詩を作るのはまさにこれだ。

手掛てがりのない鉛筆が少しずつつ動くようになるのに勢を得て、かれこれ二三十分したら、

青春二三月。愁随芳草長。閑花落空庭。素琴横虚堂。蟪蛄

掛不動。篆煙繞竹梁。

と云う六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。これなら始めから、画にすればよかつたと思う。なぜ画よりも詩の方が作り易やすかつたかと思う。ここまで出たら、あとは大した苦もなく出そうだ。しかし画えに出来ない情じょうを、次には咏うたつて見たい。あれか、これかと思わい煩わづらつた末と

うとう、

独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得  
一日靜。正知百年忙。遐懷寄何処。緬邈白雲郷。

と出来た。もう一返<sup>いっぺん</sup>最初から読み直して見ると、ちよつと面白く読まれるが、どうも、自分が今しがた入<sup>はい</sup>った神境を写したものとすると、索然<sup>さくぜん</sup>として物足りない。ついでだから、もう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つたまま、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖<sup>ふすま</sup>を引いて、開<sup>あ</sup>け放<sup>はな</sup>つた幅三尺の空間をちらりと、奇麗な影が通つた。はてな。

余が眼を転じて、入口を見たときは、奇麗なものが、すでに引き開けた襖の影に半分かくれかけていた。しかもその姿は余が見ぬ前から、動いていたものらしく、はつと思つた間に通り越した。余は詩をすてて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて来た。  
振りそですがた  
振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を寂然  
あるい  
として歩行て行く。余は覚えぬ鉛筆を落して、鼻から吸いかけた息をひたりと留めた。

はなぐも  
花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空氣のなかにしよりりよう  
蕭寥と見えつ、隠れつする。

女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽に引く裾の音さ  
わきめ  
えおのが耳に入らぬくらい静かに歩行している。腰から下にぱつと色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解からぬ。  
すそもよう  
ただ無地と模様をつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との境のごとき心地である。女はもとより夜と昼との境をある

いている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度行き何度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装よそおいをして、この不思議な歩行あゆみをつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至つてはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静肅に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。逝ゆく春の恨うらみを訴しうる所作しよさならば何が故ゆえにかくは無頓着むとんじやくなる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅きらを飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛せんえんとして、しばらくは冥邈めいぱくの戸口をまぼろしに彩いろどる中に、眼も醒さむるほどの帯地おびじは金欄きんらんか。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然そうぜんたる夕べのなかにつつま

れて、幽闐ゆうげんのあなた、遼遠りょうえんのかしこへ一分ごとくに消えて去る。燦きらめき渡る春の星の、暁あかつき近くに、紫深き空の底に陥おちいる趣おもむきである。

太玄たいげんの闍もんおのずから開ひらけて、この華はなやかなる姿を、幽冥ゆうめいの府ふに吸い込まんとするとき、余はこう感じた。金屏きんびようを背に、銀燭ぎんしよくを前に、春の宵の一刻を千金と、さざめき暮らしてこそしかるべきこの装よそおいの、厭いとう景色けしきもなく、争う様子も見えず、色相しきそう世界から薄れて行くのは、ある点において超自然の情景である。刻々と逼せまる黒き影を、すかして見ると女は肅然として、焦せきもせず、狼狽ろうたえもせず、同じほどの歩調をもつて、同じ所を徘徊はいかいしているらしい。身に落ちかかる災わざわいを知らぬとすれば無邪氣きわみの極である。知つて、災と思わぬならば物凄ものすしい。黒い所が本来の住居すまいで、しばらくの幻影まぼろしを、元もとのままなる冥漠めいばくの裏うちに収めればこそ、かよ

うに間靨かんせいの態度で、有うと無むの間に逍遙あいだししているのだらう。女のつけた振袖に、紛ふんたる模様ようの尽きて、是非すゐもなき磨墨するすみに流れ込むあたりには、おのが身の素性すじょうをほのめかしている。

またこう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りについて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚うつつのまままで、この世の呼吸いそぎを引き取るときに、枕元まくらもとに病やまいを護まもるわれらの心はさぞつらいだらう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生甲斐いきがいのない本人はもとより、傍はたに見ている親しい人も殺すが慈悲あきと諦あきらめられるかも知れない。しかしすやすやと寝入る児こに死ぬべき何とがの科とががあるう。眠りながら冥府よみに連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をせぬうちに、だまし打ちに惜おぼしき一命ひとこゝろを果はたすと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃のがれぬ定業じょうごうと得心とくしんもさせ、断念だんねんもして、念仏となを唱となえたい。死ぬべき条件そなが具そなわらぬ先に、死ぬる事

実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏となむあみだぶつ回向えこうをする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮かりの眠りから、いつの間まとも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかかった煩惱ぼんのうの綱をむやみに引かるるようで苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穏おだやかに寝かしてくれと思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。余は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡うちから救つてやろうかと思つた。しかし夢のように、三尺の幅を、すうと抜ける影を見るや否いなや、何だか口が聴きけなくなる。今度はと心を定めているうちに、すうと苦もなく通つてしまう。なぜ何とも云えぬかと考うる途端とたんに、女はまた通る。こちらに窺うかがう人があつて、その人が自分の

ためにどれほどやきもき思っているか、微塵みじんも気に掛からぬ有様で通る。面倒にも気の毒にも、初手しよてから、余のごときものに、気をかねておらぬ有様で通る。今度は今度はと思っているうちに、こらえかねた、雲の層が、持ち切れぬ雨の糸を、しめやかに落し出して、女の影を、蕭々しやうしやうと封じおわ了る。

## 七

寒い。手拭てぬぐいを下げ、湯壺ゆつぼへ下るくだ。

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳ほどの風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影みかげで敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋とうふやほどの湯槽ゆづねを据すえる。槽ふねとは云うもののやはり石で畳畳である。鉢泉と名のつ

く以上は、色々な成分を含んでいるのだろうが、色が純透明だから、入り心地はいごちがよい。折々は口にさえふくんで見るが別段の味も臭においもない。病氣にも利きくそうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。もとより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。ただ這入はいる度に考え出すのは、白樂天はくらくてんの温泉おんせんみずなめらかにしてぎょうしをあらう水滑すべ洗凝脂せんぎじと云う句だけである。温泉と云う名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快な気持になる。またこの気持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思ってる。この理想以外に温泉についての注文はまるでない。

すぼりと浸つかると、乳のあたりまで這入はいる。湯はどこから湧わいて出るか知らぬが、常でも槽ふねの縁ふちを奇麗に越している。春の石は乾かわくひまなく濡ぬれて、あたたかに、踏む足の、心は穩おだやか

に嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤おすほどのしめやかさであるが、軒のしずくは、ようやく繁く、ぼたり、ぼたりと耳に聞える。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さえあれば、節穴の細きを厭わず洩れ出でんとする景色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく靄は長閑に、夕餉炊く、人の煙は青く立って、大いなる空に、わがはかなき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものを、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。眼に写るものの見えぬほど、濃くまつわりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己れを見出すように、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すともこの煙りから出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき

虹にじの中に埋うづめ去る。酒に酔うと云う言葉はあるが、煙りに酔うと云う語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使えぬ、霞には少し強過ぎる。ただこの靄しゆんしょうに、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯槽ゆぢねのふちに仰向あおむけの頭を支ささえて、透すき徹とおる湯のなかの軽かろき身体からだを、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂ただよわして見た。ふわり、ふわりと魂たましいがくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽らくなものだ。分別ぶんべつの錠前じようまえを開あけて、執着しゆうじやくの栓張しんばりをはずす。どうともせよと、湯泉ゆのなかで、湯泉ゆと同化してしまふ。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督キリストの御弟子おんでしとなつたよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門どざえもんは風流ふうりゆうである。スウインバートの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがつてい

る感じを書いてあつたと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフエリヤも、こう観察するとだいぶ美しくなる。何であんな不愉快な所を扱えらんだものかと今まで不審に思っていたが、あれはやはり画えになるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで両岸にいろいろな草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、きつと画になるに相違ない。しかし流れて行く人の表情が、まるで平和ではほとんど神話か比喩ひゆになつてしまふ。痙攣けいれん的な苦悶くもんはもとより、全幅の精神をうち壊こわすが、全然色気いろけのない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じところに存す

るか疑わしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。しかし思うような顔はそうたやすく心に浮んで来そうもない。

湯のなかに浮いたまま、今度は土左衛門の賛を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろう。

霜が下りたら冷たかる。

土のしたでは暗かるう。

浮かば波の上、

沈まば波の底、

春の水なら苦はなかる。

と口のうちに小声に誦しつつ漫然と浮いていると、どこかで弾く三味線の音が聞える。美術家だのにと云われると恐縮するが、実のところ、余がこの楽器における智識はすこぶる怪しいもの

で二が上がるうが、三が下がるうが、耳には余り影響を受けた  
試ためしがない。しかし、静かな春の夜に、雨さえ興を添える、山  
里の湯壺ゆつぼの中で、魂たましいまで春の温泉でゆに浮かしながら、遠くの三味  
を無責任に聞くのははなはだ嬉しい。遠いから何を唄うたつて、何  
を弾ひいているか無論わからない。そこに何だか趣おもむきがある。音色ねいろ  
の落ちついているところから察すると、上方かみがたの檢校けんぎょうさんの地唄じうた  
にでも聴かれそうな太棹ふとざおかとも思う。

小供の時分、門前に万屋よろずやと云う酒屋があつて、そこに御倉おくらさん  
と云う娘がいた。この御倉さんが、静かな春の昼過ぎになると、  
必ず長唄の御浚おさらいをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶  
島の十坪余りを前に控ひかえて、三本の松が、客間の東側に並んで  
いる。この松は周り一尺まわもある大きな樹で、面白い事に、三本  
寄つて、始めて趣のある恰好かつこうを形つくつていた。小供心にこの

松を見ると好い心持になる。松の下に黒くさびた鉄灯籠が名の知れぬ赤石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺かたくなじじいのようにかたく坐つている。余はこの灯籠を見詰めるのが大好きであつた。灯籠の前後には、苔深こけき地を抽ぬいて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顔に、独りひと匂うて独り楽しんでゐる。余はこの草のなかに、わずかに膝ひざを容いるるの席を見出して、じつと、しやがむのがこの時分の癖であつた。この三本の松の下に、この灯籠を睨にらめて、この草の香かを臭かいで、そうして御倉さんの長唄を遠くから聞くのが、当時の日課であつた。

御倉さんはもう赤い手絡てがらの時代さえ通り越して、だいぶんと世帯しよたいじみた顔を、帳場さばへ曝さらしてゐるだらう。聳むことは折合おりあいがいいか知らん。燕つばくろは年々帰つて来て、泥どろを啣ふくんだ嘴くちばしを、いそがしげに働かしているか知らん。燕と酒の香かとはどうしても想像から切

り離せない。

三本の松はいまだに好い恰好で残っているかしらん。鉄灯籠はもう壊れたに相違ない。春の草は、昔し、しゃがんだ人を覚えていたのだろうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今に見知ろうはずがない。御倉さんの旅の衣は鈴懸のと云う、日ごとの声もよも聞き覚えがあるとは云うまい。

三味の音が思わぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は床しい過去の面のあたりに立って、二十年の昔に住む、頑是なき小僧と、成り済ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

誰か来たかと、身を浮かしたまま、視線だけを入口に注ぐ。湯槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乗せているから、槽に下る段々は、間二丈を隔てて斜めに余が眼に入る。しかし

見上げたる余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶るあまだれ雨垂の音のみが聞える。三味線はいつの間にかやんでいた。

やがて階段の上に何物かあらわれた。広い風呂場を照すものは、ただ一つの小さき釣り洋灯のみであるから、この隔りでは澄切った空気を控えてさえ、確と物色はむずかしい。まして立ち上がる湯気の、濃かなる雨に抑えられて、逃場を失いたる今宵の風呂に、立つを誰とはもとより定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに、照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも声は掛けられぬ。

黒いものが一步を下へ移した。踏む石は天鷲絨のごとく柔らかくない。が見えて、足音を証にこれを律すれば、動かぬと評しても差支ない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は画工だけあって人体の骨格については、存外視覚が鋭敏である。何とも知れぬものの

一段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考える間に、女の影は遺憾なく、余が前に、早くもあらわれた。漲ぎり渡る湯煙りの、やわらかな光線を一分子ごとに含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾わす黒髪を雲とながして、あらん限りの背丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云う感じはことごとく、わが脳裏を去つて、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思つた。

古代希臘ギリシヤの彫刻はいざ知らず、今世仏国きんせいふつこくの画家が命と頼む裸体画を見るたびに、あまりに露骨な肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹こんせきが、ありありと見えるので、どこことなく氣韻きいんに乏しい心持とぼが、今までわれを苦しめてならなかつた。しかし

その折々はただごとなく下品だと評するまでで、なぜ下品であるかが、解らぬ故、吾知らず、答えを得るに煩悶して今日に至つたのだらう。肉を蔽えば、うつくしきものが隠れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸体画と云うはただかくさぬと云う卑しきに、技巧を留めておらぬ。衣を奪いたる姿を、そのままに写すだけにては、物足らぬと見えて、飽くまでも裸体を、衣冠の世に押し出そうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸にすべての権能を附与せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも、十五分にも、どこまでも進んで、ひたすらに、裸体であるぞと云う感じを強く描出しようとする。技巧がこの極端に達したる時、人はその観者を強うるを陋とする。うつくしきものを、いやが上に、うつくしくせんと焦せるとき、うつくしきものはかえつてその度を減ずるが例である。人事に

ついても満は損を招くとの諺はこれがためである。

放心ほうしんと無邪気とは余裕を示す。余裕は画えにおいて、詩において、もしくはは文章において、必須ひつすうの条件である。今代きんだい芸術げいじゆつの大弊へいとう竇は、いわゆる文明の潮流が、いたずらに芸術の士を駆つて、拘々くくとして随処あくそくに齷齪あくそくたらしむるにある。裸体画はその好例であろう。都会に芸妓げいぎと云うものがある。色を売りて、人に媚こびるを商売ひようかくにしている。彼らは嫖客ひようかくに対する時、わが容姿のいかに相手の瞳子ひとみに映うつずるかを顧慮こりよするのほか、何らの表情をも発揮はつきし得ぬ。年々に見るサロンの目録はこの芸妓に似たる裸体美人を以て充滿ひんまんしている。彼らは一秒時も、わが裸体なるを忘るる能あたわざるのみならず、全身の筋肉をむずつかして、わが裸体なるを觀者くわんしやに示さんと力つとめている。

今余が面前ひんまへに娉婷ひようていと現あらわれたる姿には、一塵もこの俗埃ぞくあいの眼

に遮さえぐるものを帯びておらぬ。常の人の纏まとえる衣装を脱ぎ捨てたる様さまと云えばすでに人界にんがいに墮だ在ざいする。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代かみよの姿を雲のなかに呼び起したるがごとく自然である。

室を埋うづむる湯煙は、埋めつくしたる後あとから、絶えず湧わき上がる。春の夜の灯ひを半透明に崩くずし拡げて、部屋一面の虹霓にじの世界が濃こまやかに揺れるなかに、朦朧もうろうと、黒きかとも思われるほどの髪ぼかを暈ぼかして、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がって来る。その輪廓りんかくを見よ。

頸筋くびすじを軽かろく内輪くびすじに、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指わかと分れるのである。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、また滑なめらかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。

張る勢いきおいを後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾くかたむ。逆ぎやくに受くる膝頭ひざがしらのこのたびは、立て直して、長きうねりの踵かかとにつく頃、平たき足が、すべてのかつとう葛藤を、二枚の蹠あしのうらに安々と始末する。世の中にこれほど錯雜さくざつした配合はない、これほど統一のある配合もない。これほど自然で、これほど柔やわらかで、これほど抵抗の少い、これほど苦にならぬ輪廓は決して見出せぬ。

しかもこの姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が眼の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄じゆうげんに化する一種の靈氣れいふんのなかに髣髴ほうふつとして、十分の美を奥床おくゆかしくもほのめかしているに過ぎぬ。片鱗へんりんを澆墨淋漓はつぼくりんりの間に点じて、虬竜きゆうりゅうの怪かいを、楮毫ちよごうのほかに想像せしむるがごとく、芸術的に観じて申し分のない、空気と、あたたかみと、冥邈めいぱくなる調子とを具そなえている。六々三十六

鱗を丁寧じようしやしやに描きたる竜りゆうの、滑稽こっけいに落つるが事実ならば、赤裸々せきららの肉を淨洒じようしやしや々に眺めぬうちかつらに神往みやこの余韻よゐんはある。余はこの輪廓の眼に落ちた時、桂の都みやこを逃れた月界げっかいの嫦娥じようがが、彩虹にじの追手おつてに取り囲まれて、しばらく躊躇ちゆうちよする姿と眺ながめた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、せつかくの嫦娥じようがが、あわれ、俗界に墮落するよと思せつなう刹那せつなに、緑の髪は、波を切る靈龜れいきの尾のごとくに風を起して、莽ぼうと靡なびいた。渦捲うずまく煙りを劈つんざいて、白い姿は階段を飛び上がる。ホホホと鋭どく笑う女の声とおのが、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第むじうに向へ遠退とおのく。余はがぶりと湯を呑のんだまま槽ふねの中に突立つたつ。驚いた波が、胸へあたる。縁ふちを越す湯泉ゆの音がさあさあと鳴る。

御茶の御馳走ごちそうになる。相客は僧一人、観海寺かんかいじの和尚おしょうで名は大徹だいてつと云うそうだ。俗一人ぞく、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き当って、左へ折れた行いき留りどまにある。大きさは六畳もあるう。大きな紫檀したんの机を真中に据すえてあるから、思つたより狭苦しい。それへと云う席を見ると、布団ふとんの代りに花毯かたんが敷いてある。無論支那製だろう。真中を六角に仕切しきつて、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周圍まわりは鉄色に近い藍あゐで、四隅よすみに唐草からくさの模様を飾つた茶の輪わを染め抜いてある。支那ではこれを座敷に用いたものか疑わしいが、こゝうやつて布団に代用して見るとすこぶる面白い。印度インドの更紗さらざとか、ペルシャの壁掛かべかけとか号するものが、ちよつと間まが抜けているところに価値があるごとく、この花毯もこせつかないところ

におもむき  
に趣がある。花毯ばかりではない、すべて支那の器具は皆抜けている。どうしても馬鹿で気の長い人種の発明したものとほか取れない。見ているうちに、ぼおつとするとところが尊とつとい。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、そうしてどこまでも娑婆しやば気がとれない。まずこう考えながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯の半なかばを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝ひざの傍を通り越して、頭は老人の臀しりの下に敷かれている。老人は頭の毛をことごとく抜いて、頬あこと顎あごへ移植したように、白い髯ひげをむしやむしやと生はやして、茶托ちやたくへ載のせた茶碗を丁寧ていねいに机の上へならべる。

「今日きょうは久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使おつかいをありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰ごむさたをしたから、今日ぐらい来て見ようかと思つとつたところじゃ」と云う。この僧は六十近い、丸顔の、達磨だるまを草書そうしょに崩くずしたような容貌ようぼうを有あしている。老人とは平常ふだんからの昵懇じっこんと見える。

「この方かたが御客ごきゃくさんかな」

老人は首肯うなずきながら、朱泥しゆでいの急須きゅうずから、緑を含む琥珀色こはくいろの玉液ぎよくえきを、二三滴たずつ、茶碗ちawanの底へしたたらす。清あい香かりがかすかに鼻おそを襲おそう気分おこころがした。

「こんな田舎いなかに一人ひとりでは御淋おさみしかろ」と和尚おしやうはすぐ余あに話わしかけた。

「はああ」となるともかとも要領ようりやうを得ぬ返事こたへをする。淋さびしいと云いえば、偽いつわりである。淋さびしからずと云いえば、長い説明せつめいが入いる。「なんの、和尚おしやうさん。このかたは画えを書かかれるために来きられた

のじやから、御忙おいそがしいくらいじや」

「おお左様さようか、それは結構だ。やはり南宗派なんそうはかな」

「いいえ」と今度は答えた。西洋画などと云つても、この和尚にはわかるまい。

「いや、例の西洋画じや」と老人は、主人役に、また半分引き受けてくれる。

「ははあ、洋画か。すると、あの久一きゅういちさんのやられるようなものかな。あれは、わしこの間始めて見たが、随分奇麗にかけたのう」

「いえ、詰らんものです」と若い男がこの時ようやく口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見ていただいたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見ていただいたんじやないですが、鏡が池で写生しているところを和尚さんに見つかつたのです」

「ふん、そうか——さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗はすこぶる大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかかつたところか、ちよつと見当のつかないものが、べたに描いてある。

「空兵衛です」と老人が簡単に説明した。

「これは面白い」と余も簡単に賞めた。

「空兵衛はどうも偽物が多くて、——その糸底を見て御覧なさい。銘があるから」と云う。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かそうに写っている。首を曲げて、覗き込むと、空の

字が小さく見える。銘は觀賞の上において、さのみ大切のものとは思わないが、好事者こうざしやはよほどこれが氣にかかるそうだ。茶碗を下へ置かないで、そのまま口へつけた。濃く甘くあま、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しずくずつ落して味あじわつて見るのは閑人かんじんてきい適意いんじの韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違だ。舌頭ぜつとうへほたりと載のせて、清いものが四方へ散れば咽喉のどへ下くだるべき液はほとんどない。ただ馥郁ふいくたる匂においが食道から胃のなかへ沁しみ渡るのみである。齒を用いるは卑いやしい。水はあまりに軽い。玉露ぎよくろに至こつては濃こかなる事、淡水たんすいの境きようを脱して、顎あごを疲らすほどの硬かたさを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴あうるものあらば、眠られぬも、茶を用いよと勧めたい。老人はいつの間にやら、青玉せいぎよくの菓子皿を出した。大きな塊かたまりを、かくまで薄く、かくまで規則正しく、剝くりぬいた匠人しょうじんの手際は

驚ろくべきものと思う。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだまま、逃がれ出ずる路を失つたような感じである。中には何も盛らぬがいい。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちとばかり見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好じゃ。時にあなた、西洋画では襖などはかけんものかな。かけるなら一つ頼みたいがな」

かいてくれなら、かかぬ事もないが、この和尚の気に入るか入らぬかわからない。せっかく骨を折つて、西洋画は駄目だなどと云われては、骨の折栄がない。

「襖には向かないでしょう」

「向かんな。そうさな、この間の久一さんの画のようじゃ、少

し派手過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれはまるでいたずらです」と若い男はしきりに、恥かしがって謙遜する。

「その何とか云う池はどこにあるんですか」と余は若い男に念のため尋ねて置く。

「ちよつと観海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。——なあに学校にいる時分、習ったから、退屈まぎれに、やって見ただけです」

「観海寺と云うと……」

「観海寺と云うと、わしのいる所じゃ。いい所じゃ、海を一目に見下しての——まあ逗留中にちよつと来て御覧。なに、ここからはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるじやろうが」

「いつか御邪魔に上つてもいいですか」

「ああいいとも、いつでもいる。ここの御嬢さんも、よう、来られる。——御嬢さんと云えば今日は御那美さんが見えんようだが——どうかされたかな、隠居さん」

「どこぞへ出ましたかな、久一きゆういち、御前の方へ行きはせんかな」

「いいや、見えません」

「また独り散歩かな、ハハハハ。御那美さんはなかなか足が強

い。この間法用で礪並まで行つたら、姿見橋すがたみばしの所で——どうも、

善く似とると思つたら、御那美さんよ。尻を端折はしよつて、草履ぞうりを

穿はいて、和尚おしょうさん、何をぐずぐず、どこへ行きなされると、いき

なり、驚ろかされたて、ハハハハ。御前はそんな形姿なりで地体じたいど

こへ、行つたのぞいと聴くと、今芹摘せりつみに行つた戻りじゃ、和

尚さん少しやろうかと云うて、いきなりわしの袂たもとへ泥どろだらけの

芹を押し込んで、ハハハハハ

「どうも、……」と老人は苦笑にがわらいをしたが、急に立つて「実はこれを御覧に入れるつもりで」と話をまた道具の方へそらした。老人が紫檀したんの書架から、恭うやうやしく取り下おろした紋緞子もんどんすの古い袋は、何だか重そうなものである。

「和尚さん、あなたには、御目に懸かけた事があつたかな」

「なんじゃ、一体」

「硯すずりよ」

「へえ、どんな硯かい」

「山陽さんようの愛蔵したと云う……」

「いいえ、そりやまだ見ん」

「春水しゅんすいの替え蓋ぶたがついて……」

「そりや、まだのようだ。どれどれ」

老人は大事そうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角かどを見せる。

「いい色いろあ合あじいゃいのう。端溪たんけいかい」

「端溪くよくがんで鴈ここの眼がんが九つある」

「九つ？」と和尚おおい大だいに感かんじた様よう子しである。

「これが春水の替かえ蓋がい」と老人は綸りん子すで張はつた薄うすい蓋がいを見せる。上うへに春水の字じで七言絶句しちごんぜつこが書かいてある。

「なるほど。春水はようかく。ようかくが、書しよは杏坪きやうへいの方が上じようす手ずじじゃじて」

「やはり杏坪の方がいいかな」

「山陽さんようが一番いちばんまずいようだ。どうも才子さいし肌しで俗気ぞくきがあつて、いついつここう面白おもしろうない」

「ハハハハ。和尚おしょうさんは、山陽さんようが嫌きらいだから、今日は山陽さんようの幅ふく

を懸け替かえて置いた」

「ほんに」と和尚うしさんは後うしろを振り向く。床とこは平床ひらとこを鏡かがみのよう  
にふき込んで、鏽さび氣けを吹いた古銅瓶こどうへいには、木蘭もくらんを二尺の高たかさに、  
活いけてある。軸じくは底光りのある古錦欄こきんらんに、装幀そうていの工夫くふうを籠こめた  
物徂徠ぶつそらいの大幅たいふくである。絹地きんぬではないが、多少の時代じだいがついてい  
るから、字の巧拙くわくせつに論なく、紙の色が周囲しゅういのきれ地ぢとよく調和  
して見える。あの錦欄きんらんも織りたては、あれほどのゆかしさも無  
かつたろうに、彩色さいしきが褪あせて、金糸きんしが沈しんで、華麗はでなところが  
滅めり込んで、渋しぶいところがせり出して、あんないい調子てうしになつ  
たのだと思う。焦茶こげちやの砂壁すなかべに、白しろ象牙ぞうげの軸じくが際立きわだつて、両方  
に突張とこつている、手前てまへに例の木蘭もくらんがふわりと浮うき出でされている  
ほかは、床全体とこの趣おもむきは落ちつき過ぎてむしろ陰氣いんきである。  
「徂徠そらいかな」と和尚おしょうが、首くびを向けたまま云いう。

「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善かろうと思つて」

「それは徂徠の方が遙かにいい。享保頃の学者の字はまずくても、どこぞに品がある」

「広沢をして日本の能書ならしめば、われはすなわち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だったかな、和尚さん」

「わしは知らん。そう威張るほどの字でもないで、ワハハハハ」  
「時に和尚さんは、誰を習われたのかな」

「わしか。禅坊主は本も読まず、手習もせんから、のう」

「しかし、誰ぞ習われたらう」

「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それぎりじや。それでも人に頼まれればいつでも、書きます。ワハハハハ。時にその端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。

とうとう緞子の袋を取り除ける。一座の視線はことごとく硯すずりの上に落ちる。厚さはほとんど二寸に近いから、通例のもののの倍はあろう。四寸に六寸の幅も長さもまず並なみと云つてよろしい。蓋ふたには、鱗うろこのかたに研みがきをかけた松の皮をそのまま用いて、上しゆうるしには朱漆で、わからぬ書体が二字ばかり書いてある。

「この蓋が」と老人が云う。「この蓋が、ただの蓋ではないので、御覧の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見ている。しかし松の皮の蓋にいかなる因縁いんねんがあるうと、画工として余はあまり感服は出来んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云つた。老人はまあと云わぬばかりに手を挙あげて、

「ただ松の蓋と云うばかりでは、俗でもあるが、これはその何なですよ。山陽さんようが広島におつた時に庭に生えていた松の皮を剥はい

で山陽が手ずから製したのですよ」

なるほど山陽は俗な男だと思つたから、

「どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れそんなものですね。わざとこの鱗のかたなどをぴかぴか研ぎ出さなくつても、よさそうに思われますが」と遠慮のないところを云つて退けた。  
「ワハハハハ。そうよ、この蓋はあまり安つぽいようだな」と和尚はたちまち余に賛成した。

若い男は気の毒そうに、老人の顔を見る。老人は少々不機嫌の体に蓋を払いのけた。下からいよいよ硯が正体をあらわす。

もしこの硯について人の眼を峙つべき特異の点があるとすれば、その表面にあらわれたる匠人の刻である。真中に袂時計ほどな丸い肉が、縁とすれすれの高さに彫り残されて、これを蜘蛛の背に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走

ると見れば、先には各おのおの鳩鴿眼くよくがんを抱かかえている。残る一個は背の真中に、黄きな汁しるをしたたらしたごとく煮染にじんで見える。背と足と縁を残して余る部分はほとんど一寸余の深さに掘り下げである。墨を湛たたえる所は、よもやこの塹壕ざんごうの底ではあるまい。たとい一合の水を注ぐともこの深さを充みたすには足らぬ。思うに水盂すいうの中から、一滴の水を銀杓ぎんしゃくにて、蜘蛛くもの背に落したるを、貴とうとき墨に磨すり去るのだらう。それでなければ、名は硯でも、その実は純然たる文房用ぶんぼうようの装飾品に過ぎぬ。

老人は涎よだれの出そうな口をして云う。

「この肌合はだあいと、この眼がんを見て下さい」

なるほど見れば見るほどいい色だ。寒く潤沢じゆんたくを帯びたる肌の上に、はつと、一息懸ひといきかけたなら、直ただちに凝こつて、一朶いちだの雲を起すだらうと思われる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色

と云わんより、眼と地の相交あいまじわる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、ほとんど吾眼わがめの欺あざむかれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹むしようかんの奥に、隠元豆いんげんまめを、透すいて見えるほどの深さに嵌はめ込んだようなものである。眼と云えば一個二個でも大變に珍重される。九個と云つたら、ほとんど類るいはあるまい。しかもその九個が整然せいぜんと同距離どうきりに按排あんばいされて、あたかも人造のねりものと見違えらるるに至つてはもとより天下の逸品いつびんをもつて許さざるを得ない。

「なるほど結構です。観みて心持がいろいろばかりじゃありません。こうして触さわつても愉快です」と云いながら、余は隣りの若い男に硯すずりを渡した。

「久一きゅういちに、そんなものが解とるかい」と老人が笑いながら聞いて見る。久一君は、少々や自棄けの気味で、

「分りやしません」と打ち遣つたように云い放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めていては、もつたいないと気がついたものか、また取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧なに撫で廻わわした後のち、とうとうこれを恭うやうやしく禅師ぜんじに返却した。禅師はとくと掌ての上で見済ました末、それでは飽あき足らぬと考えたと見えて、鼠木綿ねずみめんの着物の袖そでを容赦なく蜘蛛くもの背へこすりつけて、光沢つやの出た所をしきりに賞翫しょうがんしている。

「隠居さん、どうもこの色が実に善よいな。使うた事があるかの」  
「いいや、滅多めったには使いいとう、ないから、まだ買かうたなりじゃ」  
「そうじゃろ。こないなのは支那しなでも珍めづらしかろうな、隠居さん」

「左様さよう」

「わしも一つ欲しいものじゃ。何なら久一さんに頼もうか。ど

うかな、買うて来ておくれかな」

「へへへへ。硯すずりを見つけないうちに、死んでしまひそうです」

「本当に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日にさんちうちに立ちます」

「隠居さん。吉田まで送つて御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合みあわすところじゃが、こと

によると、もう逢あえんかも、知れんから、送つてやろうと思う

ております」

「御伯父おおじさんは送つてくれんでもいいです」

若い男はこの老人の甥おいと見える。なるほどどこか似ている。

「なあに、送つて貰うがいい。川船かわふねで行けば訳はない。なあ隠

居さん」

「はい、山越やまごしでは難義だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辞退もしない。ただ黙っている。

「支那の方へおいでですか」と余はちよつと聞いて見た。

「ええ」

ええの二字では少し物足らなかつたが、その上掘つて聞く必要もないから控ひかえた。障子しょうじを見ると、蘭らんの影が少し位置を変えている。

「なあに、あなた。やはり今度の戦争で——これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は当人に代つて、満洲の野やに日ならず出征すべきこの青年の運命を余に語かたげた。この夢のような詩のような春の里に、啼なくは鳥、落つるは花、湧わくは温泉いんでゆのみと思ひ詰つめていたのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家へいけの後裔こうえいのみ住み古るしたる孤村にまで逼せまる。朔北さくほくの曠野こうやを染むる血潮の

何万分の一かは、この青年の動脈から迸ほとぼしる時が来るかも知れない。この青年の腰に吊つる長き剣つるぎの先から煙りとなつて吹くかも知れない。しかしてその青年は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工の隣りに坐つてゐる。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臓の鼓動さえ聞き得るほど近くに坐つてゐる。その鼓動のうちには、百里の平野を捲まく高き潮うしおが今すでに響ひびいてゐるかも知れぬ。運命は卒然そつぜんとしてこの二人を一堂のうちに会したるのみにて、その他には何事をも語らぬ。

## 九

「御勉強ですか」と女が云う。部屋に帰つた余は、三脚几さんぎやくぎに縛しばりつけた、書物の一冊を抽ぬいて読んでいた。

「御這入りなさい。ちつとも構いません」

女は遠慮する景色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟はんえりの中から、恰好かっこうのいい頸くびの色が、あざやかに、抽ぬき出ている。女が余の前に坐った時、この頸とこの半襟の対照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、むずかしい事が書いてあるでしょうね」

「なあに」

「じゃ何が書いてあるんです」

「そうですね。実はわたしにも、よく分らないんです」

「ホホホホ。それで御勉強なの」

「勉強じゃありません。ただ机の上へ、こう開あけて、開いた所をいい加減に読んでるんです」

「それで面白いんですか」

「それが面白いんです」

「なぜ？」

「なぜって、小説なんか、そうして読む方が面白いです」

「よつぽど変つていらつしやるのね」

「ええ、ちつと変つてます」

「初から読んじや、どうして悪るいでしよう」

「初から読まなけりやならないとすると、しまいまで読まなけりやならない訳になりましょう」

「妙な理窟りくつだ事。しまいまで読んだつていいじゃありませんか」  
「無論わるくは、ありませんよ。筋を読む気なら、わたしだつて、そうします」

「筋を読まなけりや何を読むんです。筋のほかに何か読むものがありますか」

余は、やはり女だなど思った。多少試験してやる気になる。

「あなたは小説が好きですか」

「私が？」と句を切った女は、あとから「そうですねえ」と判然はつきりしない返事をした。あまり好きでもなさそうだ。

「好きだか、嫌きらだか自分にも解らないんじゃないですか」

「小説なんか読んだって、読まなくったって……」

と眼中にはまるで小説の存在を認めていない。

「それじゃ、初から読んだって、しまいから読んだって、いい加減な所をいい加減に読んだって、いい訳じゃありませんか。あなたのようにそう不思議がらないでもいいでしょう」

「だって、あなたと私とは違いますもの」

「どこが？」と余は女の眼まなこの中を見詰めた。試験をするのはここだと思つたが、女の眸ひとみは少しも動かない。

「ホホホ解りませんか」

「しかし若いうちは随分御読みなすつたろう」余は一本道で押し合うのをやめにして、ちよつと裏へ廻つた。

「今でも若いつもりですよ。可哀想かわいそうに」放した鷹たかはまたそれかかる。すこしも油断がならん。

「そんな事が男の前で云えれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「そう云うあなたも随分の御年じゃあ、ありませんか。そんなに年をとつても、やつぱり、惚ほれたの、腫はれたの、にきびが出来たのつてえ事が面白いんですか」

「ええ、面白いんです、死ぬまで面白いんです」

「おやそう。それだから画工えかきなんぞになれるんですね」

「全くです。画工だから、小説なんか初からしまいまで読む必

要はないんです。けれども、どこを読んでも面白いのです。あなたと話をするのも面白い。ここへ逗留とまりゆしているうちは毎日話をしたいくらいです。何ならあなたに惚れ込んでもいい。そうなるとなお面白い。しかしいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初からしまいまで読む必要があるんです」

「すると不人情ふにんじような惚れ方をするのが画工なんですね」

「不人情じゃありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤おみくじを引くように、ぱつと開あけて、開いた所を、漫然と読んでいるのが面白いんです」

「なるほど面白そうね。じゃ、今あなたが読んでいらつしやる所を、少し話してちょうだい。どんな面白い事が出てくるか伺

いたいから」

「話しちや駄目です。画えだつて話にしちや一文の価値ねうちもなくなるじゃありませんか」

「ホホホそれじゃ読んで下さい」

「英語ですか」

「いいえ日本語で」

「英語を日本語で読むのはつらいな」

「いいじゃありませんか、非人情で」

これも一興いっききようだろうと思つたから、余は女の乞こいに應じて、例の書物をぽつりぽつりと日本語で読み出した。もし世界に非人情な読み方があるとすればまさにこれである。聴きく女ももとより非人情で聴いている。

「情なさけの風が女から吹く。声から、眼から、肌はだえから吹く。男に

扶たすけられて舳ともに行く女は、夕暮のヴェニスを眺ながむるためか、扶くる男はわが脈みやくに稲妻いなずまの血を走らすためか。——非人情だから、いい加減ですよ。ところどころ脱けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足おたしなすつても構いません」

「女は男とならんで舷ふなばたに倚よる。二人の隔へだたりは、風に吹かるるりボンの幅よりも狭い。女は男と共にヴェニスに去らばと云う。ヴェニスなるドウジの殿楼でんろうは今第二の日没のごとく、薄赤く消えて行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔むかしヴェニスを支配した人間の名ですよ。何代つづいたものですかね。その御殿が今でもヴェニスに残つてゐるんです」

「それでその男と女と云うのは誰の事なんでしょう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。それだから面白いのですよ。今までの関係なんかどうでもいいでさあ。ただあなたとわたしのように、こういつしよにいるところなんで、その場限りで面白味があるでしょう」

「そんなものですかね。何だか船の中のようなですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいいんです。なぜと聞き出すと探偵たんでいになつてしまふです」

「ホホホホじや聴きますまい」

「普通の小説はみんな探偵が發明したものですよ。非人情なところがおもむきないから、ちつとも趣おもむきがない」

「じゃ非人情の続きを伺いましょう。それから？」

「ヴェニスいちまつは沈みつつ、沈みつつ、ただ空に引く一抹の淡き線

となる。線は切れる。切れて点となる。蛋白石とんぽだまの空のなかに円まるき柱が、ここ、かしこと立つ。ついには最も高く聳そびえたる鐘楼しゅろうが沈む。沈んだと女が云う。ヴェニスを去る女の心は空行く風のごとく自由である。されど隠れたるヴェニスは、再び帰らねばならぬ女の心に羈絆きせつの苦しみを与う。男と女は暗き湾かたの方に眼を注ぐ。星は次第に増す。柔らかに揺ゆら海は泡あわを濺そそがず。男は女の手を把とる。鳴りやまぬ弦ゆづるを握にぎった心地こころである。……」

「あんまり非人情でもないようですね」

「なにこれが非人情的に聞けるのですよ。しかし厭いやなら少々略しましうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたよりなお大丈夫です。——それからと、ええと、少しく六むずかしくなつて来たな。どうも訳し——いや読

みにくい」

「読みにくければ、御略おりやくしなさい」

「ええ、いい加減にやりましょう。——この一夜ひとよと女が云う。

一夜？ と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜いくよを重ねてこそ

と云う」

「女が云うんですか、男が云うんですか」

「男が云うんですよ。何でも女がヴェニスへ帰りたくないの

でしょう。それで男が慰める語ことばなんです。——真夜中の甲板かんばんに帆

綱を枕まくらにして横よこたわりたる、男の記憶おぼえには、かの瞬時しんじ、熱き一滴

の血ちに似たる瞬時しんじ、女の手を確しかと把とりたる瞬時しんじが大濤おおなみのごとく

に揺れる。男は黒き夜を見上げながら、強しいられたる結婚けっこんの淵ふち

より、是非是非に女を救い出さんと思ひ定めた。かく思ひ定めて男

は眼とを閉とずる。——」

「女は？」

「女は路に迷いながら、いずこに迷えるかを知らぬ様である。攫われて空行く人のごとく、ただ不可思議の千万無量——あとがちよつと読みにくいですよ。どうも句にならない。——ただ不可思議の千万無量——何か動詞はないでしょうか」

「動詞なんぞいるものですか、それで沢山です」

「え？」

轟と音がして山の樹がごとごとく鳴る。思わず顔を見合わす途端に、机の上の一輪挿に活けた、椿がふらふらと揺れる。「地震！」と小声で叫んだ女は、膝を崩して余の机に寄りかかる。御互の身軀がすれすれに動く。キキーと鋭どい羽搏をして一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云う。

「どこに」と女は崩した、からだを擦寄せる。余の顔と女の顔が触れぬばかりに近づく。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさわった。

「非人情ですよ」と女はたちまち坐住居を正しながら屹と云う。  
「無論」と言下に余は答えた。

岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く揺れている。地盤の響きに、満泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、砕けた部分はどこにもない。円満に動くと言ふ語があるとすれば、こんな場合に用いられるのだろう。落ちついて影を蘸していた山桜が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がったり、くねったりする。しかしどう変化してもやはり明らかに桜の姿を保っているところが非常に面白い。

「こいつは愉快だ。奇麗きれいで、変化があつて。こう云う風に動かなくつちや面白くない」

「人間もそう云う風にさえ動いていれば、いくら動いても大丈夫ですな」

「非人情でなくつちや、こうは動けませんよ」

「ホホホ大變非人情が御好きだこと」

「あなた、だって嫌きらな方じゃありますまい。昨日きのうの振袖ふりそでなん

か……」と言いかけると、

「何か御褒美ごほうびをちようだい」と女は急に甘あまえるように云つた。

「なぜです」

「見たいとおっしゃったから、わざわざ、見せて上げたんじやありませんか」

「わたしがですか」

「山越やまごしえをなさった画えの先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになつたそうで御座います」

余は何と答えてよいやらちよつと挨拶あいさつが出なかつた。女はすかさず、

「そんな忘れっぽい人に、いくら実じつをつくしても駄目ですわねえ」と嘲あざけるごとく、恨うらむがごとく、また真向まっこうから切りつけるがごとく二の矢をついだ。だんだん旗色はたいろがわるくなるが、どこで盛り返したもののか、いったん機先を制せられると、なかなか隙すきを見出しにくい。

「じゃ昨夕ゆうべの風呂場も、全く御親切からなんですわ」と際きわどいところでようやく立て直す。

女は黙っている。

「どうも済みません。御礼に何を上げましょう」と出来るだけ

先へ出て置く。いくら出てても何の利目ききめもなかった。女は何喰わぬ顔で大徹和尚の額を眺ながめてゐる。やがて、

「竹影 払階塵不動」  
ちくえいかいをはらつてちりうごかず

と口のうちに静かに読よみ了おわつて、また余の方へ向き直つたが、急に思い出したように、

「何ですつて」

と、わざと大きな声で聞いた。その手は喰くわない。

「その坊主にさつき逢あいましたよ」と地震に揺ゆれた池の水のよ  
うに円満な動き方をして見せる。

「観海寺かんかいじの和尚ですか。肥ふとつてるでしょう」

「西洋画で唐紙からかみをかいてくれつて、云いましたよ。禅坊さんな  
んてものは随分わけ訳のわからない事を云いますね」

「それだから、あんなに肥れるんですよ」

「それから、もう一人若い人に逢いましたよ。……」

「久一きゆういちでしよう」

「ええ久一君です」

「よく御存じです事」

「なに久一君だけ知ってるんです。そのほかには何にも知りやしません。口を聞くのが嫌きらな人ですね」

「なに、遠慮しているんです。まだ小供ですから……」

「小供って、あなたと同じくらいじゃありませんか」

「ホホホホそうですか。あれは私わたくしの従弟いとこですが、今度戦地へ行くので、暇乞いとまごに来たのです」

「ここに留とまって、いるんですか」

「いいえ、兄の家うちにおります」

「じゃ、わざわざ御茶を飲みに来た訳ですね」

「御茶より御白湯の方が好すきなんです。父がよせばいいのに、呼ぶものですから。麻痺しびれが切れて困ったでしょう。私がおれば中途から帰してやったんですが……」

「あなたはどこへいらしたんです。和尚おしょうが聞いていましたぜ、また一人散歩ひとりかかって」

「ええ鏡の池の方を廻つて来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行つて御覧なさい」

「画えにかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだなかなか投げないつもりです」

「私は近々きんきん投げるかも知れません」

余りに女としては思い切つた冗談じょうだんだから、余はふと顔を上げ

た。女は存外たしかである。

「私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いてるところじゃないんです——やすやすと往生して浮いているところを——奇麗な画にかいて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしょう」

女はすらりと立ち上る。三步にして尽くる部屋の入口を出るとき、<sup>かえり</sup>顧みてにこりと笑った。<sup>ぼうぜん</sup>茫然たる事多<sup>たじ</sup>時。

十

草枕

鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は<sup>ふたまた</sup>二股に<sup>わか</sup>岐れて、おのずから鏡が

池の周囲となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生い重なつて、ほとんど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一応廻つた上でないと見当がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁ほどよりあるまい。ただ非常に不規則な形ちで、ところどころに岩が自然のまま水際に横わつてゐる。縁の高さも、池の形の名状しがたいように、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねてゐる。

池をめぐりては雑木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いておらんのがあつた。割合に枝の繁まない所は、依然として、うららかな春の日を受けて、萌え出でた下草さえある。壺堇の淡き影が、ちらりちらりとその間に見える。

日本の輩は眠っている感じである。「天来てんらいの奇想きそうのように」、と形容した西人せいじんの句はとうていあてはまるまい。こう思う途端とたんに余の足はとまった。足がとまれば、厭いやになるまでそこにいる。いられるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追い立てる。都会は太平の民たみを乞食こじきと間違えて、掏摸すすりの親分たる探偵たんていに高い月俸を払う所である。

余は草を茵しとねに太平の尻しつぽんをそろりと卸おろした。ここならば、五六日こうしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣きづかいはない。自然のありがたいところはここにある。いざとなると容赦ようしやも未練みれんもない代りには、人に因よつて取り扱あつかいをかえるような軽薄な態度はすこしも見せない。岩崎いわさきや三井みつゐを眼中まなこに置かぬものは、いくらでもある。冷然として古今帝王の権威を風馬牛ふうばぎゆうし得るものは自然

のみである。自然の徳は高く塵界を超越して、対絶の平等觀を無辺際に樹立している。天下の羣小を靡いで、いたずらに夕イモンの憤りを招くよりは、蘭を九畹に滋き、蕙を百畦に樹えて、独りその裏に起臥する方が遙かに得策である。余は公平と云い無私と云う。さほど大事なものならば、日に千人の小賊を戮して、満圃の草花を彼らの屍に培養うがよからう。

何だか考が理に落ちていつこうつまらなくなつた。こんな中学程度の觀想を練りにわざわざ、鏡が池まで来はせぬ。袂から煙草を出して、寸燐をシュツと擦る。手応はあつたが火は見えない。敷島のさきに付けて吸つてみると、鼻から煙が出た。なるほど、吸つたんだなとようやく気がついた。寸燐は短かい草のなかで、しばらく雨竜のような細い煙りを吐いて、すぐ寂滅した。席をずらせてだんだん水際まで出て見る。余が茵は天然

に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬと云う間際まぎわで、とまる。水を覗のぞいて見る。

眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草みずぐさが、

往生おうじょうして沈んでいる。余は往生と云うよりほかに形容すべき言葉ことばを知らぬ。岡すずきの薄なびなら靡なびく事を知っている。藻もの草ならば誘さそう波なみの情なさけを待つ。百年待つても動きそうもない、水の底に沈められたこの水草は、動くべきすべての姿勢とこのを調べて、朝な夕なに、弄なぶらるる期きを、待ち暮らし、待ち明かし、幾代いくよの思おもいを茎くきの先に籠こめながら、今に至るまでついに動き得ずえに、また死に切れずきに、生きていゝらしい。

余は立ち上がって、草の中から、手頃の石を二つ拾ほつて来る。功德くどくになると思つたから、眼の先へ、一つ抛ほうり込んでやる。ぶくぶくと泡あわが二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消え

たと、余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三茎みくきほどの長い髪が、慵ものうげに揺れかかっている。見つかつてはと云わぬばかりに、濁った水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。

今度は思い切つて、懸命まんなかに真中へなげる。ぽかんと幽かすかに音がした。静かなるものは決して取り合わない。もう抛なげる気も無くなつた。絵の具箱と帽子を置いたまま右手へ廻る。

二間余りを爪先つまさきあ上がりに登る。頭の上には大きな樹きがかぶさつて、身体からだが急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿つばきが咲いている。

椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向ひなたで見ても、軽快な感じはない。ことにこの椿は岩角いわかどを、奥へ二三間遠退とおのいて、花がなければ、何があるか気のつかない所に森閑しんかんとして、かたまっている。その花が！ 一日勘定かんにじょうしても無論勘定し切れぬほど多い。しかし眼がつけば是非勘定したくなるほど鮮あざやかである。ただ鮮

かと云うばかりで、いつこよう陽気な感じがない。ぽつと燃え立つようで、思わず、気を奪られた、後は何だか凄くなる。あれほど人を欺す花はない。余は深山椿を見るたびにいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟った頃はすでに遅い。向う側の椿が眼に入つた時、余は、ええ、見なければよかつたと思つた。あの花の色はただの赤ではない。眼を醒すほどの派出やさの奥に、言うに言われぬ沈んだ調子を持つている。悄然として萎れる雨中の梨花には、ただ憐れな感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、ただ愛らしい気持ちがある。椿の沈んでいるのは全く違う。黒ずんだ、毒気のある、恐ろし味を帯びた調子である。この調子を底に持つて、上部はどこまでも派出に装っている。しかも人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を

招く様子も見えぬ。ぽつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぽつと咲いて、幾百年の星霜せいそうを、人目にかからぬ山陰に落ちつき払って暮らしている。ただ一眼ひとめ見たが最後！ 見た人は彼女の魔力から金輪際こんりんざい、免のがる事は出来ない。あの色はただの赤ではない。屠ほふられたる囚人しゅうじんの血が、自おのずから人の眼を惹ひいて、自から人の心を不快にするごとく一種異様な赤である。

見ていると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものはただこの一輪である。しばらくするとまたぽたり落ちた。あの花は決して散らない。崩くずれるよりも、かたまつたまま枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練みれんのないうように見えるが、落ちててもかたまっているところは、何となく毒々しい。またぽたり落ちる。ああやつて落ちているうちに、池の水が赤くなるだろうと考えた。花が静かに浮あたりいている辺は

今でも少々赤いような気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつかぬくらい静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだろうかと思う。年々落ち尽す幾万輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、ようやく底に沈むのかしらん。幾千年の後にはこの古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿のために、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。また一つ大きいのが血を塗つた、人魂のように落ちる。また落ちる。ほたりほたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ帰つて、また煙草を呑んで、ぼんやり考え込む。温泉場の御那美さんが昨日冗談に云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一

枚の板子いたごのように揺れる。あの顔を種たねにして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えとこしなに落ちて、女が長えに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが画えでかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。原理に背そむいても、背かなくつても、そう云う心持ちさえ出ればいい。しかし人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つてはすべてを打ち壊こわしてしまふ。と云つてむやみに気楽ではなお困る。一層いっそほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思おもわしくない。やはり御那美さんの顔が一番似合うようだ。しかし何だか物足らない。物足らないとまでは気がつくが、どこが物足らないかが、吾われながら不明である。した

がつて自己の想像でいい加減に作り易<sup>か</sup>える訳に行かない。あれに嫉<sup>しつと</sup>妒を加えたら、どうだろう。嫉<sup>しつと</sup>妒では不安の感が多過ぎる。憎<sup>ぞうお</sup>悪はどうだろう。憎<sup>ぞうお</sup>悪は烈<sup>は</sup>げし過ぎる。怒<sup>いかり</sup>? 怒では全然調和を破る。恨<sup>うらみ</sup>? 恨でも春恨<sup>しゅんこん</sup>とか云う、詩的のものならば格別、ただの恨では余り俗である。いろいろに考えた末、しまいにようやくこれだと気がついた。多くある情<sup>じょう</sup>緒のうちで、憐<sup>あわ</sup>れと云う字のあるのを忘れていた。憐<sup>あわ</sup>れは神の知らぬ情<sup>じょう</sup>で、しかも神にもつとも近き人間の情である。御那美さんの表情のうちにはこの憐<sup>あわ</sup>れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄<sup>とつき</sup>嗟の衝動<sup>とつき</sup>で、この情があの子の眉<sup>び</sup>宇<sup>う</sup>にひらめいた瞬間に、わが画<sup>え</sup>は成就<sup>じょうじゆ</sup>するであろう。しかし——いつそれが見られるか解らない。あの女の顔に普段充満しているものは、人を馬鹿にする微笑<sup>うすわらい</sup>と、勝とう、勝とうと焦<sup>あせ</sup>る八の字のみである。

あれだけでは、とても物にならない。

がさがりがざりと足音がする。胸裏きょうりの凶案は三分二ぶで崩くずれた。

見ると、筒袖つつそでを着た男が、背せへ薪まきを載のせて、熊笹くまささのなかを觀海

寺の方へわたつてくる。隣りの山からおりて来たのだらう。

「よい御ご天気で」と手拭てぬぐいをとつて挨拶あいさつする。腰かを屈かがめる途端とたんに、

三尺帯おとに落おした鉞なたの刃はがぴかりと光ひつた。四十恰好がつこうの遅たくましい男

である。どこかで見たようだ。男は旧知なれなれのように馴な々なしい。

「旦那だんなも画おを御描おきなさるか」余の絵の具箱あは開あけてあつた。

「ああ。この池かでも画かこうと思かつて来て見たが、淋さみしい所ところだね。

誰も通とらない」

「はあい。まことに山の中で……旦那だんなあ、峠とうげで御降おられなさつ

て、さぞ御困ごりでござんしたろ」

「え？ うん御前おまえはあの時の馬子まごさんだね」

「はあい。こうやつて薪たきぎを切つては城下じょうかへ持つて出ます」と源兵衛は荷おろを卸して、その上へ腰こしをかける。煙草たばこ入いれを出す。古いものだ。紙かみだか革かわだか分らない。余は寸燐マツチを借かしてやる。

「あんな所を毎日越すなあ大変だね」

「なあに、馴なれていきますから——それに毎日まいにちは越こしません。三日みつかに一返ぺん、ことによると四日よつかめ目めくらいになります」

「四日よつかめに一返ぺんでも御免ごめんだ」

「アハハハハ。馬うまが不憫ふびんですから四日よつかめ目めくらいにして置おきます」

「そりゃあ、どうも。自分より馬うまの方が大事だいじなんだね。ハハハハ」

「それほどでもないんで……」

「時にこの池いけはよほど古いもんだね。全体ぜんたいいつ頃ころからあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？　どのくらい昔から？」

「なんでもよつぽど古い昔から」

「よつぽど古い昔しからか。なるほど」

「なんでも昔し、志保田しほだの嬢様が、身を投げた時分からありますよ」

「志保田って、あの温泉場ゆづのかい」

「はい」

「御嬢さんが身を投げたって、現に達者でいるじゃないか」

「いんにえ。あの嬢さまじゃない。ずっと昔の嬢様が」

「ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」

「なんでも、よほど昔しの嬢様で……」

「その昔の嬢様が、どうしてまた身を投げたんだい」

「その嬢様は、やはり今の嬢様のように美しい嬢様であつたそ  
うながな、旦那様」

「うん」

「すると、ある日、一人の梵論字ぼろんじが来て……」

「梵論字と云うと虚無僧こもそうの事かい」

「はあい。あの尺八しゃくはちを吹く梵論字ぼろんじの事でござんす。その梵論字  
が志保田しほやの庄屋しやうやへ逗留とらりゆうしているうちに、その美くしい嬢様が、  
その梵論字ぼろんじを見染みそめて——因果いんがと申しますか、どうしてもいっ  
しよになりたいと云うて、泣きました」

「泣きました。ふうん」

「ところが庄屋しやうやどのが、聞き入れません。梵論字ぼろんじは聒むこにはなら  
んと云うて。とうとう追い出しました」

「その虚無僧こもそうをかい」

「はあい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてここまで来て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて、——とうとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも一枚の鏡を持っていたとか申し伝えておりますよ。それでこの池を今でも鏡が池と申しまする」

「へええ。じゃ、もう身を投げたものがあるんだね」

「まことに怪けしからん事でござんす」

「何代くらい前の事かい。それは」

「なんでもよつぽど昔の事でござんすそうな。それから——これはここ限りの話だが、旦那さん」

「何だい」

「あの志保田の家には、代々だいだいきちがい気狂が出来ます」

「へええ」

「全く崇たりでござんす。今の嬢様も、近頃は少し変だ云うて、皆が嘸はやします」

「ハハハハそんな事はなからう」

「ござんせんかな。しかしあの御袋おふくろさま様がやはり少し変でな」

「うちにいるのかい」

「いいえ、去年亡なくなりました」

「ふん」と余は煙草の吸殻すいからから細い煙の立つのを見て、口を閉じた。源兵衛は薪まきを背せにして去る。

画えをかきに来て、こんな事を考えたり、こんな話しを聴くばかりでは、何日いくにちかかっても一枚も出来っこない。せつかく絵の具箱まで持ち出した以上、今日は義理にも下絵したえをとって行こう。幸さいわい、向側の景色は、あれなりで略纏ほぼまとまっている。あすこでも申もうし訳わけにちよつと描かこう。

一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲る角に、嗟々と構える右側には、例の熊笹が断崖の上から水際まで、一寸の隙間なく叢生している。上には三抱ほどの大きな松が、若蔦にからまれた幹を、斜めに振って、半分以上水の面へ乗り出している。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだろう。

三脚几に尻を据えて、画面に入るべき材料を見渡す。松と、笹と、岩と水であるが、さて水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中まで茂り込んでいるかと怪まるるくらい、鮮やかに水底まで写っている。松に至っては空に聳ゆる高さが、見上げらるるだけ、影もまたすこぶる細長い。眼に写っただけの寸法ではとうてい収りがつかない。一層の事、実物をやめて影だ

け描くのも一興だろう。水をかいて、水の中の影をかいて、そうして、これが画だと人に見せたら驚ろくだろう。しかしただ驚ろかせるだけではつまらない。なるほど画になっていると驚かせなければつまらない。どう工夫くふうをしたものだろうと、一心に池の面おもを見詰める。

奇体なもので、影だけ眺ながめていてはいつこう画にならん。実物と見比べて工夫がして見たくなる。余は水面から眸ひとみを転じて、そろりそろりと上の方へ視線を移して行く。一丈の巖いわおを、影の先から、水際の継目つぎめまで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤沢じゆんたくの気合けあいから、皴皴しゆんしゆの模様を逐一吟味ちくいちぎんみしてだんだんと登って行く。ようやく登り詰めて、余の双眼そうがんが今危巖きがんの頂きいただに達したるとき、余は蛇へびに睨にらまれた墓ひきのごとく、はたりと画筆えふでを取り落した。

緑りの枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭みどを彩いろどる中に、楚然そぜんとして織り出されたる女の顔は、——花下かかに余を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖ふりそでに余を驚かし、風呂場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白あおしろき女の顔の真中まんなかにぐさと釘付けくぎづにされたぎり動かない。女もしなやかなる体軀たいくを伸せるだけ伸して、高い巖いわおの上に一指も動かさずに立っている。この一刹那いっせつな！

余は覚えぬ飛び上った。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿の花の如く赤いものが、ちらついたりと思つたら、すでに向うへ飛び下りた。夕日は樹梢じゆしやうを掠かすめて、幽かすかに松の幹を染むる。熊笹はいよいよ青い。

また驚かされた。

やまざと おぼろ  
山里の朧に乗じてそぞろ歩く。観海寺の石段を登りながら仰数あおぎかぞう  
しゅんせい  
春星一二三と云う句を得た。余は別に和尚おしょうに逢う用事もない。  
逢うて雑話をする気もない。偶然と宿を出いでて足の向くところに  
に任せてぶらぶらするうち、ついこの石磴せきとうの下に出た。しばらく  
くんしゅさんもんにいるをゆるさず  
く不許葦酒入山門と云う石を撫なでて立っていたが、急にうれし  
くなつて、登り出したのである。

トリストラム・シャンデーと云う書物のなかに、この書物ほ  
ど神の御覚召おぼしめしに叶かのうた書き方はないとある。最初の一句はとも  
かくも自力じりきで綴つづる。あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに  
任せる。何をかくか自分には無論見当がつかぬ。かく者は自己  
であるが、かく事は神の事である。したがって責任は著者には

ないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に嫁した。引き受けてくれる神を持たぬ余はついにこれを泥溝の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れるくらいなら、すぐ引き返す。一段登つて佇むとき何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。黙然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れているのは妙だ。妙だからまた登る。仰いで天を望む。寝ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、また登る。かくして、余はとうとう、上まで登り詰めた。

石段の上で思い出す。昔し鎌倉へ遊びに行つて、いわゆる五山なるものを、ぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか円覚寺の塔頭で

あつたらう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くくと、門内から、黄きな法衣ころもを着た、頭の鉢はちの開いた坊主が出て来た。余は上のぼる、坊主は下くだる。すれ違つた時、坊主が鋭とい声でどこへ御出おいでなさると問うた。余はただ境内けいだいを拝見にと答えて、同時に足を停とめたら、坊主は直ただちに、何もありませんぞと言ひ捨てて、すたすた下りて行つた。あまり洒落しやらくだから、余は少しく先せんを越された気味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て振り立て、ついに姿を杉の木の間あいだに隠した。その間あいだかつて一度も振り返つた事はない。なるほど禅僧は面白い。きびきびしているなど、のつそり山門を這入はいつて、見ると、広い庫裏くりも本堂も、がらんとして、人影はまるでない。余はその時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落しやらくな人があつて、こんな洒落しやらくに、人を取り扱つてくれた

かと思うと、何となく気分が晴々せいせいした。禅ぜんを心得こころえていたからと云う訳ではない。禅のぜの字もいまだに知らぬ。ただあの鉢ひつの開いた坊主しよさの所作しよさが気に入ったのである。

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴やつで埋うづまっている。元来何しに世の中へ面つらを曝さらしているんだか、解げしかねる奴さえいる。しかもそんな面に限かぎって大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのをもつて、さも名誉のごとく心得こころえている。五年も十年も人の臀しりに探偵たんていをつけて、人のひる屁への勘定かんじようをして、それが人世だと思つてゐる。そうして人の前へ出て来て、御前は屁へをいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教える。前へ出て云うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろうしろの方から、御前は屁へをいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云う。うるさいと云えばなおな

お云う。よせと云えばますます云う。分つたと云つても、屁をいくつ、ひつた、ひつたと云う。そうしてそれが処世の方針だと云う。方針は人々にんにん勝手である。ただひつたひつたと云わずに黙つて方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差さし控ひかえるのが礼儀だ。邪魔にならなければ方針が立たぬと云うなら、こつちも屁をひるのをもつて、こつちの方針とするばかりだ。そうなつたら日本も運の尽きだろう。

こうやつて、美しい春の夜に、何らの方針も立てずに、あるいてるのは実際高尚だ。興きた来れば興来るをもつて方針とする。興去れば興去るをもつて方針とする。句を得れば、得たところに方針が立つ。得なければ、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。これが真正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防衛ぼうぎよの方針で、こ

うやつて観海寺の石段を登るのは随縁放曠の方針である。

あおぎかぞゆんせい

仰数春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる時、臙おぼろに

せきとう

ぜつく

まと

ひかる春の海が帯のごとくに見えた。山門を入れる。絶句は纏め

る気にならなくなった。即座にやめにする方針を立てる。

石を登たんで庫裡くりに通ずる一筋道の右側は、岡つつじの生垣いけがきで、

むじょう

垣むじょうの向は墓場であろう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽かすか

に光る。数万の薨いらかに、数万の月が落ちたようだと見上みあげる。どこ

やらで鳩の声がしきりにする。棟むねの下にでも住んでゐるらしい。

気のせいひやしか、廂ひやしのあたりに白いものが、点々見える。糞ふんかも知

れぬ。

あまだ

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一行に並んでいる。木とも見え

ぬ、草では無論ない。感じから云うと岩佐又兵衛いわさまたへえのかいた、鬼おに

ねんぶつ

の念仏が、念仏をやめて、踊りを踊っている姿である。本堂の

端はじから端まで、一列に行儀よく並んで躍おどっている。その影がまた本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで躍っている。朧夜おぼろよにそそのかされて、鉦かねも撞木しゅもくも、奉加帳ほうがちようも打ちすてて、誘さそい合あわせるや否やこの山寺やまでらへ踊りに来たのだらう。

近寄さぼてんつて見ると大きな霸王樹である。高さは七八尺もあるう、糸瓜へちまほどな青い黄瓜きゅうりを、杓子しやもじのように圧おしひしゃげて、柄えの方を下に、上へ上へと継つぎ合あわせたように見える。あの杓子がいくつ継つながったら、おしまいになるのか分らない。今夜のうちにもひさし廂ひさしを突き破やぶつて、屋根瓦の上まで出そうだ。あの杓子が出る時には、何でも不意に、どこからか出て来て、ぴしやりと飛びつくに違ちがいがない。古い杓子しやもじが新しい小杓子せうしやもじを生なんで、その小杓子せうしやもじが長い年月のうちだんだん大きくなるようには思おもわれない。杓子しやもじと杓子しやもじの連続つづきがいかに突飛とつびである。こんな滑稽こっけいな樹きはた

んとあるまい。しかも澄ましたものだ。いかなるこれ仏ぶつと問われて、庭前ていぜんの柏樹子はくじゆしと答えた僧があるよしだが、もし同様の問に接した場合には、余は一も二もなく、月下げつかの霸王樹はおうじゆと応こたえるであろう。

少時しょうじ、晁補之ちやうほしと云う人の記行文を読んで、いまだに暗誦あんしやうしている句がある。「時に九月天高く露清く、山空むなしく、月明あきらかに、仰せいといで星斗せいとを視みれば皆光大みなひかりだい、たまたま人の上にあるがごとし、窓間そうかんの竹数たけ十竿かん、相摩まかつ憂うして声切せつせつ々やまず。竹間ちくかんの梅棕ばいそう森然しんぜんとして鬼魅きびの離立りりつ笑髻しやうひんの状じやうのごとし。二三子相顧あいかえりみ、魄動はくいて寝いぬるを得ず。遅明ちめい皆去いる」とまた口の内で繰り返して見て、思わず笑った。この霸王樹さばてんも時と場合によれば、余の魄はくを動うごかして、見るや否や山を追い下げたであろう。刺とげに手を触れて見ると、いらいらと指をさす。

石甃いしただみを歩き尽くして左へ折れると庫裏くらへ出る。庫裏の前に大きな木蓮もくれんがある。ほとんど一ひと抱かかえもあるう。高さは庫裏の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、また枝である。そうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝がああ重なると、下から空は見えぬ。花があればなお見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙すいている。木蓮は樹下に立つ人の眼を乱すほどの細い枝をいたずらには張らぬ。花さえ明あきらかである。この遙かなる下から見上げて一輪の花は、はつきりと一輪に見える。その一輪がどこまで簇むらがつて、どこまで咲いているか分らぬ。それにもかかわらず一輪はついに一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然はんぜんと望まれる。花の色は無論純白ではない。いたずらに白いのは寒過ぎる。専もっぱらに白いのは、ことさらに人の眼を奪たくう巧みが見え

る。木蓮の色はそれではない。極度の白きをわぎと避<sup>さ</sup>けて、あ  
たたかみのある淡黄<sup>たんこう</sup>に、奥床<sup>おくゆか</sup>しくも自<sup>み</sup>らを卑<sup>ひげ</sup>下<sup>げ</sup>している。余は  
石盤<sup>いしだたみ</sup>の上に立つて、このおとなしい花<sup>る</sup>が累々<sup>る</sup>とどこまでも空裏<sup>くうり</sup>  
に蔓<sup>はびこ</sup>る様<sup>さま</sup>を見上げて、しばらく茫然<sup>ぼうぜん</sup>としていた。眼に落つるの  
は花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を瞻<sup>み</sup>る

と云う句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合<sup>あ</sup>うている。

庫裏に入る。庫裏は明け放<sup>はな</sup>してある。盗人<sup>ぬすびと</sup>はおらぬ国と見え  
る。狗<sup>いぬ</sup>はもとより吠<sup>ほ</sup>えぬ。

「御免」

と訪問<sup>おとず</sup>れる。森<sup>しん</sup>として返事がない。

「頼む」

と案内を乞<sup>こ</sup>う。鳩の声がくうくうくと聞<sup>き</sup>える。

「頼みまああす」と大きな声を出す。

「とおとおとお」と遙かの向で答えたものがある。人の家を訪うて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭しそくの影が、衝立ついたての向側にさした。小坊主がひよこりとあらわれる。了念りょうねんであつた。

「和尚おしょうさんはおいでかい」

「おられる。何しにござつた」

「温泉にいる画工えかきが来たと、取次とりつぎでおくれ」

「画工えかきさんか。それじゃ御上おあがり」

「断わらないでもいいのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい画工えかきさんじゃな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃おそろえなさい。そらここを御覽」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間から五尺ばかりの高さを見計みはからつて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認したためてある。

「そおら。読めたる。脚下きやつかを見よ、と書いてあるが」

「なるほど」と余は自分の下駄を丁寧ていねいに揃える。

和尚へやの室は廊下を鍵かぎの手に曲まがつて、本堂の横手にある。障子しょうじを恭うやうやしくあけて、恭しく敷居越しにつくばった了念が、

「あのう、志保田しほだから、画工さんが来られました」と云う。はなはだ恐縮こくしゆくの体である。余はちよつとおかしくなつた。

「そうか、これへ」

余は了念と入れ代る。室がすこぶる狭い。中に囲炉裏いろりを切つて、鉄瓶てつびんが鳴る。和尚は向側に書見しよけんをしていた。

「さあこれへ」と眼鏡めがねをはずして、書物かたわらを傍へおしやる。

「了念。りよううねええん」

「ははははい」

「座布団ざぶとんを上げんか」

「ははははい」と了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、来られた。さぞ退屈だろ」

「あまり月がいいから、ぶらぶら来ました」

「いい月じゃな」と障子をあける。飛び石が二つ、松一本のほ

かには何もない、平庭ひらにわの向うは、すぐ懸崖けんがいと見えて、眼の下に

朧夜おぼろよの海がたちまちに開ける。急に気が大きくなつたような心

持である。漁火いさりびがここ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空

に入つて、星に化ばけるつもりだろう。

「これはいい景色。和尚おしょうさん、障子をしまえているのはもつたい

ないじゃありませんか」

「そうよ。しかし毎晩見ているからな」

「何晩いくばん見てもいいですよ、この景色は。私なら寝ずに見ています」

「ハハハハ。もつともあなたは画工えかきだから、わしとは少し違うて」

「和尚さんだつて、うつくしいと思つてるうちは画工できあ」  
「なるほどそれもそうじゃろ。わしも達磨だるまの画えぐらいはこれで、かくがの。そら、ここに掛けてある、この軸じくは先代がかかれたのじゃが、なかなかようかいとる」

なるほど達磨の画が小さい床とこに掛つている。しかし画としてはずこぶるまずいものだ。ただ俗気ぞっきがない。拙せつを蔽おほおうと力つとめているところが一つもない。無邪気な画だ。この先代もやはり

この画のような構わない人であつたんだらう。

「無邪気な画ですね」

「わしらのかく画はそれで沢山じゃ。気象きしょうさえあらわれておれば……」

「上手で俗気があるのより、いいです」

「ははははまあ、そうでも、賞ほめて置いてもらおう。時に近頃は画工にも博士があるかの」

「画工の博士はありませんよ」

「あ、そうか。この間、何でも博士に一人逢おうた」

「へええ」

「博士と云うとえらいものじやろな」

「ええ。えらいんでしょう」

「画工にも博士がありそうなものじやがな。なぜ無いだらう」

「そういえば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでしよう」

「ハハハハまあ、そんなものかな。——何とか云う人じゃつたて、この間逢うた人は——どこぞに名刺があるはずだが……」

「どこで御逢いです、東京ですか」

「いやここで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云うものが出来たそうじゃが、ちよつと乗つて見たいような気がする」

「つまらんものですよ。やかましくつて」

「そうかな。しよつけん蜀犬日に吠え、ごぎゆう呉牛月に喘ぐと云うから、わしの

ような田舎者いなかものは、かえつて困るかも知れんてのう」

「困りやしませんがね。つまらんですよ」

「そうかな」

鉄瓶てつびんの口から煙さかんが盛もに出る。和尚おしょうは茶筴ちやだんすから茶器を取り出して、茶を注ついでくれる。

「番茶を一つ御上おあがり。志保田の隠居さんのような甘うまい茶じゃない」

「いえ結構です」

「あなたは、そうやって、方々あるくように見受けるがやはり画えをかくためかの」

「ええ。道具だけは持つてあるきますが、画はかかないでも構わないんです」

「はあ、それじゃ遊び半分かの」

「そうですね。そう云つても善いいでしよう。屁への勘定かんじょうをされるのが、いやですからね」

さすがの禅僧も、この語だけは解げしかねたと見える。

「屁の勘定た何かな」

「東京に永くいると屁の勘定をされますよ」

「どうして」

「ハハハハハ勘定だけならいいですが。人の屁を分析して、臀しりの穴が三角だの、四角だのつて余計な事をやりますよ」

「はあ、やはり衛生の方かな」

「衛生じゃありません。探偵たんでいの方です」

「探偵？ なるほど、それじゃ警察じゃの。いったい警察の、調査の、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「そうですね、画工えかきには入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査やっかいの厄介やっかいになつた事がな  
い」

「そうでしょう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてて、構わんがな。澄すましていたら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察じゃて、どうもなるまいがな」

「屁くらいで、どうかされちやたまりません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云われた。人間は日本橋の真中に臟腑ぞうふをさらけ出して、恥ちずかしくないようにしなければ修業を積んだとは云われんてな。あなたもそれまで修業をしたらよかる。旅などはせんでも済むようになる」

「画工になり澄ませば、いつでもそうなれます」

「それじゃ画工になり澄したらよかる」

「屁の勘定をされちや、なり切れませんよ」

「ハハハハ。それ御覧。あの、あなたの泊とまっている、志保田の御那美さんも、嫁いに入いって帰かえってきてから、どうもいろいろな

事が氣になつてならん、ならんと云うてしまいととうとう、わしの所へ法を問ほういに来たじやて。ところが近頃はだ**いぶ**出来てきて、そら、御覧。あのような**訳**のわかつた女になつたじやて

「へええ、どうもただの女じゃないと思ひました」

「いやなかなか**機鋒**の鋭きほうどい女で——わしの所へ修業に来ていた**泰安**と云う若僧たいあんも、あの女のために、ふとした事から**大事**を**窮明**せんならん**因縁**に逢着いんねんして——今によい**智識**になるようじや」

静かな庭に、松の影が落ちる、遠くの海は、空の光りに**応**うるがごとく、**応**えざるがごとく、**有耶無耶**のうちに**微**かなる、**耀**きを放つ。漁火は明滅す。

「あの松の影を御覧」

「奇麗きれいですな」

「ただ奇麗かな」

「ええ」

「奇麗な上に、風が吹いても苦にしない」

茶碗に余った渋茶を飲み干して、糸底いとぞこを上うへに、茶托ちやたくへ伏せて、立ち上る。

「門まで送つてあげよう。りよううねええん。御客おかえりが御帰おかえりだぞよ」

送られて、庫裏くりを出ると、鳩とびがくうくうくと鳴く。

「鳩ほど可愛いものはない、わしが、手をたたくと、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月はいよいよ明るい。しんしんとして、木蓮もくれんは幾朶いくたの雲華うんげを空裏くうりに擎ささげている。沈寥けつりようたる春夜しゅんやの真中まなかに、和尚おしょうははたと掌たなごころを拍うつ。声は風中ふうちゆうに死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りそうなものじゃが」

了念は余の顔を見て、ちよつと笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思つてゐるらしい。気楽なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返えると、大きな丸い影と、小さな丸い影が、石盤いしだたみの上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

## 十二

キリスト 基督は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、オ

スカール・ワイルドの説と記憶している。基督は知らず。観海寺おしようの和尚のごときは、まさしくこの資格を有していると思う。趣味があるあると云う意味ではない。時勢に通じていると云う訳でもない。彼は画えと云う名のほとんど下くだすべからざる達磨だるまの幅ふくを掛

けて、ようできたなどと得意である。彼は画工えかきに博士があるものと心得ている。彼は鳩の眼を夜でも利きくものと思つてゐる。それにも関かかわらず、芸術家の資格があると云う。彼の心は底のない囊ふくろのように行き抜けである。何にも停てい滞たいしておらん。随ずい処しよに動き去り、任意にんいに作なし去つて、些さの塵じん滓しの腹部ちゆうぶに沈ちん澱でんする景色がない。もし彼の脳裏のうりに一点の趣味を貼ちゆうし得たならば、彼は之く所に同化して、行屎走尿こうしそうにようの際にも、完全たる芸術家として存在し得るだろう。余のごときは、探偵たんていに屁への数を勘定かんじようされる間は、とうてい画家にはなれない。画架がに向う事は出来る。小手板こていたを握る事は出来る。しかし画工にはなれない。こうやつて、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色しゆんしよくのなかに五尺の瘦軀そうくを埋うずめつくして、始めて、真の芸術家たるべき態度に吾身を置き得るのである。一たびこの境界きぎょうがいに入れば美の天下はわが有に帰す

る。尺素せきそを染めず、寸縑すんけんを塗らざるも、われは第一流の大画工である。技ぎにおいて、ミケルアンゼロに及ばず、巧たくみなる事ラフハエルに譲る事ありとも、芸術家たるの人格において、古今の大家と歩武ほぶを齊ひとしゆうして、毫ごうも遜ゆずるところを見出し得ない。余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画えもかかない。絵の具箱は酔興すいきように、担かついできたかの感さえある。人はあれでも画家かと嗤わらうかもしれぬ。いくら嗤わらわれても、今の余は真の画家である。立派な画家である。こう云う境きようを得たものが、名画をかくとは限らん。しかし名画をかき得る人は必ずこの境を知らねばならん。

朝飯あさめしをすまして、一本の敷島しきしまをゆたかに吹かしたるとき余の観想くわんしやうは以上のごとくである。日は霞かすみを離れて高く上のぼっている。障子しょうじをあけて、後うしろの山を眺ながめたら、蒼あおい樹きが非常にすき通つ

て、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空気と、物象と、彩色の關係を宇宙でもつとも興味ある研究の一と考えている。色を主にして空気を出すか、物を主にして、空気をかくか。または空気を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの気合一つでいろいろな調子が出る。この調子は画家自身の嗜好で異なってくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ずから制限されるのもまた当前である。英国人のかいた山水に明るいものは一つもない。明るい画が嫌なのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空気では、どうする事も出来ない。同じ英人でもグーダルなどは色の調子がまるで違う。違うはずである。彼は英人でありながら、かつて英国の景色をかいた事がない。彼の画題は彼の郷土にはない。彼の本国に比すると、空気の透明の度の非常に勝っている、埃及

または波斯<sup>ペルシヤ</sup>辺の光景のみを扱<sup>えら</sup>んでゐる。したがつて彼のかいた画を、始めて見ると誰も驚ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑うくらい判然<sup>はつきり</sup>出来上つてゐる。

個人の嗜好<sup>しこう</sup>はどうする事も出来ん。しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々<sup>われわれ</sup>もまた日本固有の空氣と色を出さなければならん。いくら仏蘭西<sup>フランス</sup>の絵がうまいと云つて、その色をそのままに写して、これが日本の景色<sup>けいしょく</sup>だとは云われない。やはり面<sup>ま</sup>のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態<sup>うんようえんたい</sup>を研究したあげく、あの色こそと思つたとき、すぐ三脚<sup>さんきやく</sup>几を担いで飛び出さなければならん。色は刹那<sup>せつな</sup>に移る。一たび機を失<sup>しつ</sup>すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端<sup>は</sup>には、滅多<sup>めつた</sup>にこの辺で見る事の出来ないほどな好<sup>い</sup>い色が充<sup>み</sup>ちてゐる。せつかく来て、あれを逃<sup>にが</sup>すのは惜しいものだ。ちよつと写してきよ

う。

襖ふすまをあけて、椽側えんがわへ出ると、向う二階の障子しょうじに身を倚もたして、  
那美さんが立っている。頤あごを襟えりのなかへ埋うずめて、横顔だけしか  
見えぬ。余が挨拶あいさつをしようと思う途端とたんに、女は、左の手を落として  
たまま、右の手を風のごとく動かした。閃ひらめくは稲妻いなずまか、二折れ  
三折れ胸のあたりを、するりと走るや否いなや、かちりと音がして、  
閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分すんぶの白鞘しろさやがある。  
姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝つばらから歌舞伎座かぶきざを  
覗のぞいた気で宿を出る。

門を出て、左へ切れると、すぐ岨道そばみちつづきの、爪上りつまあがりになる。  
鶯うぐいすが所々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑みかんが一面  
に植えてある。右には高からぬ岡が二つほど並んで、ここにもあ  
るは蜜柑のみと思われる。何年前か一度この地に来た。指を折

るのも面倒だ。何でも寒い師走しわすの頃であつた。その時蜜柑山に蜜柑がべた生なりに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝売つてくれと云つたら、幾顆いくつでも上げますよ、持つていらつしやいと答えて、樹きの上で妙な節ふしの唄うたをうたい出した。東京では蜜柑の皮でさえ薬種屋やくしゆやへ買かひに行かねばならぬのにと思つた。夜になると、しきりに銃つつの音がする。何だと聞いたら、獵師りようしが鴨かもをとるんだと教えてくれた。その時は那美さんの、なの字も知らずに済んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女形おんながたが出来る。普通の役者は、舞台へ出ると、よそ行きの芸をする。あの女は家のなかで、常住芝居じようじゆうをしている。しかも芝居芝居をしているとは気がつかん。自然天然しぜんてんねんに芝居芝居をしている。あんなのを美的生活びてきせいかつとでも云うのだらう。あの女の御蔭おかげで画えの修業がだいぶ出来た。

あの女の所作しよさを芝居と見なければ、薄気味うすきみがわるくて一日もいたたまれん。義理とか人情とか云う、尋常の道具立どうぐだてを背景にして、普通の小説家のような観察点からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すごいやになる。現実世界あに在つて、余とあの女の間てんめんに纏綿した一種の関係が成り立つたとするならば、余の苦痛は恐らく言語ごんごに絶するだろう。余のこのたびの旅行は俗情を離れて、あくまで画工になり切るのが主意であるから、眼に入るものはことごとく画として見なければならん。能、芝居、もしくは詩中の人物としてのみ観察しなければならん。この覚悟の眼鏡めがねから、あの女を覗のぞいて見ると、あの女は、今まで見た女のうちでもっともうつくしい所作をする。自分でうつくしい芸をして見せると云う気がないだけに役者の所作よりもなおうつくしい。

こんな考をもつ余を、誤解してはならん。社会の公民として不適當だなどと評してはもつとも不届きである。善は行い難い、徳は施ほどこしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい。これらをあえてするのは何人なんびとに取つても苦痛である。その苦痛を冒すおかためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに潜ひそんでおらねばならん。画と云うも、詩と云うも、あるは芝居と云うも、この悲酸ひさんのうちに籠こもる快感の別号に過ぎん。この趣おもむきを解し得て、始めて吾人ごじんの所作は壮烈にもなる、閑雅にもなる、すべての困苦に打ち勝つて、胸中の一点の無上趣味を満足せしめたくなる。肉体の苦しみを度外たわに置いて、物質上の不便を物とも思わず、勇猛精進しやうじんの心を駆かつて、人道のために、鼎鑊ていかくに烹にらるるを面白く思う。もし人情なる狭せまき立脚地に立つて、芸術の定義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある

士人の胸裏きょうりに潜ひそんで、邪じゃを避け正せいに就つき、曲きよくを斥しりぞけ直ちよくにくみし、弱じやくを扶たすけ強きやうを挫くじかねば、どうしても堪たえられぬと云う一念の結晶さんして、燦さんとして白日はくじつを射返はくすものである。

芝居つらぬ気がある人と人の行為を笑う事がある。うつくしき趣味を貫つらぬかんがために、不必要なる犠牲をあえてするの人情に遠きを嗤わらうのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機会を待たずして、無理矢理に自己の趣味観を銜てらうの愚ぐを笑うのである。真まに個中こちゆうの消息を解し得たるものの嗤わらうはその意を得ている。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎げすげろうの、わが卑いやしき心根に比較して他たを賤いやしむに至いたつては許ゆるしがたい。昔むかし巖頭がんとうの吟ぎんを遺のこして、五十丈の飛瀑ひばくを直下ちかして急湍きゆうたんに赴おもむいた青年がある。余の視みるところにては、彼の青年は美の一字のために、捨すつべからざる命いのちを捨てたるものと思う。死そのものは洵まことに壮烈である、ただそ

の死を促うながすの動機に至つては解しがたい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるものが、いかにして藤村子ふじむらしの所作しよさを嗤あはい得べき。彼らは壮烈の最後を遂とぐるの情趣を味あじわい得ざるが故ゆえに、たとい正当の事情のもとにも、とうてい壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤う権利がないものと余は主張する。

余は画工である。画工であればこそ趣味専門の男として、たとい人情世界に墮だ在ざいするも、東西両隣りの没風流漢ぼつふうりゆうかんよりも高尚である。社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画えなきもの、芸術のたしなみななきものよりは、美しくしき所作が出来る。人情世界にあつて、美しくしき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上において示すものは天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅中りよちゆうに人情界に帰る必要はない。あつてはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じやりじやりする砂をふるつて、底にあまる、うつくしい金きんのみを眺めて暮さなければならぬ。余みづか自らも社会の一員をもつて任じてはおらぬ。純粹なる専門画家として、己おのれさえ、纏綿てんめんたる利害の累索るいさくを絶つて、優ゆうに画布裏がふりに往来している。いわんや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作といえどもただそのままの姿と見るよりほかに致し方がない。

三丁ほど上のぼると、向うに白壁ひとかまえの一構が見える。蜜柑みかんのなかの住居すまいだなと思う。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返ったら、下から赤い腰卷こしまきをした娘あがが上ってくる。腰卷がしだいに尽きて、下から茶色の脛はぎが出る。脛はぎが出切できつたら、藁草履わらぞうりになつて、その藁草履がだんだん動いて来

る。頭の上に山桜が落ちかかる。背中には光る海を負っている。

岨道そばみちを登り切ると、山の出鼻でばなの平たいらな所へ出た。北側は翠みどりりを

置たむ春の峰で、今朝椽えんから仰えんいだあたりかも知れない。南側

は焼野とも云うべき地勢が幅半丁ほど広がって、末は崩くずれた崖がけ

となる。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨またいで向むこうを見れば、

眼に入るものは言わずも知れた青海あおうみである。

路みちは幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれ

が本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でな

い。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋

につながらるか見分みわけのつかぬところに変化があつて面白い。

どこへ腰を据すえたものかと、草のなかを遠近おちこちと徘徊はいかいする。椽えん

から見たときは画えになると思つた景色も、いざとなると存外ま纏まと

まらない。色もしいに変わってくる。草原をのそつくうち

いつしか描<sup>か</sup>く気がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構わん、どこへでも坐<sup>すわ</sup>つた所がわが住居<sup>すまい</sup>である。染<sup>し</sup>み込んだ春の日が、深く草の根に籠<sup>こも</sup>つて、どつかと尻<sup>おろ</sup>を卸すと、眼に入らぬ陽炎<sup>かげろう</sup>を踏<sup>ふ</sup>み潰<sup>つぶ</sup>したような心持ちがする。

海は足の下に光る。遮<sup>ひとひら</sup>ぐる雲の一片<sup>ひとひら</sup>さえ持たぬ春の日影は、普<sup>あま</sup>ねく水の上を照らして、いつの間にかほとぼりは波の底まで浸<sup>し</sup>み渡つたと思わるるほど暖かに見える。色は一刷毛<sup>ひとほけ</sup>の紺青<sup>こんじよう</sup>を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗<sup>さいりん</sup>を畳<sup>こま</sup>んで濃やかに動いている。春の日は限り無<sup>あめ</sup>き天<sup>あめ</sup>が下<sup>した</sup>を照らして、天が下は限りなき水を湛<sup>たた</sup>えたる間には、白き帆が小指の爪<sup>つめ</sup>ほどに見えるのみである。しかもその帆は全く動かない。往昔<sup>そのかみにゆうこう</sup>入貢<sup>こまぶね</sup>の高麗船<sup>こまぶね</sup>が遠くから渡つてくるときには、あんなに見えたであろう。そのほかは大<sup>だいせん</sup>千世界<sup>せん</sup>を極<sup>きわ</sup>めて、照らす日の世、照らさるる海の世のみで

ある。

ごろりと寝る。帽子が額をすべって、やけに阿弥陀となる。所々の草を一二尺抽いて、木瓜の小株が茂っている。余が顔はちようどその一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲つた事がない。そんなら真直かと云うと、けつして真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突して、斜に構えつつ全体が出来上っている。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔かい葉さえちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟つたものである。世間には拙を守ると云う人がある。この人が来世に生れ変るときつと木瓜になる。余も木瓜になりたい。小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて、筆架をこしらえた事がある。それへ二錢五厘の水筆

を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて楽んだ。その日は木瓜の筆架ばかり気にして寝た。あくる日、眼が覚めるや否や、飛び起きて、机の前へ行つて見ると、花は萎え葉は枯れて、白い穂だけが元のごとく光っている。あんなに奇麗なものが、どうして、こう一晩のうちに、枯れるだらうと、その時は不審の念に堪えなかつた。今思うとその時分の方がよほど出世間的である。

寝るや否や眼についた木瓜は二十年来の旧知己である。見詰めているとしだいに気が遠くなつて、いい心持ちになる。また詩興が浮ぶ。

寝ながら考える。一句を得るごとに写生帖に記して行く。しばらくして出来上つたようだ。始めから読み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停筇

而矚目。万象帶晴暉。聽黃鳥宛轉。觀落英紛霏。行尽平蕪  
 遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空斷鴻歸。寸心何窈窕。  
 縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遙隨物化。悠然  
 对芬菲。

ああ出来た、出来た。これで出来た。寝ながら木瓜を観て、  
 世の中を忘れていている感じがよく出た。木瓜が出なくつても、海  
 が出なくつても、感じさえ出ればそれで結構である。と唸りな  
 がら、喜んでいると、エヘンと云う人間の咳払せきばらいが聞えた。こい  
 つは驚いた。

寝返りねがえをして、声の響いた方を見ると、山の出鼻を回って、  
 雑木ぞうきの間から、一人の男があらわれた。

茶の中折れなかおを被かぶっている。中折れの形は崩くずれて、傾かたむく縁へりの下  
 から眼が見える。眼の恰好かっこうはわからんが、たしかにきよろきよ

るときよろつくようだ。藍あゐの縞物しまものの尻はしよを端折はしよつて、素足すあしに下駄げだがけの出いで立ちたちは、何だか鑑定かんていがつかない。野生やせいの髯ひげだけで判断だんするとまさに野武士のぶしの価値かちはある。

男おとこは岨道そぼみちを下くだりるかと思おもいのほか、曲まがり角かどからまた引き返かへした。もと来た路みちへ姿すがたをかくすかと思おもうと、そうでもない。またあるき直ただしてくる。この草原くさげを、散歩さんぽする人のほかに、こんなに行いきつ戻かへりつするものはないはずだ。しかしあれが散歩さんぽの姿すがたであろうか。またあんな男おとこがこの近辺きんぺんに住すんでいるとも考えられない。男おとこは時々ときどき立ち留どまる。首くびを傾かたげる。または四方しやうほうを見廻みまわす。大おほに考え込こむようにもある。人ひとを待ち合あわせる風かぜにも取とられる。何だかわからない。

余あまはこの物騒ぶつそうな男おとこから、ついついに吾眼われまなこをはなす事ができなかつた。別に恐おそしいでもない、また画えにししようと云いう気きも出でない。

ただ眼をはなす事ができなかつた。右から左、左りから右と、男に添うて、眼を働かせているうちに、男ははたと留つた。留ると共に、またひとりの人物が、余が視界に点出された。

二人は双方で互に認識したように、しだいに双方から近づいて来る。余が視界はだんだん縮まって、原の真中で一点の狭き間に畳まれてしまう。二人は春の山を背に、春の海を前に、ぴたりと向き合つた。

男は無論例の野武士である。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余是那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懐に呑んでおりはせぬかと思つたら、さすが非人情の余もただ、ひやりとした。

男女は向き合つたまま、しばらくは、同じ態度で立っている。

動く景色は見えぬ。口は動かしているかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂れた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、いるとも見える。しばらくすると、男は屹と、垂れた首を挙げて、半ば踵を回らしかける。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、海の方へ向き直る。帯の間から頭を出しているのは懐剣らしい。男は昂然として、行きかかる。女は二歩ばかり、男の踵を縫うて進む。女は草履ばきである。男の留つたのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帯の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思いのほか、財布のよなな包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふらふらと春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸てくびに、紫の包。これだけの姿勢で充分画えにはなろう。

紫でちよつと切れた凶面が、二三寸の間隔をとつて、振り返る男の体たいのこなし具合で、うまい按排あんぱいにつながれている。不即不離ふそくふりとはこの刹那せつなの有様を形容すべき言葉と思う。女は前を引く態度で、男は後しりえに引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いてもひかれてもおらん。両者の縁えんは紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れている。

二人の姿勢がかくのごとく美妙びみょうな調和を保たもつていると同時に、両者の顔と、衣服にはあくまで、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

背せのずんぐりした、色黒の、髯ひげづらと、くつきり締しまつた細面ほそおもてに、襟えりの長い、撫肩なでがたの、華奢姿きやしや。ぶつきらぼうに身をひねつた

下駄がけの野武士と、不断着ふだんぎの銘仙めいせんさえしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身そに控かえたる瘦形やさすがた。はげた茶の帽子あいじまに、藍縞あゐじまの尻切りしりき出立ちでだと、陽炎かげろうさえ燃やすべき櫛目くしめの通とつた鬢びんの色いろに、黒縹くろじゆす子のひかる奥おくから、ちらりと見せた帶上おびあげの、なまめかしさ。すべてが好画題こうがだいである。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みたくに平均を保ちつつあつた二人の位置はたちまち崩れるくず。女はもう引かぬ、男は引かりようともせぬ。心的状態が絵を構成する上に、かほどの影響を与えようとは、画家ながら、今まで気がつかなくつた。

二人は左右へ分かれる。双方きあいに気合きあがないから、もう画として、支離滅裂しりめつれつである。雑木林ぞうきばやしの入口で男は一度振り返つた。女あとは後あとをも見ぬ。すらすらと、こちらへ歩行あるいてくる。やがて余

の真正面ましようめんまで来て、

「先生、先生」

と二声ふたこえ掛けた。これはしたり、いつ目付めかつたろう。

「何です」

と余は木瓜ぼけの上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でしていらつしやる」

「詩を作つて寝ねていました」

「うそをおつしやい。今のを御覧でしよう」

「今の？ 今の、あれですか。ええ。少々拝見しました」

「ホホホホ少々でなくても、たくさん御覧なさればいいのに」

「実のところはたくさん拝見しました」

「それ御覧なさい。まあちよつと、こつちへ出ていらつしやい。

木瓜の中から出ていらつしやい」

余は唯々<sup>い</sup>として木瓜の中から出て行く。

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。帰ろうかとも思うんです」

「それじゃごいつしよに参りましょうか」

「ええ」

余は再び唯々として、木瓜の中に退<sup>しりぞ</sup>いて、帽子を被<sup>かぶ</sup>り、絵の道具を纏<sup>まと</sup>めて、那美さんといつしよにあるき出す。

「画を御描きになつたの」

「やめました」

「ここへいらしつて、まだ一枚も御描きなさらないじゃありませんか」

「ええ」

「でもせつかく画をかきにいらしつて、ちつとも御かきなさら

なくつちや、つまりませんわね」

「なにつまってるんです」

「おやそう。なぜ？」

「なぜでも、ちゃんとつまるんです。画なんぞ描かいたつて、描かなくつたつて、つまるところは同じ事おんなでさあ」

「そりゃ洒落しやれなの、ホホホ随分呑気のんきですなあ」

「こんな所へくるからには、呑気にでもしなくつちや、来た甲斐かひがないじゃありませんか」

「なあにどこにいても、呑気にしなくつちや、生きている甲斐はありますせんよ。私なんぞは、今のようなところを人に見られはずても恥はかしくも何とも思いません」

「思わんでもいいでしょう」

「そうですね。あなたは今の男をいつたい何だと御思いです」

「そうさな。どうもあまり、金持ちじゃありませんね」

「ホホホ善くあたりました。あなたは占いの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本にいられないからつて、私に御金を貰いに来たのです」

「へえ、どこから来たのです」

「城下じょうかから来ました」

「随分遠方から来たもんですね。それで、どこへ行くんですか」  
「何でも満洲へ行くそうです」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾いに行くんだか、死に行くんだか、分りません」

この時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かすかなる笑の影が消えかかりつつある。意味は解げせぬ。

「あれは、わたくしおほの亭主です」

迅雷じんらいを掩おほうに違いじまあらず、女は突然として一太刀浴びせかけた。

余は全く不意撃ふいうちを喰くつた。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、ここまで曝さらけ出そうとは考えていなかった。

「どうです、驚ろいたでしょう」と女が云う。

「ええ、少々驚ろいた」

「今の亭主じゃありません、離縁りえんされた亭主です」

「なるほど、それで……」

「それぎりです」

「そうですか。——あの蜜柑山みかんやまに立派な白壁の家がありますね。ありや、いい地位にあるが、誰の家うちなんですか」

「あれが兄の家です。帰り路にちよつと寄つて、行きましよう」  
「用でもあるんですか」

「ええちつと頼まれものがあります」

「いつしよに行きましよう」

岨道そばみちの登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、また一丁ほどを登ると、門がある。門から玄関へかからずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につかつか行くから、余も無遠慮につかつか行く。南向きの庭に、棕櫚しゅうろが三四本あつて、土塀どべいの下はすぐ蜜柑畠である。

女はすぐ、椽鼻えんばなへ腰をかけて、云う。

「いい景色だ。御覧なさい」

「なるほど、いいですな」

障子のうちは、静かに人の気合けあいもせぬ。女は音おとのう景色もない。ただ腰をかけて、蜜柑畠みおろを見下して平氣でいる。余は不思議に思った。元来何の用があるのかしら。

しまいには話もないから、両方共無言のまままで蜜柑畠を見下している。午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏まで、蒸し返されて耀やいている。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大きな声を出して、こけこつこううと鳴く。

「おやもう。御午ですね。用事を忘れていた。——久一さん、久一さん」

女は及び腰になって、立て切った障子を、からりと開ける。内は空しき十畳敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾っている。

「久一さん」

納屋の方でようやく返事がする。足音が襖の向でとまって、からりと、開くが早いのか、白鞘の短刀が畳の上へ転がり出す。

「そら御伯父さんの餞別だよ」

帯の間に、いつ手が這入ったか、余は少しも知らなかった。短刀は二三度とんぼ返りを打って、静かな畳の上を、久一さんの足下へ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光った。

十三

川舟で久一さんを吉田の停車場まで見送る。舟のなかに坐つたものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴に過ぎん。

御招伴でも呼ばれれば行く。何の意味だか分らなくても行く。

非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏いかだに縁ふちをつけたように、底が平ひらたい。老人を中に、余と那美さんが艫とも、久一さんと、兄さんが、舳みよしに座をとった。源兵衛は荷物と共に独ひとり離れている。

「久一さん、軍いくさは好きか嫌いかい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだろうが、愉快な事も出て来るんだろう」と戦争を知らぬ久一さんが云う。

「いくら苦しくつても、国家のためだから」と老人が云う。

「短刀なんぞ貰うと、ちよつと戦争に出て見たくなりやしないか」と女がまた妙な事を聞く。久一さんは、

「そうさね」

と軽かろく首肯うけがう。老人は髻ひげを掀かかげて笑う。兄さんは知らぬ顔をしている。

「そんな平気な事で、軍いくさが出来るかい」と女は、委細いさい構わず、

白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんがちよつと眼を見合せた。

「那美さんが軍人になつたらさぞ強かろう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉はこれである。語調から察すると、ただの冗談じょうだんとも見えない。

「わたしが？ わたしが軍人？ わたしが軍人になれりやとうになつています。今頃は死んでいます。久一さん。御前も死ぬがいい。生きて帰つちや外聞がいぶんがわるい」

「そんな乱暴な事を——まあまあ、めでたく凱旋がいせんをして帰つて来てくれ。死ぬばかりが国家のためではない。わしもまだ二三年は生きるつもりじゃ。まだ逢あえる」

老人の言葉の尾を長く手繰たぐると、尻しりが細くなつて、末は涙の糸になる。ただ男だけにそこまではだまを出さない。久一さんは

何も云わずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繫いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めている。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、その前を通った時、この男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた兩人の間には何らの電気も通わぬ。男は魚の事ばかり考えている。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る余地がない。一行の舟は静かに太公望の前を通り越す。

日本橋を通る人の数は、一分に何百か知らぬ。もし橋畔に立つ

て、行く人の心に蟠まる葛藤を一々に聞き得たならば、浮世は

目眩しくて生きづらからう。ただ知らぬ人で逢い、知らぬ人で

わかれるから結句日本橋に立って、電車の旗を振る志願者も出て来る。太公望が、久一さんの泣きそうな顔に、何らの説明をも求めなかつたのは幸である。顧り見ると、安心して浮標を見

詰めてゐる。おおかた日露戦争が済むまで見詰める気だろう。

川幅かわはばはあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。

舷ふなばたに倚よつて、水の上を滑すべつて、どこまで行くか、春が尽きて、人

が騒いで、鉢はち合せをしたがるところまで行かねばやまぬ。腥なまぐさ

き一点の血を眉間みげんに印いんしたるこの青年は、余ら一行を容赦ようしやなく

引いて行く。運命の縄なわはこの青年を遠き、暗き、物凄ものすこき北の国

まで引くが故ゆえに、ある日、ある月、ある年の因果いんがに、この青年と

絡からみつけれられたる吾われらは、その因果の尽くるところまでこの青

年に引かれて行かねばならぬ。因果の尽くるとき、彼と吾らの

間にふつと音がして、彼一人は否応いやおうなしに運命の手元てもとまで手繰たぐ

り寄せらるる。残る吾らも否応いやおうなしに残らねばならぬ。頼んで

も、もがいても、引いていて貰う訳には行かぬ。

舟は面白いほどやすらかに流れる。左右の岸には土筆つくしでも生

えておりそうな。土堤どての上には柳が多く見える。まばらに、低い家あひるがその間から藁屋根わらやねを出し。煤すすけた窓を出し。時によると白い家鴨あひるを出す。家鴨はがあと鳴いて川の中まで出て来る。柳と柳の間てきれきに的躰てきれきと光るのは白桃しろももらしい。とんかたんと機はたを織る音が聞える。とんかたんの絶間たえまから女の唄うたが、はああい、いようう——と水の上まで響く。何を唄うのやらいつこう分らぬ。

「先生、わたくしの画えをかいて下さいな」と那美さんが注文する。久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら解どけ縷しゆす子の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、

「こんな一筆ひとふでがきでは、いけません。もつと私の気象きしょうの出るよ  
うに、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが。どうも、あなたの顔はそれだけじゃ  
画えにならない」

「御挨拶ごあいさつです事。それじゃ、どうすれば画になるんです」

「なに今でも画に出来ませんがね。ただ少し足りないところがあ  
る。それが出ないところをかくと、惜しいですよ」

「足りないたつて、持つて生れた顔だから仕方がありませんわ  
持つて生れた顔はいろいろになるものです」

「自分の勝手にですか」

「ええ」

「女だと思つて、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云うのですよ」

「それじゃ、あなたの顔をいろいろにして見せてちょうだい」

「これほど毎日いろいろになつてればたくさんだ」

女は黙つて向をむく。川縁はいつか、水とすれすれに低く着

いて、見渡す田のものは、一面のげんげんで埋つている。鮮やか

な紅の滴々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の海は霞

のなかに果しなく広がつて、見上げる半空には崢嶸たる一峰が

半腹から微かに春の雲を吐いている。

「あの山の向うを、あなたは越していらした」と女が白い手

を舷から外へ出して、夢のような春の山を指す。

「天狗岩はあの辺ですか」

「あの翠の濃い下の、紫に見える所がありましたよ」

「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら。禿げてるんでしよう」

「なあに凹くぼんでるんですよ。禿かぶげていりや、もつと茶に見えま  
す」

「そうでしょうか。ともかく、あの裏あたりになるそうです」

「そうすると、七曲ななまがりはもう少し左りになりますね」

「七曲りは、向うへ、ずっと外それます。あの山のまた一つ先きの山ですよ」

「なるほどそうだった。しかし見当から云うと、あのうすい雲が懸かかつてるあたりでしょう」

「ええ、方角はあの辺へんです」

居眠をしていた老人は、舷こべりから、肘ひじを落して、ほいと眼をさ  
ます。

「まだ着かんかな」

ぎょうかく  
胸膈きょうかくを前へ出して、右の肘ひじを後ろうしへ張つて、左り手を真直に

伸<sup>の</sup>して、ううんと欠伸<sup>のび</sup>をするついでに、弓を彎<sup>ひ</sup>く真似をして見せる。女はホホホと笑う。

「どうもこれが癖で、……」

「弓が御好<sup>おすき</sup>と見えますね」と余も笑いながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でもたしかです」と左の肩を叩<sup>たた</sup>いて見せる。舳<sup>へさき</sup>では戦争談が酣<sup>たけなわ</sup>である。

舟はようやくやく町らしいなかへ這<sup>はい</sup>入る。腰障子に御肴<sup>おんさかな</sup>と書いた

居酒屋が見える。古風<sup>こふう</sup>な縄<sup>なわ</sup>暖簾<sup>のれん</sup>が見える。材木の置場が見える。

人力車の音さえ時々聞える。乙鳥<sup>つばくろ</sup>がちちと腹を返して飛ぶ。家鴨<sup>あひる</sup>ががあがあ鳴く。一行は舟を捨てて停車場<sup>ステーション</sup>に向う。

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云う人間を同じ箱へ詰<sup>こ</sup>めて轟<sup>ごう</sup>と通る。情け<sup>なさ</sup>容赦<sup>ようしや</sup>は

ない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつてそうして、同様に蒸瀆じょうくの恩沢おんたくに浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車ほど個性を軽蔑けいべつしたものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を發達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつてこの個性を踏み付けようとする。一人前ひとりまえ何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも起きるとも勝手にせよと云うのが現今の文明である。同時にこの何坪何合の周囲に鉄柵てつさくを設けて、これよりさきへは一步も出てはならぬぞと威嚇おどかすのが現今の文明である。何坪何合のうちで自由を擅ほしにしたものが、この鉄柵外にも自由を擅ほしにしたくなるのは自然いさおの勢である。憐あわれむべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に嚙かみついて咆哮ほうこうしている。文明は個人に自

由を与えて虎のごとく猛からしめたる後、これを檻牢の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は真の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んでいると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世はめぢやめぢやになる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのであろう。個人の革命は今すでに日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾人に与えた。余は汽車の猛烈に、見界なく、すべての人を貨物同様に心得て走る様を見るたびに、客車のうちに閉じ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに払わざるこの鉄車とを比較して、——あぶない、あぶない。気をつけねばあぶないと  
思う。現代の文明はこのあぶないで鼻を衝かれるくらい充滿している。おさき真闇に盲動する汽車はあぶない標本の一つであ

る。

ステーション

停車場前の茶店に腰を下ろして、蓬餅よもぎもちを眺めながら汽車論を

考えた。これは写生帖へかく訳にも行かず、人に話す必要もないから、だまつて、餅を食いながら茶を飲む。

しようぎ

向うの床几しようぎには二人かけている。等しく草鞋わらじ穿きで、一人は

あかげつと

赤毛布あかげつと、一人は千草色ちくさいろの股引ももひきの膝頭ひざがしらに継布つぎをあてて、

たつた所を手で抑えている。

「やつぱり駄目かね」

「駄目さあ」

「牛のように胃袋が二つあると、いいなあ」

「二つあれば申し分はなえさ、一つが悪わるくなりや、切つてしまえば済むから」

草枕

この田舎者いなかものは胃病と見える。彼らは満洲の野に吹く風の臭におい

も知らぬ。現代文明の弊へいをも見認めぬ。革命とはいかなるものか、文字さえ聞いた事もあるまい。あるいは自己の胃袋が一つあるか二つあるかそれすら弁じ得んだらう。余は写生帖を出して、二人の姿を描かき取った。

じゃらんじゃらんと号鈴ベルが鳴る。切符きつぷはすでに買うてある。

「さあ、行きましたよ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃そろつて改札場かいさつばを通り抜けて、プラットフォームへ出る。号鈴ベルがしきりに鳴る。

轟ごうと音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇ちようだが蜿蜒のたくつて来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。

「いよいよ御別かれか」と老人が云う。

「それでは御機嫌ごきげんよう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出おいで」と那美さんが再び云う。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々の前われわれでとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出た  
り、這入はいつたりする。久一さんは乗った。老人も兄さんも、那  
美さんも、余もそとに立っている。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでに吾らが世の人ではない。  
遠い、遠い世界へ行ってしまう。その世界では煙硝えんしょうの臭いの中  
で、人が働いている。そうして赤いものに滑すべつて、むやみに転ころ  
ぶ。空では大きな音がどんどんと云う。これからそう云う  
所へ行く久一さんは車のなかに立って無言のまま、吾々を眺ながめ  
ている。吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出され  
た吾々の因果いんがはここで切れる。もうすでに切れかかっている。  
車の戸と窓があいているだけで、御互おたがいの顔が見えるだけで、行  
く人と留まる人の間が六尺ばかり隔へだたっているだけで、因果はも

う切れかかっている。

車掌が、ぴしゃりぴしゃりと戸を閉たてながら、こちらへ走つて来る。一つ閉てるごとに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もぴしゃりとしまった。世界はもう二つに為なつた。老人は思わず窓側まどぎわへ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練みれんのない鉄車てつしゃの音がごとりとりと調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、余等われわれの前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、髻ひげだらけな野武士が名残なごり惜気おしげに首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合みあわせた。鉄車てつしゃはごとりとりと運転する。野武士の顔はすぐ消え

た。那美さんは茫然ぼうぜんとして、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも今までかつて見た事のない「憐あわれ」が一面に浮いている。

「それだ！ それだ！ それが出れば画えになりますよ」と余は那美さんの肩を叩たたきながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄とつ嗟さの際さいに成就じゅうじゆしたのである。

## 後註

- 一 ルビの「こもそう」は底本では「こむそう」

草枕

底本：「夏目漱石全集 3」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 12 月 1 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 2 月 17 日公開

2007 年 5 月 28 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作に  
あたったのは、ボランティアの皆さんです。